

研究紀要 第二十八号 二〇二〇

研究紀要

第28号

2020

公益財団法人とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター

(公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化センター

研究紀要 第28号 目次

奥東京湾最奥部の貝塚研究 I

－縄文時代前期におけるヤマトシジミの採集活動について－

…………… 能登 健・塚本師也・藤井敏二・高見哲士 (1)

関東地方北東部における縄文時代中期前葉大木式系土器の縄文

－栃木県北部を中心として－

…………… 塚本師也 (15)

栃木県北東部における敷石住居の出現と柄鏡形住居の受容

－那須塩原市槻沢遺跡の発掘調査成果を中心に－

…………… 後藤信祐 (29)

栃木県域出土の初期須恵器集成

…………… 池田敏宏・内山敏行 (45)

とちぎの「茶の湯」を考える

－栗宮宮内遺跡出土小壺底部片の検討－

…………… 篠原浩恵 (67)

奥東京湾最奥部の貝塚研究 I

—縄文時代前期におけるヤマトシジミの採集活動について—

の と けん つかもともろ や ふじい としじ たかみ てつし
能登 健・塚本師也・藤井敏二・高見哲士

- | | |
|-----------------|-------------------|
| はじめに | IV. 盤州干潟と潟沼での観察結果 |
| I. 奥東京湾最奥部の地形概観 | V. 採集活動の分析 |
| II. 分析した遺跡 | おわりに |
| III. ヤマトシジミの計測 | |

縄文前期の奥東京湾最奥部の貝塚におけるヤマトシジミの採集活動の具体像を理解するために、篠山貝塚、清六Ⅲ遺跡、城山遺跡出土のヤマトシジミを分析した。ヤマトシジミは、殻長を1 mm単位として計測し、その大きさの出現率を棒グラフに示した。その結果、「篠山型」と「清六・城山型」に分類し、両者の基本的な差異は採集場所である汽水性干潟の生育環境によるものとした。

また、千葉県木更津市盤州干潟での生息状況観察と、茨城県茨城町潟沼でのシジミ漁師などからの聞き込み調査を加えて、具体的な採集活動を集落域に近接した定点的な「汽水性干潟」として、採集方法を「摘み採り」を主としてごく一部に「掬い取り」があったとした。

そして、奥東京湾の汀線後方の広大な地帯に様々な汽水性干潟が存在したことを示唆した。

はじめに

奥東京湾とは縄文時代前期の海進論で注目されている地域である。奥東京湾の考古学的研究は東木竜七や江坂輝弥の海進論でその研究方向が定着し、各地域で盛んに貝塚発掘が進められてきた⁽¹⁾。最奥部地域での貝塚発掘も盛んにおこなわれ、近年では『古河市史』にともなう諸研究で一応の画期を迎えた⁽²⁾。

本稿ではそれらの研究史とは別に、奥東京湾最奥部の縄文時代前期貝塚の基礎的研究の新視点を得るために、汽水域に生息するヤマトシジミの採集活動の具体像を理解することを目的にする。その方法は、この地域に分布するヤマトシジミを主体とする貝塚のうち3遺跡を選定して、その出土ヤマトシジミの計測値から何が見えてくるのかを模索するものである。

I. 奥東京湾最奥部の地形概観

奥東京湾最奥部の低地地帯は、現在の茨城県古河市、栃木県栃木市（旧藤岡町）・野木町・佐野市、群馬県館林市・板倉町、埼玉県加須市（旧北川辺町）一帯を指し、現利根川流路の北側一帯になる（図1）。主要部は巴波川と現在の渡良瀬川の合流地点にあたり、その後はさらに旧渡良瀬川と合流する広大な沖積低地で、標高は10～15m前後の範囲で、周辺台地との比高は7～10m程度である。

かつては広大な沼沢地と自然堤防が入り混じった低湿地帯であったが、現在は渡良瀬川の瀬替えや赤麻沼の埋没・渡良瀬遊水池の造成などにより、大きく自然環境が変化した。また、近年の圃場整備で散在する微高地が削平されたり、旧河道の痕跡が埋め立てられたりなどして、大きく微地形が変貌している。現在確認できる典型的な旧地形は、沖積低地と洪積台地との地形変換点のみであり、そこには台地の縁辺に発達した小規模な開析谷が数多く形成されていることも地図上で微かに判読できる。

この地域は縄文時代の前期海進地帯の最奥部である。現東京湾から最奥部の中心までの距離はおおよそ65kmであるが、海進時における満潮時の汀線については現利根川の南側までであったらうとの見解が多く、この最奥部は汀線の後方と考えられている。

II. 分析した遺跡

選定した遺跡は、この地域では前期の大貝塚と評価されている篠山貝塚、および、この地域で広範囲に発掘調査された遺跡のうち、典型的な地点貝塚とされる清六Ⅲ遺跡と城山遺跡の3遺跡である。ここでは、選定された3遺跡の立地を、のちに分析するヤマトシジミの生息地である汽水域と干潟との関係で述べ、さらに各遺跡で発掘されたヤマトシジミの出土状況を述べる。

篠山貝塚

この遺跡は、奥東京湾最奥部における前期貝塚のうちで最も貝層規模が大きい。遺跡は栃木市藤岡町藤岡字篠山に所在する。遺跡は東向きの台地末端に立地し、標高は22mで、東側の低地との比高は7mである。この遺跡は巴波川と思川によって形成され広大な沖積低地に面している。数回の発掘がおこなわれているが、1979年に栃木県立博物館建設準備の資料収集を目的にして発掘され、前期関山期の竪穴住居が検出された⁽³⁾。今回の分析資料としたものは、この住居内に廃棄集積された分厚い貝層で、住居廃絶後に貝の捨て場になっていたものである(写真1)。

この時の発掘調査は小規模であり、遺跡の全体像は把握できていないが、現地踏査では台地縁辺に沿って居住域が設定されているように見え、広範囲にヤマトシジミ主体の貝塚がある。遺跡全体の貝塚の広さ、貝層の厚さとともに、周辺に分布する貝塚の中では明らかに規模が大きく見える。

分析資料は、住居中央部で厚さ50cmの最も堆積厚のある部分で、上下層に二分割でブロックサンプリングされたものである。資料には、下層は住居床面の0cmから25cm、上層は25cmから50cmと記載されていた。資料は栃木県立博物館に収蔵されている。

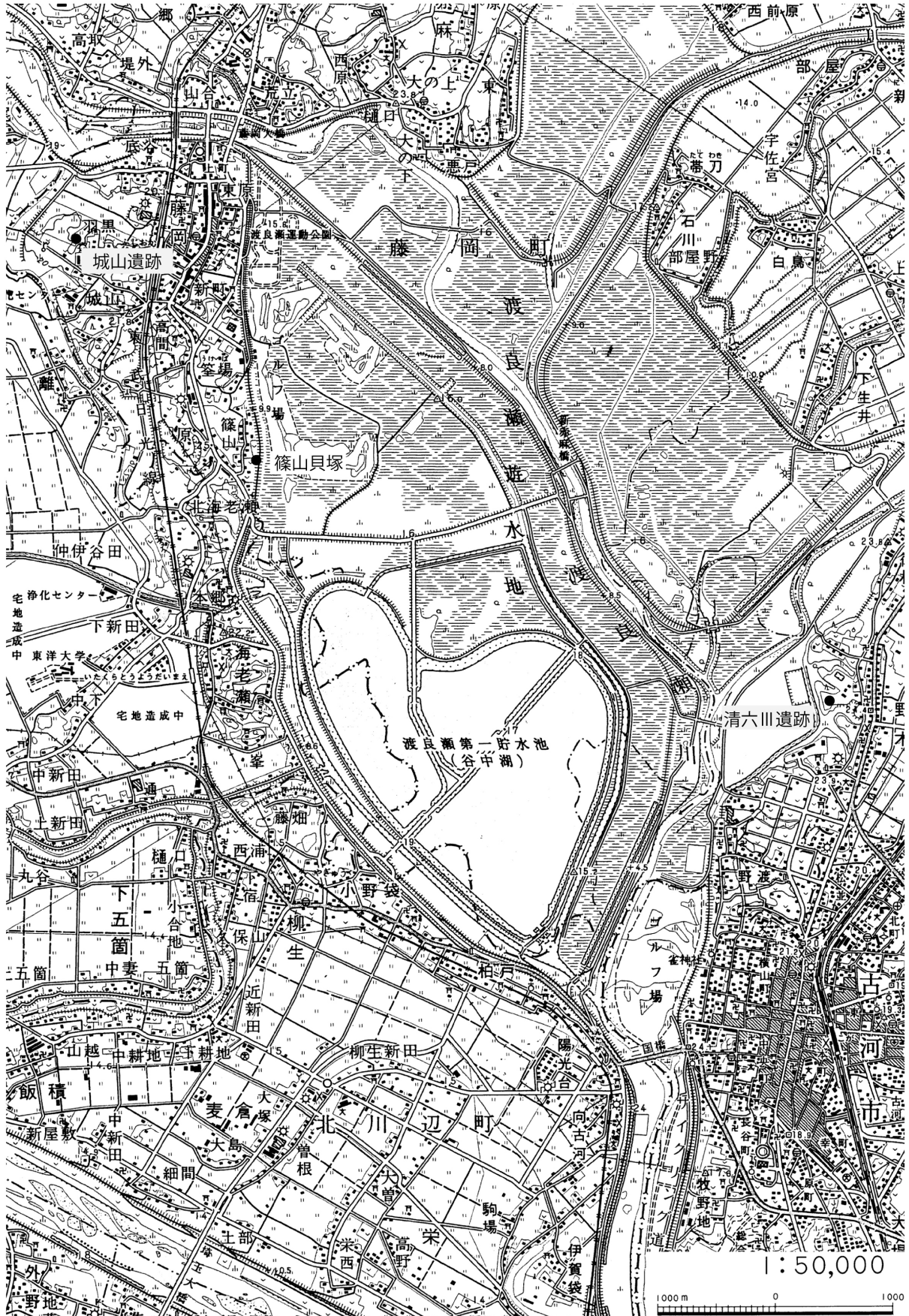
清六Ⅲ遺跡

遺跡は野木町字清六に所在する。台地縁辺に複雑な開析谷があり、その先に思川が流れている。1993年から95年にかけて発掘され、前期黒浜期では竪穴住居1軒のほか竪穴状遺構1、土坑5、埋甕1などが調査されている。前期集落の発掘範囲はほぼ100%といわれている。

ヤマトシジミ主体の貝塚は、住居内で2カ所、土坑内で2カ所が確認された。資料は洗浄され、報告書も刊行されている⁽⁴⁾。今回分析した資料はSK-235土坑内廃棄貝層である。この土坑は袋状を呈しており、その上半部に径50～70cmの範囲で貝が廃棄集積されていた(写真2)。ブロックサンプリングされたうちの(26)71-4第3貝層と標記されたものを計測した。資料は栃木県埋蔵文化財センターに収蔵されている。なお、かつて調査者がヤマトシジミ以外の貝が目立つ箇所を任意に抽出したが、このうち完形に近い個体は、アサリ232個、サルボウ3個であった。

城山遺跡

遺跡は栃木市藤岡町藤岡字^{ジョウヤマ}城山に所在する。旧渡良瀬川左岸の丘陵性地形に立地し、標高は21～22mで、前面の低地との比高は3m程度である。眼前の低地との間には複雑な開析谷が形成されている。発掘は1999～2000年におこなわれ、複合遺跡としての約3%が調査された。前期黒浜期では住居24軒、土坑は全体で137カ所が検出されており、調査者青木健二氏は「黒浜期の拠点集落」としている⁽⁵⁾。この中で、貝層の検出は50カ所に上っているのが注目される。この数は捨てられた貝殻の集積単位で、連続して繋がった大きな集積も1カ所として数えられている。小さい集積箇所は



第1図 奥東京湾沿岸分析遺跡位置図

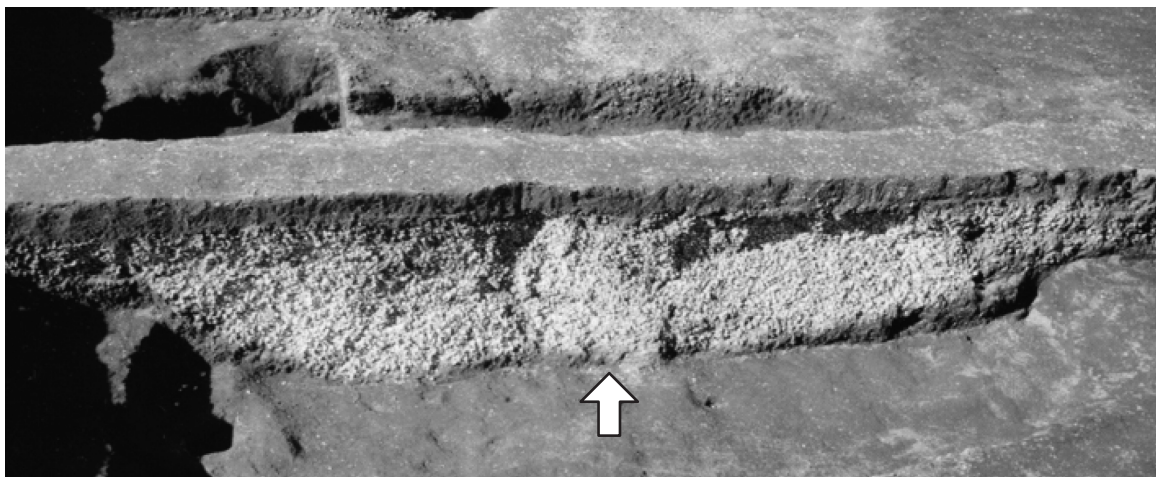


写真1 篠山貝塚1号住居(矢印はサンプリング地点)

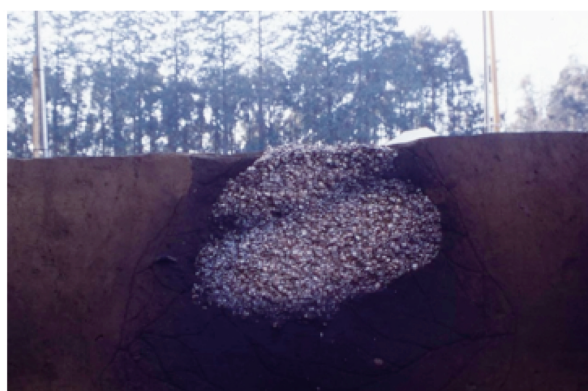


写真2 清六Ⅲ遺跡SK23号土杭(左) 同断面(右)

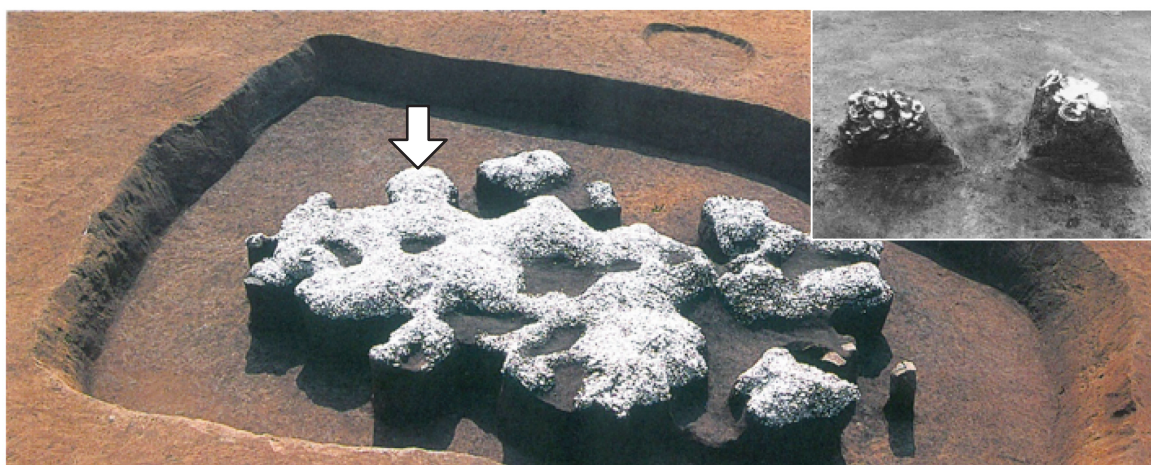


写真3 城山遺跡JT1号住居(矢印はサンプリング地点)および最少集積箇所(右上)

写真図版1 奥東京湾最奥部貝塚 貝層検出状況

一回分の残滓を思わせるものもある(写真3右上)。なお、この遺跡では前期後半の諸磯期や中・後期の生活痕跡を示す土坑もあるが、この時期の貝層はない。住居内廃棄は2カ所で、そのうちのJT1号住居内のJS1号とされた大型集積の一部を分析対象とした(写真3)。資料は栃木市教育委員会に収蔵されている。

この遺跡の特徴は、他の2遺跡に比べて鹹水産の貝類が多いことである。報告書に記載されたJT1号住居内のJS1号の集積中に混在している鹹水産貝類は、アサリ・ハマグリ・マガキ・カガミガイ・シオフキ・サルボウ・ハイガイ・オオノガイ・アカガイ・アカニシ他などである。それらのうち、ヤマトシジミの量は全体の99.6%だという。また、淡水産の貝類も少量ながら混じっていた。

Ⅲ．ヤマトシジミの計測

以上の3遺跡出土のヤマトシジミ計測は次のように進められた。最初に分析した篠山貝塚は、上下2層ともに棒グラフが富士山型の山形を呈していた。その計測結果を検証するために清六Ⅲ遺跡での追証を試みたが、ここでは両裾が欠失したものであった。さらに、この形態の異なる二つの計測結果の分析を試みるために城山遺跡の計測を追加することにした。その結果、城山資料は、清六Ⅲ遺跡の資料と同じ結果となり、篠山資料と清六Ⅲ遺跡・城山遺跡の資料が二分する計測結果が確定した。計測総数は表1に示した。

計測基準

各遺跡のヤマトシジミは発掘が終了して保管されているものであったが、それぞれの状況が異なった。篠山貝塚資料は、現地で採集されたまま未洗浄でコンテナに収納されていた。清六Ⅲ遺跡資料はブロックサンプリングされたものが洗浄され出土別に収納されていた。また、城山遺跡資料は現場から取り上げたまま、石灰華により固着した塊状のものであった。

計測資料は、それぞれから任意に抽出した。抽出されたサンプルは、まず左殻と右殻に別け、総量を把握し、数量の多い方を計測対象とした。なお、合弁資料も計測対象とした。計測は殻長についておこなった。計測単位は0.5mmとして四捨五入し、計測具は最小読取値0.1mmのノギスを使用した。計測結果

資料名		個数
篠山貝塚	1住 0～25 cm(下層)	2,555
	1住 25～50 cm(上層)	1,999
	小計	(4,554)
清六Ⅲ遺跡	SK235 土坑(26)71-1 第3貝層	1,563
	SK235 土坑(26)71-2 第3貝層	1,641
	SK235 土坑(26)71-3 第3貝層	1,798
	SK235 土坑(26)71-4 第3貝層	1,527
	SK235 土坑(26)70-2 第3貝層	1,731
	SK235 土坑(25)第3貝層	1,447
小計	(9,707)	
城山遺跡	JT1 号住居	1,233
盤州干潟	摘み採り	258
	ジョレン採集(掬い採り)	856
	小計	(1,114)
合計		16,608

は1mm単位として棒グラフにプロットし、出現数はグラフの各棒頂に記し、各計測数はグラフ右肩に表示した。結果は表2から表5で示す。

なお、この3遺跡の計測に加えて、盤州干潟の現生ヤマトシジミの計測値も作成した。計測対象は採集した生貝(生きていた貝)のみとした。計測方法については3遺跡と同様である。

計測結果

計測結果は、篠山貝塚と清六Ⅲ遺跡・

表1 貝層サンプルおよび生態調査ヤマトシジミ計測個数

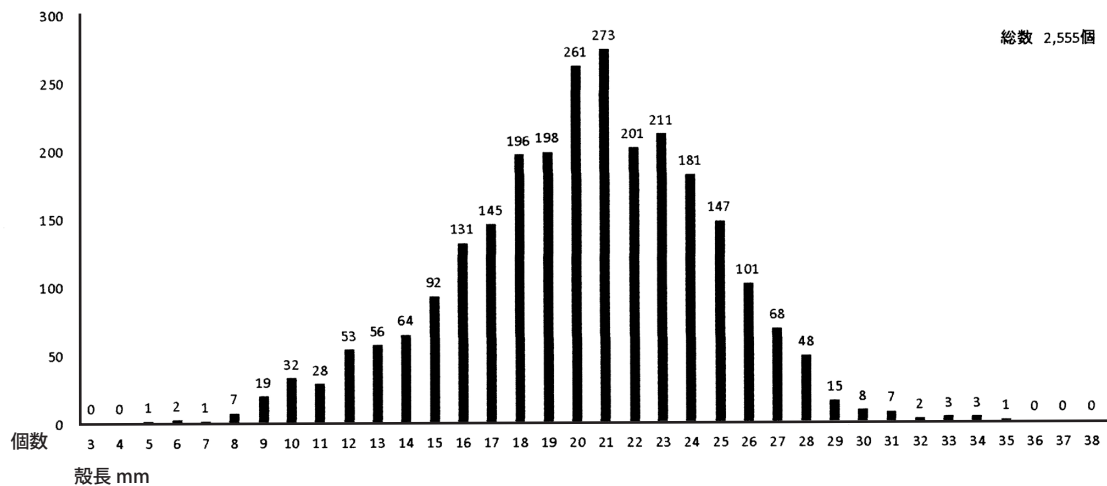


表2 篠山貝塚1住下層 (0～25cm) ヤマトシジミ計測表

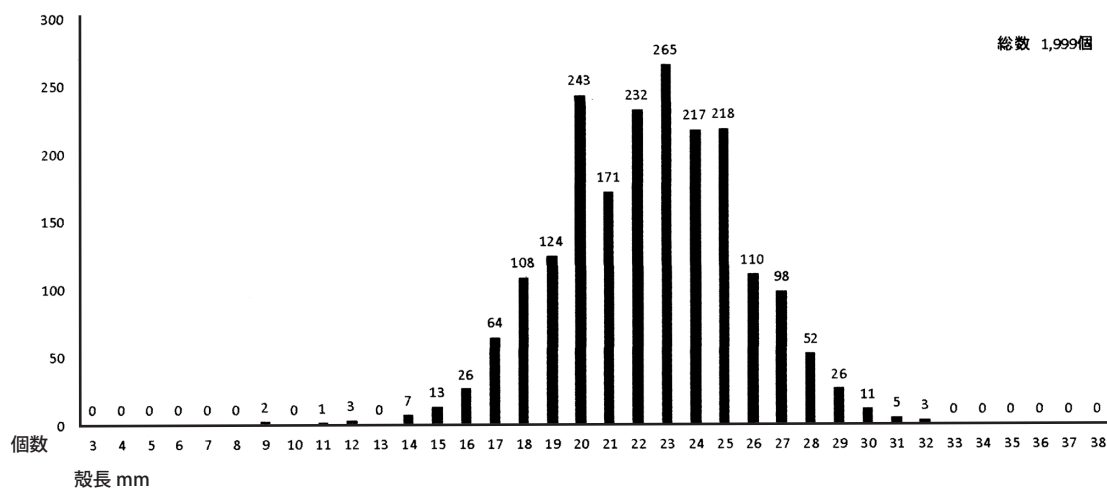


表3 篠山貝塚1住上層 (25～50cm) ヤマトシジミ計測表

城山遺跡で異なるグラフ形を示した。計測値の分析にあたって、作成されたグラフの計測値を、小型な幼貝である前方部(15mm以下)、採集が集中している中央部(16～28mm)、大型貝である後方部(29mm以上)に別けておく。

篠山型(表2・3)

篠山貝塚下層の計測値は殻長が5mmから35mmの中にある。最も数量の多かったものは21mmのところであり、棒グラフはここを頂点にして両側の前方部と後方部に向かって傾斜を示している。最小の出現は5mmにあり、最大は35mmになる。すなわち、前方部・中央部・後方部が連続する富士山型である。

これに対して、上層の棒グラフは9mmから32mmの中にあり、17mmから28mmのあいだが盛んに採られている。前方部は9mmから出現するが下層に比べて数が少なくなる。また、後方部では32mmまで出現するが下層に比べて小型化する。これは後に述べる清六型と城山型への移行を示しているのかもしれない。

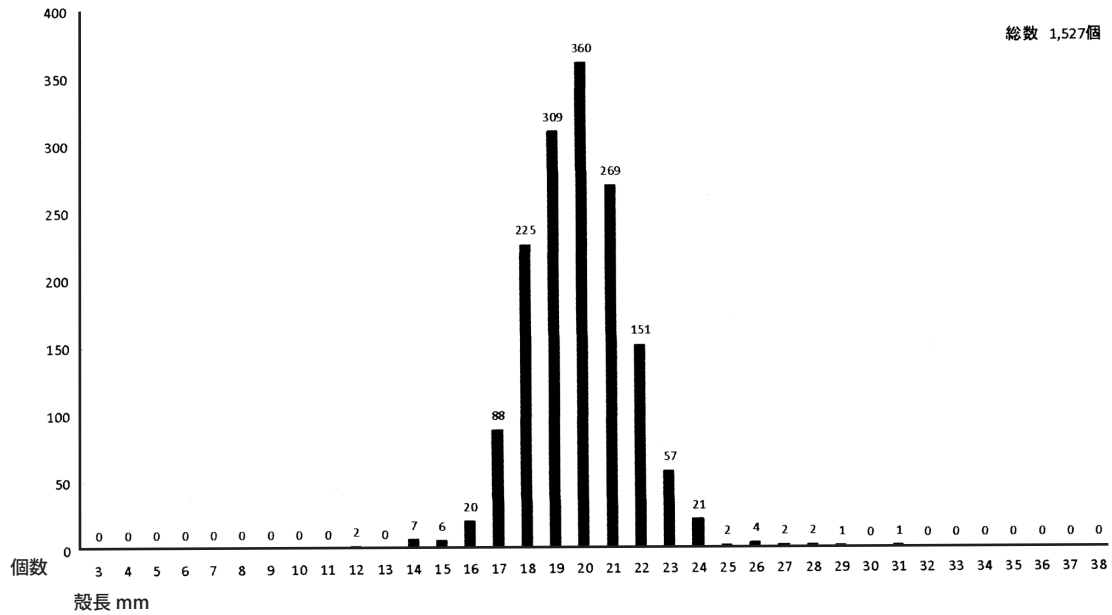


表 4 清六Ⅲ遺跡 SK235 第 3 貝層出土ヤマトシジミ計測表

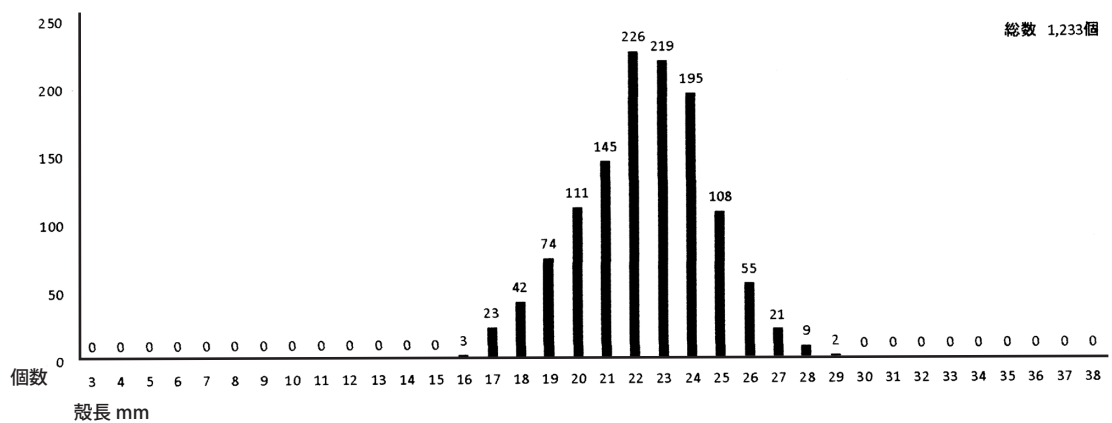


表 5 城山遺跡 JT1 号出土ヤマトシジミ計測表

清六型(表 4)・城山型(表 5)

ともに富士山型の両裾が欠落している。清六型は 16mm から 24mm までが中央部にあたる。前方部は 12mm から 15mm のあいだで、この間に 15 個しか見られない。一方、後方部では 25mm から 31mm のあいだで、この間に 12 個しか見られない。なお、清六Ⅲ遺跡では 6 ブロックを計測したが、その結果はすべてがほぼ同様のグラフ形を示したため、ここではそのうちの一例を示した。城山型は 17 mm から 28 mm までが中央部にあたる。前方部は 16mm で 3 個のみで、後方部では 29mm で 2 個のみである。

観察視点のまとめ

前方部にあたる 10mm 前後のものは小型な幼貝で食用にはむかず、意識的に採集されたものではなく、採集活動時の混入と考えられる。なお、採集地で幼貝が多くあるところは、繁殖に優位な自然環境であったところと考えて良いだろう。

後方部にあたる 29mm 以降は大型貝であり、食用に最も適したものであろう。しかし、干潟の棲息量・

繁殖量より採集活動が上回れば、大型貝から枯潟に向かい数が減る。篠山型の下層から上層にかけての微妙な変化はそれを示しているのかも知れない。

以上のことから、前方部の解釈は採集活動の方法にあり、後方部の解釈は生息状況と採集活動の関係に帰すことになる。ヤマトシジミの採集活動では、中央部の成員が最も採集されやすいことから、グラフ形ではこの辺りがピークになる。清六型と城山型はともにこの辺りにピークが見られるが、ややズレが見られる。これらの動向は選択的な採集活動ではなく、拾えるものはすべて対象であったと見るべきであろう。

IV. 盤州干潟と涸沼での観察結果

ここで、縄文時代のヤマトシジミの採集活動を考えるヒントを得るために、盤州干潟^{パンズ}と涸沼^{ヒヌマ}を選んで、現生ヤマトシジミの生態を検討することにする。

ヤマトシジミの生息域は、河川が海水域に接する汽水域になる。ヤマトシジミの生息状況は汽水域のうち、干潟と、干潟にならない水面下の二つがあり、その両者の違いを中心に観察するために、盤州干潟と涸沼を選定し、現地観察をおこなった。以下、両者の観察結果を述べる。

盤州干潟での観察

盤州干潟は千葉県木更津市畔戸地先にあり、現地観察は2013年から3年間を通して干潮時におこなった。東京湾に面した広大な盤州干潟のほとんどが鹹水性で、そこは潮干狩りのメッカになっている。このうち、ヤマトシジミの生息域は小櫃川右岸河口地域のみであり、河川堆積物による自然堤防状の堆積物で鹹水域と隔絶されている(写真4)。幅100m前後で、小櫃川に沿っておよそ500mの長さで汽水域干潟が形成されている。なお、ここでは商業的な採集活動はおこなわれていない。

この地点での鹹水性貝類はバカガイ・マガキ・カガミガイ・ツメタガイ・フジツボなどが確認できたが、いずれも満潮時に打ち上げられた死貝(貝殻)であり、ここでの生息は確認されていない。これらの鹹水産の貝類は生貝(生きている貝)として汽水域に辿り着いて、やがて死滅したものかも知れない。なお、ヤマトシジミの生息域で確認された生貝はイソシジミとウミニナ類のみであった。

干潮時の観察では、干潟は小櫃川から流下する土砂と海側から供給される細砂が混じった黄土色の砂土で、層厚は10～15cmである。その下層も砂土性であるが、青灰色に変わり鼻を刺す臭いがする。干潟の土壌が環境汚染されつつ、上位に新しい土壌が生成されている環境と感じた。ヤマトシジミは、このうち上層の黄土色の砂土層に生息している。

干潮時の日中には、ヤマトシジミは干潟の上に浮き出ている(写真5・6)。そこには同種の死貝も散在している。鹹水産の貝類が干潮時には砂中に潜んでいることと大きく生息状況が異なっていた。砂土内にも生息は確認できるが、その数は少なかった。生貝が干潮時に干潟上に出ていることは現地で得られた大きな観察点のひとつであり、奥東京湾におけるヤマトシジミ採集分析に関わる新視点を導入することになった。

通年の観察によって、春季から秋季にかけてはほぼ同じ状況で干潟上での採集ができたが、冬季は極めて少なく、ほとんど採れないという状況であった。12月の盤州干潟では、あたりに死貝が散乱していないことから死滅は考えられない。また、砂土中にも生貝はほとんどいない。越冬は場所を変えていると考えた方が合理的だろう。現在の盤州干潟は汚染が進んでおり、そのために深さ15cm以下の青灰色土砂は生息不能になっている。しかし、干潟ではかつてはもっと深くまで生息域だった可能性も想定すべきなのかも知れない。また、干潟では凍結の恐れもあるため、水温の安定している小櫃川の水の中への移動も考えられる。この件については、ヤマトシジミの生態的研究論文も見当たらない。今後の検討課題としておこう。



写真4 盤洲干潟 (後方は小櫃川)



写真5 盤洲干潟のヤマトシジミの生態

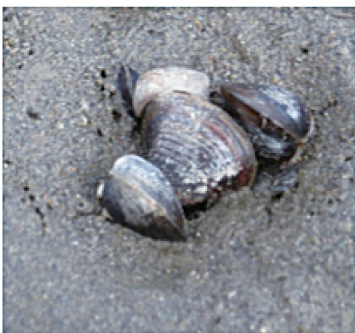


写真6 盤洲干潟のヤマトシジミ干潮時の生態



写真7 盤洲干潟でのジョレン採集風景

写真図版2 盤洲干潟におけるヤマトシジミ生態調査

表6・7は、盤州干潟で採集されたヤマトシジミの計測結果である。表6は、干潟上に出ているものを一日2人2時間で「摘み採り」したものである。12mmから35mmのあいだにあり、数を増やせば前方部が少ないものの篠山型のグラフ形になるのだろう。表7は、ジョレンによる砂土の「掬い採り」をして砂土を洗いだしたものを加えたもので数回の採集による合計である(写真7)。前半部の幼貝が急激に増加したのものになった。やや崩れてはいるが篠山型に近づいたことから、これによって篠山貝塚の採集活動が見えてきた。前方部の幼貝は食用には不向きであり、食用に供するヤマトシジミは「摘み採り」で得られる干潟上に浮き出ている貝で充分である。干潟上に浮き出ている貝が集中していた時に両手で「掬い採り」をすることによって砂土と共に幼貝が混入したものと考えられる。豊かな環境下での採集活動であったのだ。

涸沼での観察

涸沼は茨城県茨城町にあり、那珂川の河口に繋がっているために汽水湖になっている。ここでは、大涸沼漁業協同組合が組織され商業的なヤマトシジミ漁がおこなわれている。干潟差はほとんどなく、漁法はカッターと呼ばれるジョレンで舟上から漁をする。水面下であるために採集実験ができず、観察はシジミ漁師と漁連への聞き込み調査が主になった。

カッターの爪は5cmから8cmくらいで、この爪で湖底を掻き採りながらシジミを採集する。カッターの籠部分の網の目は12mmと決められており、岸から10mは採集禁止。漁は1日4時間で、日祭日は禁漁になっている。

シジミ漁師の野本一さん(S17年生まれ)は次のように語った。涸沼の底は中央部が河道になっていて、おおよそ3.5mぐらいの水深である。両側は湖岸から遠浅だが、深いところで1mぐらいである。この部分は砂利底が多い。那珂川に近づくと10mぐらいの深さになる。シジミはどこにもいるが、深いほうがあるので、若い人は深いほうで大量に採りたがる。あまり採るから、シジミが小さくなっているという。昔の湖底は土色だったが、今は真っ黒である。環境が悪化しているのだろう。これも採れなくなった原因の一つだろうという。ヤマトシジミ以外の貝は、近年の外来種以外はほとんどいないという。

冬は底が砂利のところはいくらかいるが、貝が泥の中へ潜ってしまうのでほとんど採れない。寒シジミは1日4時間で2kgぐらいしか採れない。10月ごろから採れなくなるが、4月ごろになるといくらか採れるようになる。寒期は移動ではなく潜っているのだろうと考えている。

汽水域では真水が上で下に塩水が溜まるが、あまり下だと塩分が濃くなってヤマトシジミは生育しにくい。涸沼の上流は真水なのでヤマトシジミは採れないという。

一方、若手シジミ漁師の長洲修児さん(S57年生まれ)は、次のように語った。シジミは川の方(平戸橋付近)に多くいる。ここは産卵場所でもあるという。深いところで11mぐらいある。普通、1日4時間で舟上カッターでは10~20kg採れる。舟上二人掛けでも100kgぐらい採れることがある。また、湖岸近くの水深1mの水中腰カッターでは80~100kgぐらい採れる。また、腰カッターは爪が10cm以上になり、冬はこの方法が採れやすい。水温が上がると浮くし、下がるとすぐ潜る。6月ごろから夏場はほとんど浮いてくる。「すぐ潜る」と表現しているのはなかなか採れない理由を、「10センチ足らずの爪に引っかからない」ことを「深く潜っている」からだと考えているのだろう。

漁協はヤマトシジミの放流目的で養殖している。担当者の桜井誠一さんは、次のように語った。ヤマトシジミは、水温が23°C、塩分濃度は0.9%の条件下で、6月下旬から7月上旬にかけて水槽内で産卵が始まるという。成貝で2~3年ものが産卵しやすい。1個の貝で10万から100万個の精子・卵子を出す。産卵後、肉眼では見えない小ささでプランクトンが水槽内を浮遊し1週間で貝の形になるが、この段階では顕微鏡で観察する大きさである。しばらくすると水槽に着底するが、約1カ月たつと肉眼で砂粒状に見

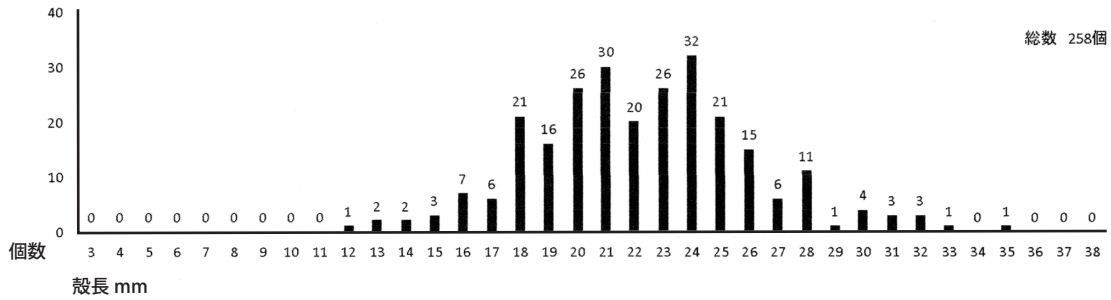


表6 盤洲干潟摘み採りヤマトシジミ計測表

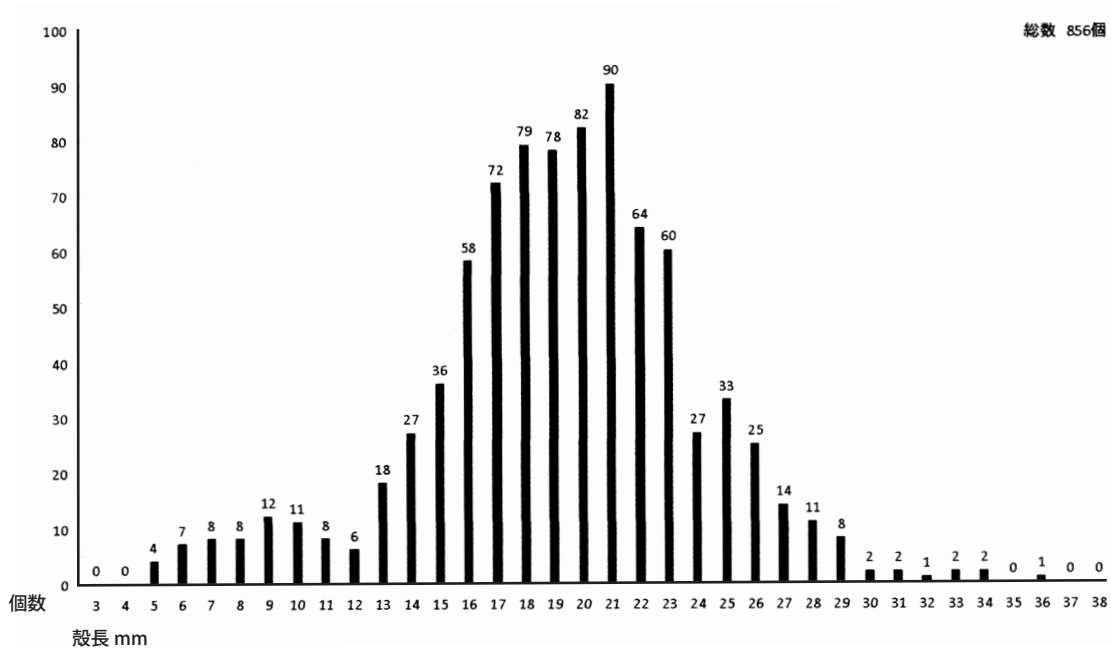


表7 盤洲干潟ジョレン採集ヤマトシジミ計測表

えてくる。ほぼ4カ月間の飼育で小指の爪の大きさになり、11月ごろに稚貝を放流する。放流してから3年ぐらいで12mm目のカッターによる収穫がおこなわれる。なお、潤沼では塩分濃度が0.8～0.9%程度が生育に良いという。平成25年に濃度が2.0%になり収穫量が激減した。塩分が高いと成長が遅れる。低すぎた場合は0.3%でも産卵はするが、貝にならずに死滅したことがあった。塩分が必要な時期はプランクトンのときである。この頃は裸のままだから塩分で守られるのだろう。貝になってしまうと真水でも生きられる。茨城県試験所では真水で飼っている。塩分が多くなると水管を出さないまま生き続けるが、成長が遅れる。塩分が0.9%だと、水槽にフジツボが発生するという。

なお潤沼では、魚類はコイ・フナ・ウナギ・マハゼ・ボラ・ウグイ・オイカワ・アユ・マルタ・アカエイ・テナガエビ・スズキ・シラウオ・クロダイ・サヨリ・クルマサヨリ・コトヒキ・ヒイラギ・サッパ・コノシロ・ヌマガレイ・ワカサギ・ギンガメアジ・スジエビ・ニゴイなどがある。コイ・ウナギ・アカエイ・クロダイはシジミを食べるといふ。

さらに、桜井さんはヤマトシジミの寿命は10年という。潤沼では殻長6cmのものが採れたことがあるがこの大きさは稀であり、テトラポットや漁民が近づかないところに生き延びていたのだろうと考えてい

る。北海道・青森では寿命は10年から15年といわれている。殻長が4～5cmに成長するのは5～6年かかるが、北海道・青森では7～8年といわれている。また、冬季は成長しないという。ヤマトシジミは砂泥中に10cmぐらい潜って越冬するという。産卵期は6月から8月にかけてであるという。

野本さんは、ヤマトシジミは「土用までは美味しいが、それ以降は身が細る」という。これは産卵後の状況を表したものだだろう。また、寒シジミは高値で取引されるというが、旬の味覚というよりも収穫量が激減することによって高騰するのだと思う。盤州干潟でも冬季はいなくなるが、その理由は分からずじまいである。しかし、冬季のヤマトシジミの生態についての話からは、縄文時代のヤマトシジミ採集活動も通年ではないことが示唆される。

現代では、涸沼とともに青森県十三湖や小川原湖、鳥根県宍道湖などの汽水湖でのシジミ漁は湖上でのカッター漁とともに湖岸の浅い部分で水中に入っただけの漁法もおこなっている。汽水湖におけるヤマトシジミの生育環境は干潟に比べて格段の豊かさがあるのだろう。しかし、縄文時代の関東周辺のヤマトシジミ主体貝塚の周辺に汽水湖の存在が想定できないことから、縄文時代のヤマトシジミ採集活動は干潟と思われる。この問題の解決については、今後の貝塚発掘時に汽水湖に特有な魚骨の検出作業も視座に入れることになるだろう。

V. 採集活動の分析

ここでは、計測結果と盤州干潟・涸沼での観察にもとづいて、縄文時代のヤマトシジミ採集活動の具体像を検討したい。また、それにもとづいて地点貝塚の意味についても見解を述べる。

3 遺跡の採集地点の想定とグラフの解釈

篠山貝塚は旧渡良瀬川と巴波川・思川の低地との間に形成されている台地上に立地しており、ヤマトシジミの採集活動は地形的に見て集落に近接した東側の広大な干潟であることが分かる。想定される干潟に接する台地の縁辺には小規模な侵食が見られるが、水流を伴う開析谷ほどには発達していない。干潟の広さは旧状が変化しており想定もできないが、貝塚の大きさから見ると、ほかの2遺跡にくらべて生息状況の豊かな干潟と思われる。

篠山貝塚の富士山型をしたグラフ形の意味は、ヤマトシジミの生育に適した豊かな干潟での採集活動を反映させており、盤州干潟の生息観察からも、前方部の存在は幼貝の定着する繁殖条件が整っていることを意味している。また、後方部の大型成貝の存在は採集活動で採集を免れた貝の存在を意味していることになる。すなわち後方部の存在は、ヤマトシジミが採集を逃れて寿命近くまで生き残れるものが出るほどに生息量が多いことを示している。

一方、清六Ⅲ遺跡は思川左岸にある台地上にあり、城山遺跡は旧渡良瀬川左岸の台地上にある。両地域に共通する地形は、河川に近く、台地縁辺には開析谷が複雑に発達したところである。ヤマトシジミの採集地点は眼下に広がる開析谷の谷口あたりになるのだろう。この部分は干潟が開析谷を流れる水流で分断され、生息環境が劣悪化していたために生息域自体が狭くなっていたと思われる。

盤州干潟では、中央部の成貝と後方部の大型成貝は干潟上に浮き出ている。しかし、前方部の幼貝は干潟上に出現していない。観察時の採集では、干潟上に浮き出ている貝は「摘み採り」をすることになる。また、干潟の砂土内の観察では小型のジョレンを使用して「掬い採り」を試みた。砂土内からはグラフ中央部と後方部にあたる貝も採集されるが、ここでは簀に入れて砂土を洗い流すと前方部にあたる幼貝も採集されていたことから、富士山型の前方部のあり方が理解できた。浮き出た貝が大量に集中しているときには、両手で掬い採りすることがあったのだろう。これらの観察視点が篠山型グラフの成立背景と考えられる。

清六Ⅲ遺跡と城山遺跡のグラフ形は前方部と後方が欠失していることが特徴であった。これについての解釈は、篠山貝塚での理解を裏返しすることで説明できる。すなわち、前方部の欠落は「掬い採り」をしていないことを意味している。また、後方の欠落は「摘み採り」の採集時に存在していなかったことを意味している。すなわち、干潟の環境がヤマトシジミの生育に適していなかったために、頻繁な採集活動によって大型になるまで生存が不可能になり枯渇してしまっていたのだろう。

なお、ヤマトシジミ主体の貝層の中に鹹水産の貝類が混入することについての見解も述べる必要があるだろう。篠山貝塚の計測資料中にはハイガイとマガキ・ウミニナが各 1 個混入していた。また、清六Ⅲ遺跡ではアサリ 2～3 個が混入していたが、合弁ではなかった。報告書によると城山遺跡では多種の鹹水産貝類が混入していたことが記載されているが、すべて少量である。また、鹹水産貝類のみの集積も見られないことから、鹹水域干潟への遠征的な採集活動は見えてこない。遺跡出土の鹹水産貝類は、汽水域干潟での混入と思われる。盤州干潟では満潮時に流れ着いたものがあつたが、死貝だけではなく生貝のまま流れ着くこともあるのかも知れない。その正鵠を得た解釈はできていない。

総合的な観察結果

以上のことから想定できる奥東京湾最奥部地域での縄文時代のヤマトシジミ採集活動を次のように考えた。

- ① 採集活動の方法は干潟採集であった。丸木舟による水面からの採集は、その道具が想定できないし非効率である。潜水漁法についても非効率である。また、奥東京湾最奥部のヤマトシジミ貝塚の立地から見ると至近な地点に汽水湖は想定できず、干潟地形を想定した方が理解しやすくなる。
- ② 地点貝塚の成立は至近な干潟での定点的な採集活動の結果である。篠山貝塚は、ヤマトシジミの生育環境の良好な干潟に接していたために大きな貝塚を形成した。これに対して、清六Ⅲ遺跡と城山遺跡では、生育環境の乏しい干潟に接していたために枯渇とともに採集活動が終了した。このことは、両遺跡はヤマトシジミの採集活動が食糧獲得の主なる手段でなかったことをも思わせる。地点貝塚の意味はここにある。
- ③ 鹹水産貝類の生育する干潟への遠征採集活動はなかった。3 遺跡とも鹹水産貝類の出土は極めて少なく、混在状況を示していた。また、鹹水産貝類のみの廃棄集積が見られないことから、遠征は考えられない。鹹水産貝類の混入は、満潮時に海水にとまって流されてきたのだろう。
- ④ ヤマトシジミの採集方法は、干潟上に浮き出たものを「摘み採り」していた。盤州干潟は幼貝が成貝になれる環境があり、さらには 10 年間の寿命を全うできる環境も備わった良好な生態環境があつた。このような生育環境での採集活動では、干潟上に大量のヤマトシジミがあり、筆者らの観察時にも散在するヤマトシジミを摘み拾いすることで採集ができた。また、盤州干潟の体験では、浮き上がったヤマトシジミが集中すると両手で掬い採ることになる。その際に砂土中にいた幼貝が混入することを見た。篠山貝塚では「掬い採り」も併用されていたことになる。
- ⑤ ヤマトシジミの採集活動の季節は春・夏・秋の 3 シーズンだった。鹹水性の貝類は四季を通じて同一地点で生息していることから通年の採集は可能であるが、ヤマトシジミの採集季節は冬季での同一地点での生息が見られないことから、漁期は春・夏・秋季の 3 シーズンになると考えられる。このことは盤州干潟と潤沼の観察から導き出された見解であるが、小池裕子の成長線解析でも同様の見解に至っている⁽⁶⁾。
- ⑥ グラフ形は干潟の自然環境を表している。ヤマトシジミは選択的に採集されていないことから、グラフ形はそのまま採集活動に耐えながらの繁殖状況を表しているのだろう。また、清六Ⅲ遺跡と城山遺跡はほぼ同様なグラフ形をしているが、中央部のピークがややずれている。これは、採集過多による枯渇

の方向性を示しているのかも知れない。さらに、篠山貝塚は関山期で清六Ⅲ遺跡と城山遺跡は黒浜期であることから、両者のヤマトシジミ採集活動の差は海退期における干潟環境の悪化を反映しているとの予想もしている。この問題解決は後稿を期すが、採集が至近な干潟を対象としている見方には変化はない。

- ⑦ 奥東京湾最奥部の環境は汽水域干潟地帯だった。奥東京湾最奥部については、どこまで縄文海進があったのかとの議論がある。ここでは、その問題を考古学的分析に立って、どこまで干潟が出現したのかとの視点に置き換えて検討をした。その結果、奥東京湾最奥部地域での貝塚分布は汽水域干潟を想定し得る干潟域の中にあると考える。これについても後稿を期したい。

おわりに

奥東京湾最奥部における縄文前期の貝塚分析を盤州干潟と涸沼での観察結果を合わせることによって、それぞれの遺跡周辺の自然環境によって各集落での採集活動に差があったことが分かった。また、その延長線上で縄文人のヤマトシジミの具体的な採集活動も見えてきた。このことは、この地域における縄文時代の生産活動分析にとって大きな一歩になるものと考えている。今後は、前期に先行する早期貝塚との比較検討および貝塚分布を前提にした当地域における遺跡間の構造分析を進めていきたいと考えている。

なお、ヤマトシジミの分析を進めるにあたって、資料分析に快諾をいただいた栃木県立博物館、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター、栃木市教育委員会に御礼する。また、貝類分析の方法についてご指導いただいた市原市埋蔵文化財調査センターの忍澤成視氏、ヤマトシジミの生活誌について有益なご教示をいただいた葉山しおさい博物館の倉持卓司氏の両氏には記して深甚から感謝を表します。

また、資料分析に便宜を計っていただいた橋本澄朗氏、上野修一氏、森嶋秀一氏、馬籠和哉氏、川又隆一郎氏、中山真理氏に感謝の意を表します。

〔註〕

註1 東木龍七「地形と貝塚分布より見たる関東低地の旧海岸線」地理学評論Ⅱ-7 1926

東木龍七「貝塚分布の地形学的考察」人類学雑誌 41-11 1926

江坂輝弥「南関東新石器時代貝塚より観たる沖積世に於ける海進海退」古代文化 14 1943

註2 小杉正人・金山喜昭・張替いずみ・樋泉岳二・小池裕子「古奥東京湾周辺における縄文時代黒浜期の貝塚形成と古環境」考古学と自然科学 21 1989

小池裕子「古河市黒浜期貝塚群の貝類分析 特にヤマトシジミの採集季節と貝殻成長速度の時代差について」

『古河市史資料原始古代編』1986

註3 栃木県教育委員会『栃木県藤岡市篠山貝塚発掘調査報告書』1981

註4 財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター『清六Ⅲ遺跡Ⅰ』1999

註5 日本窯業史研究所『栃木県藤岡町城山遺跡・城山南遺跡』2003

註6 小池裕子「篠山貝塚第1号住居跡内貝層のヤマトシジミの成長速度と採取季節について」注3文献に所収。

関東地方北東部における縄文時代中期前葉大木式系土器の縄文 —栃木県北部を中心として—

つかもと もろや
塚本 師也

- | | |
|--------------------|-------------------|
| はじめに | 3. 各遺跡の中期前葉の土器の縄文 |
| 1. 栃木県北部の中期前葉の土器様相 | まとめ |
| 2. 観察の対象 | |

縄文時代中期前葉に関東地方北東部では、阿玉台式土器と大木式系土器が共伴する。大木式系土器は、原則として縄文を施文し、2段LRの縄の縦回転施文が主流と言われている。筆者は茨城県北部の大木式系土器に直前段反撚りの縄があることに気づいた。阿玉台式土器は、前半期は原則として縄文を用いないが、Ⅲ式新段階に縄文を施文するようになる。阿玉台式の縄文受容の背景を考える際、共存する関東地方北東部の大木式系土器の縄文と比較する必要がある。そこで本稿では、栃木県北部の3遺跡の中期前葉大木式系土器を観察し、縄文の種類や施文方向の傾向を把握することにした。2段LRの縄が主体を占め、1段Lの縄、2段LRとRLの縄(交互施文)、2段RLの縄が少量存在する。また僅かに、前々段反撚りや3段RLRの縄もある。ほとんどが縦回転施文であり、わずかに口辺部のみ横回転施文したものがあつた。茨城県北部に見られた直前段反撚りの縄は、槻沢遺跡で1～2例確認されたにすぎなかった。三輪仲町遺跡や山苗代A遺跡では、2段LRの縄が約8割を占めた。槻沢遺跡では2段LRとRLで大きな差が無かつた。

はじめに

縄文時代中期前～中葉、栃木・茨城両県の北部では、阿玉台式土器と大木式系土器が共存する。阿玉台式土器は、I a式からⅢ式の前段階まで、原則として縄文が施文されない。一方、同時期に共存する大木式系土器は、ほとんどの土器に縄文が施され、2段LRの縄が主体と言われている。

筆者は、関東地方北東部の中期縄文土器に、前々段反撚りの縄等を用いた特徴的な縄文が、一定量存在することに気づき、自身が執筆する事実記載文や実測図に表現してきた。ところが、中期縄文土器は2段LRやRLの縄による単節斜縄文が主体と考えられており、報告書等の記載にも反撚り等の特徴的な縄文原体が指摘されることは少ない。近年、茨城県北部の中期前～中葉の大木式系土器の縄文に、縄文の条に深淺差があるものや、全体として条が不揃いなものがあることに気づいた。このような縄文は、直前段多条もしくは直前段反撚りの縄を用いたものと考えられる。

阿玉台式土器はⅢ式新段階に縄文を施文するものが表れ、次のⅣ式では、ほとんどの土器に縄文が施されるようになる。阿玉台Ⅲ式の縄文が、大木式の縄文を受容したのか、別の由来があるのかを考える際⁽¹⁾、両者の縄文を比較・検討することになるが、前述の特殊な縄文は、こうした問題を解明する際の糸口となる。

これまで筆者が、栃木県北部の該期大木式系土器の縄文を観察した経験上、茨城県北部に見られた条の深淺差を持つものや不揃いなものは、あまり見られなかつた。そこで、本稿では、栃木県北部の中期前葉大木式系土器の縄文を観察し、縄文原体の種類や施文方法等の特徴を把握することとしたい。そして今後は、八溝山地を隔てた茨城県北部の同時期の縄文を分析・比較して、その異同を明らかにしたい。

1. 栃木県北部の中期前葉の土器様相

筆者は昨年、栃木県北部の中期前～中葉の土器編年案を発表した(塚本 2019)。詳細は前稿に譲ることとするが、ここに概略を示す(第1図)。

阿玉台Ⅰa式期は、ほぼ阿玉台式で構成され、僅かに七郎内Ⅱ群土器等が伴う。阿玉台Ⅰb～Ⅱ式期も、阿玉台式が主体を占めるが、原体圧痕を施す土器、縄文地に隆帯や沈線で簡素な文様を施す土器及び七郎内Ⅱ群土器等の大木式系土器が少量伴う。続く阿玉台Ⅲ式古段階には、大木式系土器が増え、半数かそれ以上を占める。特に、七郎内Ⅱ群土器が爆発的に増える。阿玉台Ⅲ式新段階になると、阿玉台式の比率は少なくなり、七郎内Ⅱ群土器も存続するが、槻沢型、湯坂型、隆帯押捺型などが台頭し、火炎系土器も出現する。阿玉台Ⅳ式期には、大木式系土器の中で、槻沢型が安定的に存在し、七郎内Ⅱ群土器は低調になる。

2. 観察の対象

栃木県北部で、阿玉台Ⅰb～Ⅲ式土器と確実に共伴する大木式系土器で、縄文が施文されるものを観察対象とする。筆者は近年、縄文の有無によって、阿玉台Ⅲ式土器を新古に細分した(塚本 2013・2019)。阿玉台Ⅲ式古段階は、阿玉台Ⅱ式土器と共伴し、縄文が施されることはない。一方、阿玉台Ⅲ式新段階には、縄文施文された阿玉台Ⅲ式土器と施文されない阿玉台Ⅲ式土器の両者がある。阿玉台Ⅲ式土器、大木式系土器とも、1個体だけでは、阿玉台Ⅲ式古段階か新段階か判別できないものがある。そのため、今回は阿玉台Ⅲ式新段階までを観察対象とした。

3. 各遺跡の中期前葉の土器の縄文

(1) 品川台遺跡

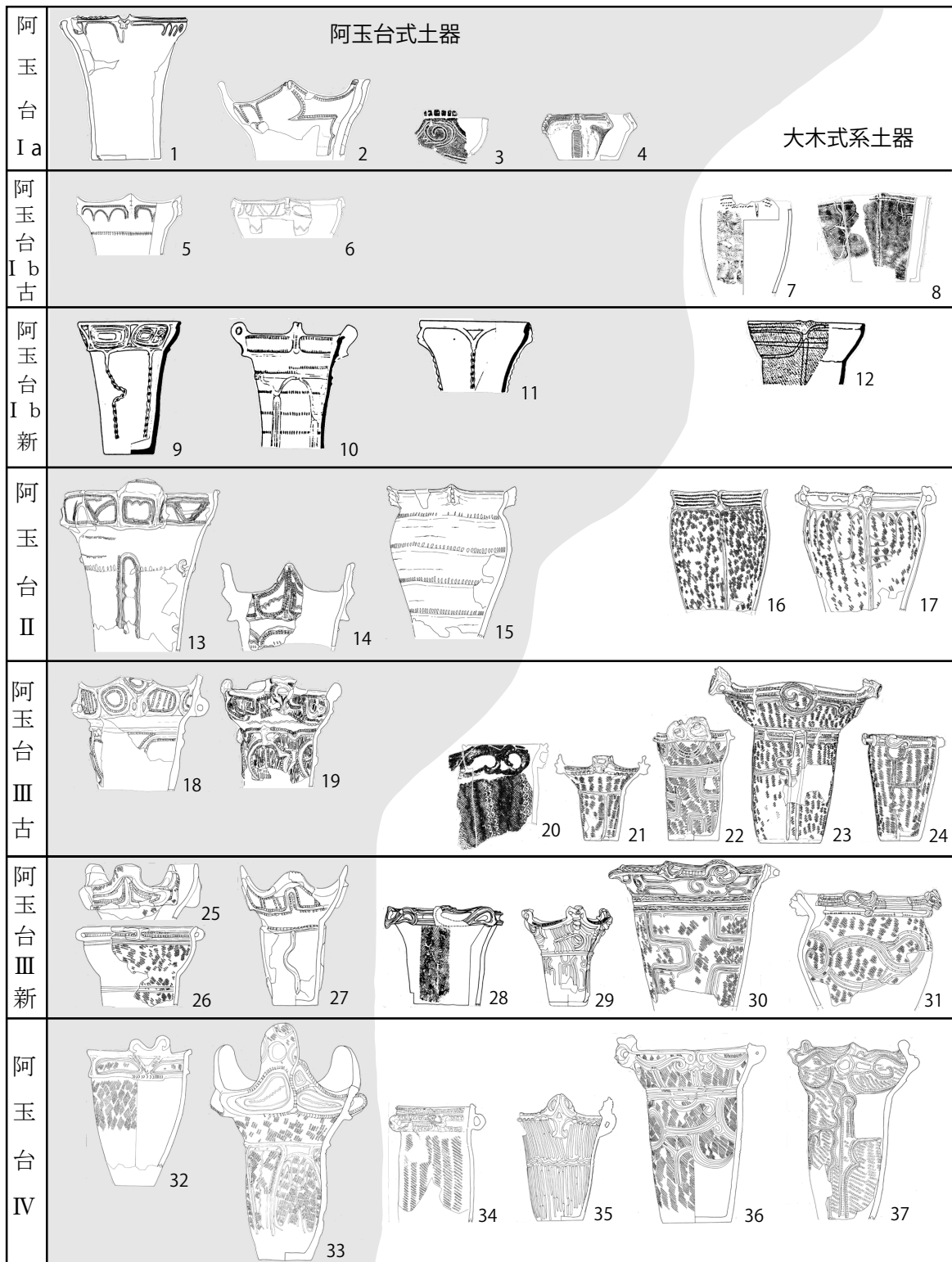
品川台遺跡は、栃木県大田原市蛭田(旧湯津上村)に所在する。那須野が原扇状地(台地)の扇端(南端)に当たり、箒川(那珂川の支流)左岸の河岸段丘上に立地する。昭和52(1977)年および平成元(1989)年に範囲確認調査が行われた。平成2～3(1990～1991)年には、工業団地造成に先立ち、財団法人栃木県文化振興事業団により記録保存のための発掘調査が実施され、報告書が刊行された(塚本 1992)。筆者は、この遺跡の調査および報告書作成を担当した。

調査した約7,000㎡の範囲に、阿玉台Ⅲ式古段階にほぼ限定される環状集落が存在した。9基の袋状土坑を取り囲む13基の居住施設(竪穴建物跡2棟、大形掘立柱建物跡1棟、炉を伴う柱穴群4基、炉が確認されなかった柱穴群6基)で構成された。

阿玉台Ⅱ式およびⅢ式土器と七郎内Ⅱ群土器を主体とする大木式系土器が出土した(第2図1～9)。出土した全破片を分析し、破片数における阿玉台式土器と大木式系土器の比率は4:7であった。また、大木式系土器の全てにおいて縄文原体の種類、施文方向を観察したところ、大半が2段LRの縄の縦回転施文で、少量2段RLの縦回転施文が存在し、その比率は8:1であった。そして僅かに横回転施文のものがあった。

(2) 槻沢遺跡

槻沢遺跡は、栃木県那須塩原市槻沢(旧西那須野町)に所在する。那須野が原扇状地の扇中央部にあたる。那須野が原扇状地には、北西から南東方向に細長い丘陵が存在するが、そのうちの「権現山丘陵」の北端部の平坦面、緩斜面上に立地する。大山史前学研究所による昭和8・10(1933・1935)年の調査、昭和27(1952)年の宇都宮大学郷土史研究班の調査および昭和52(1977)年の栃木県教育委員会による広域農道建設に伴う記録保存のための発掘調査が行われている(海老原 1980)。そして、平成3～5(1991～1993)年、広域農道建設に伴う記録保存のための発掘調査が、埋蔵文化財センターにより実施され、報告



1・4：仲内遺跡　2：坊山遺跡　3：何耕地遺跡　5・7：石関遺跡
6・8：山苗代A遺跡　9～12：地藏山遺跡　13～17・25～27・30・31：三輪仲町遺跡
18・19・21～24・29・32～37：槻沢遺跡　20：小鍋内遺跡　28：湯坂遺跡

第1図 那須地方を中心とする中期前葉の土器編年

書が刊行されている(後藤 1996)。今回観察する土器は、この調査時に出土したものである。

学史的にも著名な槻沢遺跡は、中期前葉から後期前葉にかけての大規模集落遺跡で、中期から後期にかけての袋状土坑、中期後半の竪穴建物跡の複式炉等が注目されてきた。

今回は、阿玉台Ⅲ式古段階の SK393 から出土した土器(第2図 10～28)のうち、縄文が施文された11点の土器を取り上げる。SK393 出土土器は、筆者が阿玉台Ⅲ式古段階とした栃木県北部における標準的な一括遺物である。大木式系土器が多く、少量の阿玉台式土器が伴う。大木式系土器は七郎内Ⅱ群土器が主体を占める。報告書では、器形復原可能な土器として、阿玉台式土器3点、七郎内Ⅱ群土器7点、槻沢型1点、隆帯押捺型の土器1点、浅鉢と鉢(阿玉台式系)5点、無文深鉢1点、縄文が施文された体部1点である。

現在、那須野が原博物館に保管されており、今回11点中9点について実物を観察できた。

縄文原体の種類および施文方向は、第1表に示したとおりである。2段LRの縄が5点で45.5%を占め、2段RLの縄が4点、両者を交互に施文するものが1点、直前段反撚りLLRが1点である。2段LRとRLの量比にあまり差がなかった。七郎内Ⅱ群土器に限定すると、2段LRが4点、2段RLが1点、両者を交互に施文するものが1点、直前段反撚りLLRが1点となる。七郎内Ⅱ土器では、2段LR優勢の傾向を指摘できるが、品川台遺跡ほどではない。もっとも、破片全点を分析した品川台遺跡と袋状土坑出土の器形復原可能な土器のみを対象とした今回の分析を、対等に比較することはできない。なお、1点の浅鉢形土器を除き、深鉢形土器の体部では、すべて縦回転施文であった。

筆者が茨城県北部の土器で注目した、反撚りによる条が不揃いな縄文(直前段反撚りLLR)を、栃木県那須地方で確認することができた。

(3) 三輪仲町遺跡

三輪仲町遺跡は、栃木県那須郡那珂川町(旧小川町)大字三輪に所在する。高原山麓から南東に伸びる喜連川丘陵は、東端を南流する那珂川に画され、那珂川と喜連川丘陵の間に、幅約1.5kmの南北に伸びる台地があり、三輪仲町遺跡はこの台地上にある。遺跡付近では、権津川(那珂川の支流)が、西北西から東南東に向かって流れ、遺跡はこの川が形成した支谷の南側に接する台地の縁辺に立地している。

過去に何度かの発掘調査が行われている。主立ったものとしては、昭和62～平成元(1987～1989)年の財団法人栃木県文化振興事業団による国道293号バイパス建設に先立つ記録保存のための発掘調査(第2次調査)、昭和63～平成元(1988～1989)年と平成8(1996)年の、小川町教育委員会によるバイパス建設によって孤立した農地の整備事業に先立つ記録保存のための発掘調査(第3・4次調査)がある。

遺跡は、旧石器、縄文、弥生、古墳、古代、中世の各時代に及ぶ。特に縄文時代中期前葉～後期前葉と古墳時代については集落規模が大きい。第2次調査では、縄文時代のものとして、竪穴建物跡18棟、土坑498基、埋甕3基、性格不明遺構8基を調査した。

今回は、第2次発掘調査(塚原 1994)の出土遺物のうち、阿玉台Ⅱ式期、Ⅲ式古・新段階の良好な一括遺物であるSK136・159・186・208・212・280・300・436・528a・545出土土器の縄文を観察・分析する。器形復原可能な土器と破片を合わせて50点を対象とした。2段LRの縄を縦回転施文したものが39点で、全体の78.0%であった。この中には、口辺部のみ横回転施文したのものもある。他に、1段Lの縄を縦回転施文したものが3点、2段LRとRLを交互に縦回転施文した条が綾杉状を呈すものが2点、2段RLの縄を縦回転施文したものが3点、3段RLRの縄を縦回転施文したものが3点ある。

時期(細別型式)別にみると、阿玉台Ⅱ式期では、12点中、2段LRの縄を縦回転施文したものが11点で91.6%を占め、1段Lの縄を縦回転施文したものが1点である。阿玉台Ⅲ式古段階は、5点中2段LRの縄を縦回転施文したものが3点で60.0%を占め、1段Lの縄を縦回転施文したものが1点、2段LRとRLの縄を交互に縦回転施文した条が綾杉状を呈すものが1点である。阿玉台Ⅲ式新段階では、24点中2段LRの縄を縦回転施文したものが17点で70.8%を占め、1段Lの縄を縦回転施文したものが1点、2

第1表 槻沢遺跡 SK393出土土器 縄文施文観察表

挿図	番号	出土場所	土器の型式・類別	時期	施文原体	施文方向等	実見
2	10	SK393	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式古	2段RL	縦回転間隔施文	○
2	11	SK393	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式古	2段LR	縦回転間隔施文	○
2	12	SK393	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式古	2段LR・RL	交互に縦回転間隔施文	
2	13	SK393	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式古	直前段反撚LLR	縦回転間隔施文	○
2	14	SK393	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式古	2段LR	縦回転間隔施文	○
2	15	SK393	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式古	2段LR ※直前段反撚りLLRもしくは直前段4条LRの可能性あり。	縦回転間隔施文	○
2	16	SK393	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式古	2段LR	縦回転間隔施文	○
2	17	SK393	槻沢型	阿玉台Ⅲ式古	2段RL	縦回転施文	○
2	18	SK393	隆帯押捺型	阿玉台Ⅲ式古	2段LR	縦回転間隔施文	○
2	19	SK393	縄文のみの体部	阿玉台Ⅲ式古	2段RL	縦回転施文	○
2	20	SK393	縄文施文浅鉢	阿玉台Ⅲ式古	2段RL	横回転施文	
2	21	SK393	阿玉台Ⅲ式古段階	阿玉台Ⅲ式古	—	—	—
2	22	SK393	阿玉台式	阿玉台Ⅲ式古	—	—	—
2	23	SK393	阿玉台Ⅲ式古段階	阿玉台Ⅲ式古	—	—	—
2	24	SK393	無文深鉢	阿玉台Ⅲ式古	—	—	—
2	25	SK393	阿玉台式浅鉢	阿玉台Ⅲ式古	—	—	—
2	26	SK393	阿玉台式浅鉢	阿玉台Ⅲ式古	—	—	—
2	27	SK393	阿玉台式浅鉢	阿玉台Ⅲ式古	—	—	—
2	28	SK393	無文鉢形土器	阿玉台Ⅲ式古	—	—	—

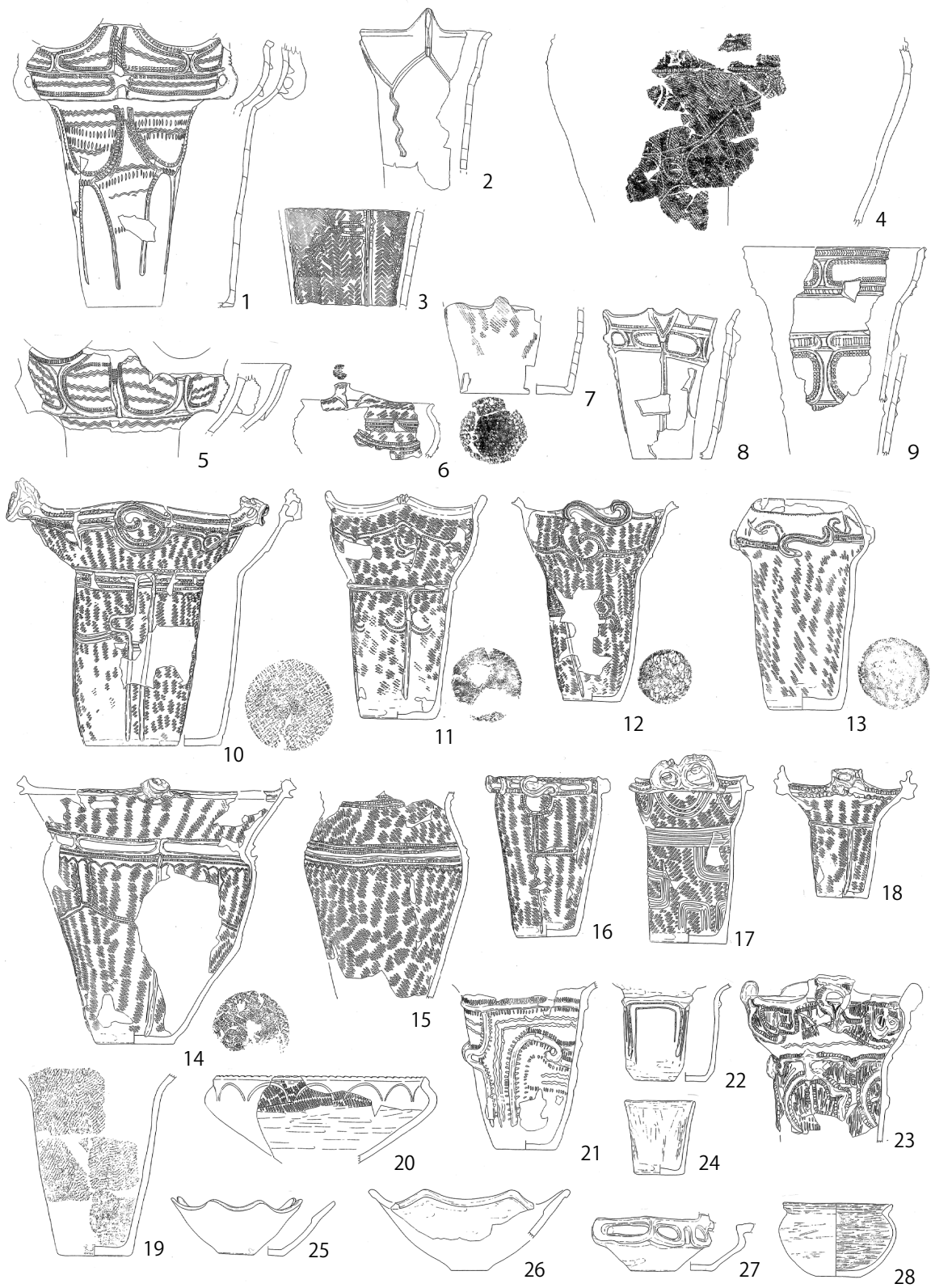
段 RL の縄を縦回転施文したものが3点、3段 RLR の縄を縦回転施文したものが3点である。新古に分けず阿玉台Ⅲ式全体では、37点中、2段 LR の縄を縦回転施文したものが27点で73.0%を占め、1段 L の縄を縦回転施文したものが2点、2段 RL の縄を縦回転施文したものが2点、2段 LR と RL の縄を交互に縦回転施文した条が綾杉状を呈すものが3点、3段 RLR の縄を縦回転施文したものが3点である。時期を問わず、七郎内Ⅱ群土器に限定すると、23点中2段 LR の縄の縦回転施文が18点で78.2%を占め、1段 L の縄の縦回転施文が1点、2段 LR と RL の縄を交互に縦回転施文した条が綾杉状を呈すものが1点、3段 RLR の縄の縦回転施文が3点である。

三輪仲町遺跡の中期前葉の全体的傾向として、2段 LR の縄を縦回転施文したものが8割前後を占め、他に1段 L、2段 RL、2段 LR と RL、3段 RLR の縄を縦回転施文してものがみられる。

(4) 山苗代A遺跡

山苗代 A 遺跡は、栃木県矢板市山苗代字堂山に所在する。高原山から南東方向に伸びる喜連川丘陵にある。喜連川丘陵は、北東を箒川に画され、南西から南部を荒川(いずれも那珂川の支流)が東南流し、中央部を内川(荒川の支流)が南東流する。内川とその支流により北西—南東方向の支谷が形成されている。この支谷に直交するように、小さな谷が多数存在し、全体が羊歯の葉を広げたような複雑な地形を呈している。遺跡は、小さな谷に挟まれた舌状台地上に立地する。

平成5(1993)年、工業団地造成事業に先立ち、造成地内約2,000㎡に対し、財団法人栃木県文化振

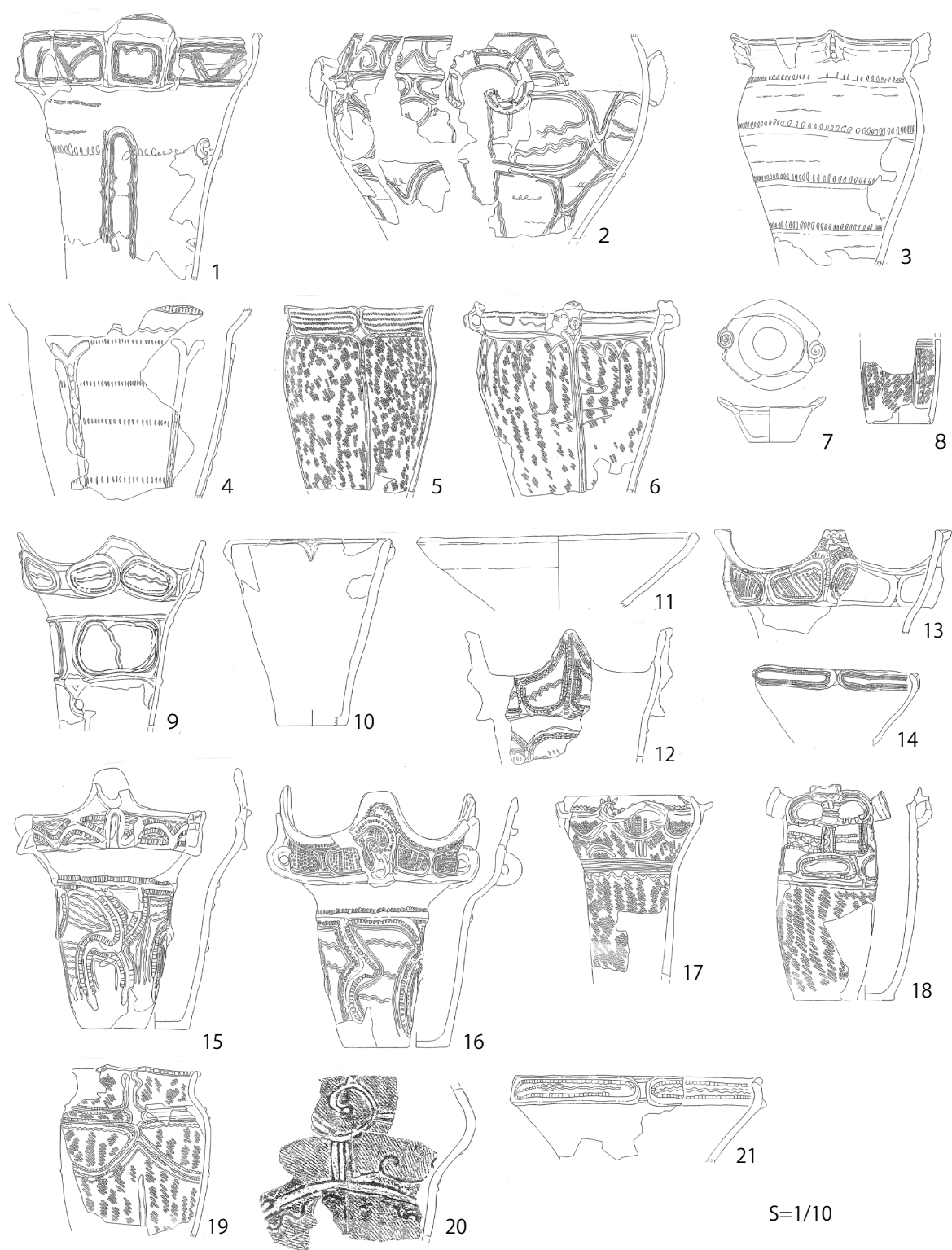


1~9 : 品川台遺跡

10~28 : 槻沢遺跡 SK393

S=1/10

第2図 品川台遺跡・槻沢遺跡 中期前葉の縄文土器



1～8 : SK136 9～11 : SK159 12～14 : SK545 15～19 : SK280 20・21 : SK208

第3図 三輪仲町遺跡 中期前葉一括遺物(1)



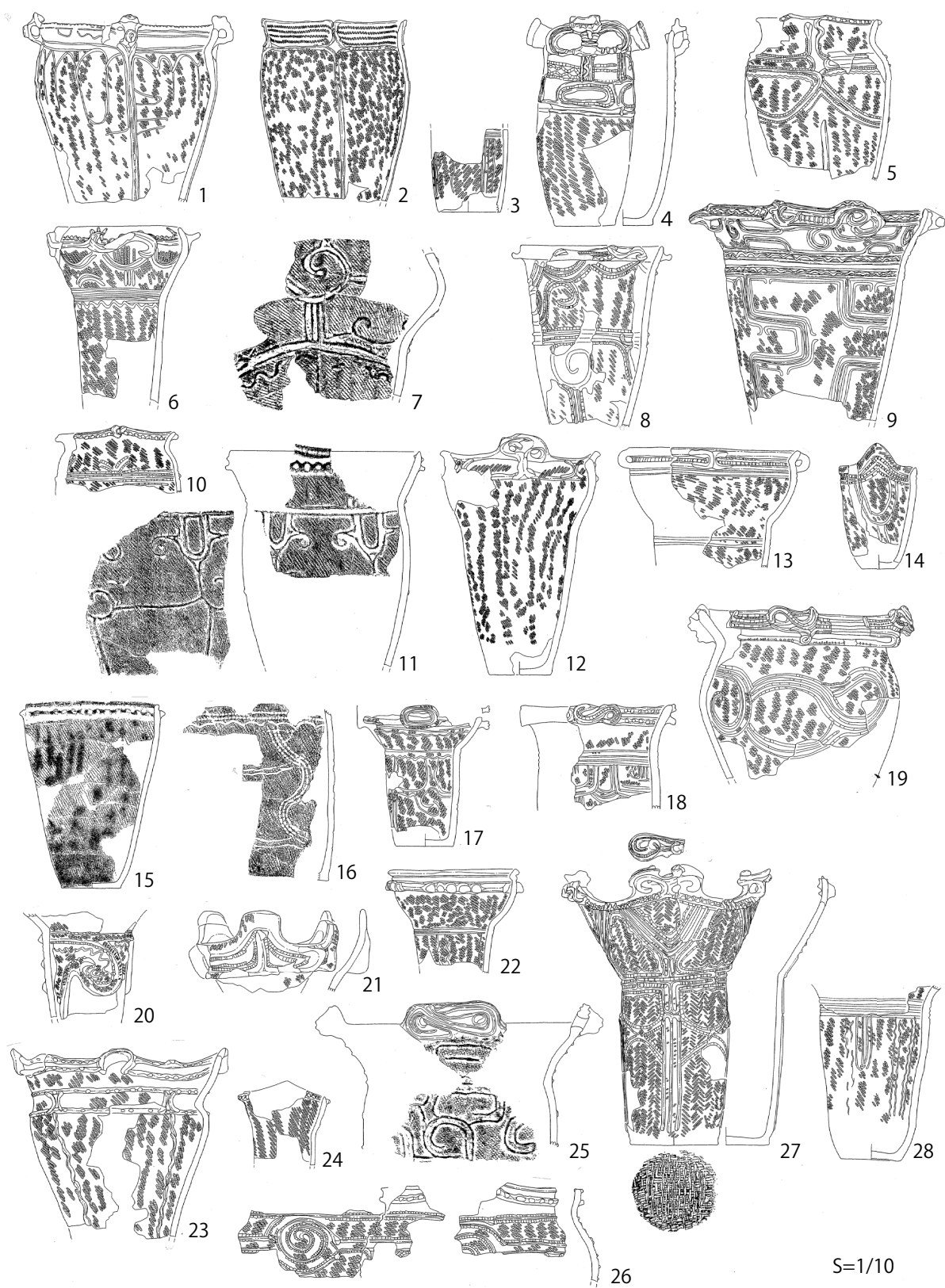
S=1/10

1~10 : SK212 11~14 : SK436 15~21 : SK528a
 22・23 : SK300 24・25 : SK186 26・27 : SK533a

第4図 三輪仲町遺跡 中期前葉 一括遺物(2)

第2表 三輪仲町遺跡出土土器 縄文施文観察表 (1)

挿図	番号	出土場所	土器の型式・類別	時期	施文原体・施文方向等	実見
5	1	SK136	縄文地に隆帯・沈線	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転間隔施文	○
5	2	SK136	原体圧痕	阿玉台Ⅱ式	2段LRの押捺、2段LRの縦回転間隔施文	○
5	3	SK136	縄文地沈線	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転間隔施文 ※加曽利EⅠ式期の混在の可能性あり	○
5	4	SK280	大木式系	阿玉台Ⅲ式古	2段LRの縦回転間隔施文	○
5	5	SK280	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式古	2段LRの縦回転間隔施文	○
5	6	SK280	槻沢型	阿玉台Ⅲ式古	2段LRの縦回転間隔施文 (条の深淺差がみられるが、撚り戻し、多条かどうかは判別できなかった。)	○
5	7	SK208	縄文地隆帯	阿玉台Ⅲ式古	1段Lの縦回転施文	○
5	8	SK212	槻沢型?	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
5	9	SK212	槻沢型	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	
5	10	SK212	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
5	11	SK212	坪井上型	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
5	12	SK212	縄文地隆帯	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転間隔施文。口縁部は横回転施文。	○
5	13	SK212	阿玉台Ⅲ式土器 (大木式とのキメラ)	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
5	14	SK212	阿玉台Ⅲ式土器	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	
5	15	SK436	隆帯押捺型	阿玉台Ⅲ式新	1段Lの縦回転間隔施文 (多条ではなく、2条撚りであることを確認)	○
5	16	SK436	縄文地に条線	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
5	17	SK528 a	坪井上型	阿玉台Ⅲ式新	2段RLの縦回転間隔施文	
5	18	SK528 a	坪井上型	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文 (摩耗していた。)	○
5	19	SK528 a	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	2段RLの縦回転間隔施文	
5	20	SK528 a	阿玉台Ⅲ式土器	阿玉台Ⅲ式新	2段RLの縦・横回転施文 (節が細く、細い節と太い節が交互に繰り返す。施文幅せ狭く、節が何条おきに繰り返すか把握できなかった。0段多条、前々段反撚りの可能性も否定できない。)	○
5	21	SK528 a	阿玉台Ⅲ式土器	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	
5	22	SK528 a	阿玉台式と大木式のキメラ	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転間隔施文	
5	23	SK300	縄文地に隆帯	阿玉台Ⅲ式	2段LRの縦回転間隔施文	○
5	24	SK300	隆帯押捺型	阿玉台Ⅲ式	2段LRの縦回転間隔施文	○
5	25	SK533a	中空突起+隆帯	阿玉台Ⅲ式	2段LRの縦回転間隔施文 (硬く粗い繊維で撚ってあるため、単節か無節か区別が困難であった。)	○
5	26	SK533a	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式	2段LRの縦回転間隔施文	○
5	27	SK186	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式	2段LRとRLを交互に縦回線施文	○
5	28	SK186	縄文地に沈線	阿玉台Ⅲ式	2段LRの縦回転間隔施文 ※加曽利EⅠ式期の混在の可能性あり	○



第5図 三輪仲町遺跡 中期前葉繩文施文土器(1)

第3表 三輪仲町遺跡出土土器 縄文施文観察表 (2)

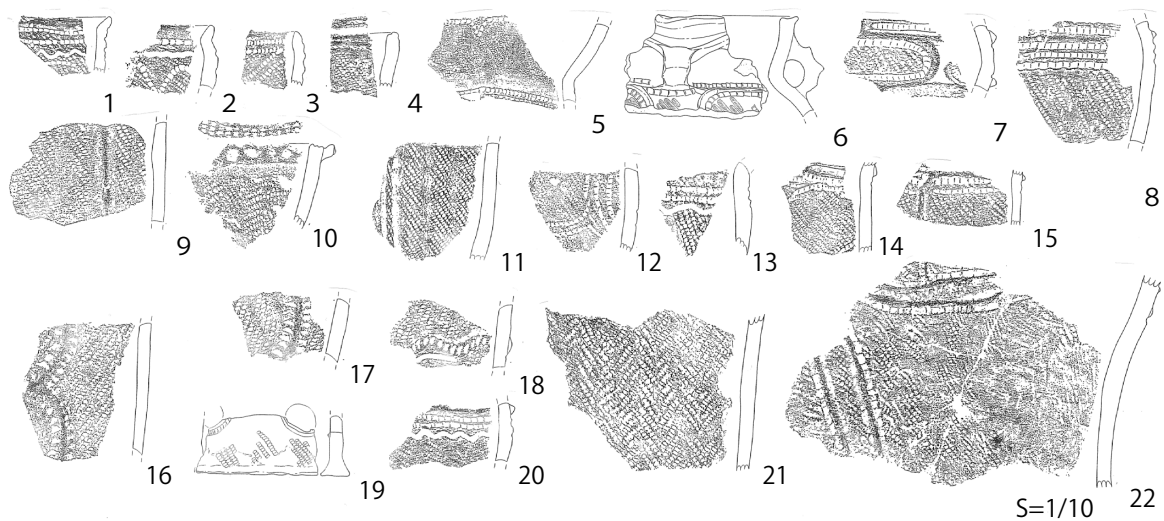
挿図	番号	出土場所	土器の型式・類別	時期	施文原体・施文方向等	実見
6	1	SK136	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転施文	
6	2	SK159	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転施文	○
6	3	SK159	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転施文	○
6	4	SK159	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転施文	○
6	5	SK159	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転施文	○
6	6	SK545	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅱ式	1段Lの縦回転施文	
6	7	SK545	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転施文	○
6	8	SK545	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転施文	○
6	9	SK545	縄文地に垂下隆帯	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転施文	○
6	10	SK208	隆帯押捺型	阿玉台Ⅲ式古	2段LRとRLを交互に縦回転施文	○
6	11	SK436	縄文地に垂下隆帯	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
6	12	SK436	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
6	13	SK436	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
6	14	SK436	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
6	15	SK436	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
6	16	SK436	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	3段RLRの縦回転施文（極太の粗い繊維による2段RLの可能性あり）	○
6	17	SK436	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	16と同じ（同一個体）	○
6	18	SK436	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	3段RLRの縦回転施文	○
6	19	SK436	七郎内Ⅱ群土器 （有孔脚部）	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文（摩耗が激しく、観察困難）	○
6	20	SK533a	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式	2段LRの縦回転施文（摩耗が激しく、観察困難）	○
6	21	SK533a	縄文のみの体部片	阿玉台Ⅲ式	2段LRとRLを交互に縦回転施文	○
6	22	SK533a	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式	2段LRの縦回転施文（条の深淺差があり、直前段反摺りの可能性があるが、条の交差が確認できなかった。）	○

興事業団埋蔵文化財センターが、記録保存のための発掘調査を実施し、報告書が刊行されている（進藤1996）。

縄文時代早期中葉、前期中葉、中期前葉および平安時代初頭の集落跡で、縄文時代中期の袋状土坑29基と平安時代初頭の竪穴建物跡3棟と土坑3基を調査した。

阿玉台Ⅰb式古段階～阿玉台Ⅲ式古段階の良好な一括遺物に恵まれており、今回は第2・5・11・14・21・25・26・31号土坑出土土器を分析・観察する。

器形復原可能な土器と破片を合わせて17点を対象とした。2段LRの縄を縦回転施文したものが15点で、88.2%を占めた。他に1段Lの縄を縦回転施文したものが1点、前々段反摺りLRRの縄を縦回転施文したものが1点ある。時期（細別型式）別にみると、阿玉台Ⅰb式古段階は、2点中2点が2段LRの縄を縦回転施文したものの、阿玉台Ⅰb式新段階では、5点中4点が2段LRの縄を縦回転施文したもので、他1点が前々段反摺りLRRの縄を縦回転施文したものである。新古を分けず、阿玉台Ⅰb式期とすると、9点中8点が2段LRの縄を縦回転施文したもので、88.9%を占める。



1 : SK136 2~5 : SK159 6~9 : SK545 10 : SK208 11~19 : SK43 20~23 : SK533 a

第6図 三輪仲町遺跡 中期前葉縄文施文土器 (2)

山苗代 A 遺跡では、中期前葉には、8割以上9割近くが、2段 LR の縄を縦回転施文しており、他に1段 L と前々段反撚り LRR を縦回転施文してものがある。

まとめ

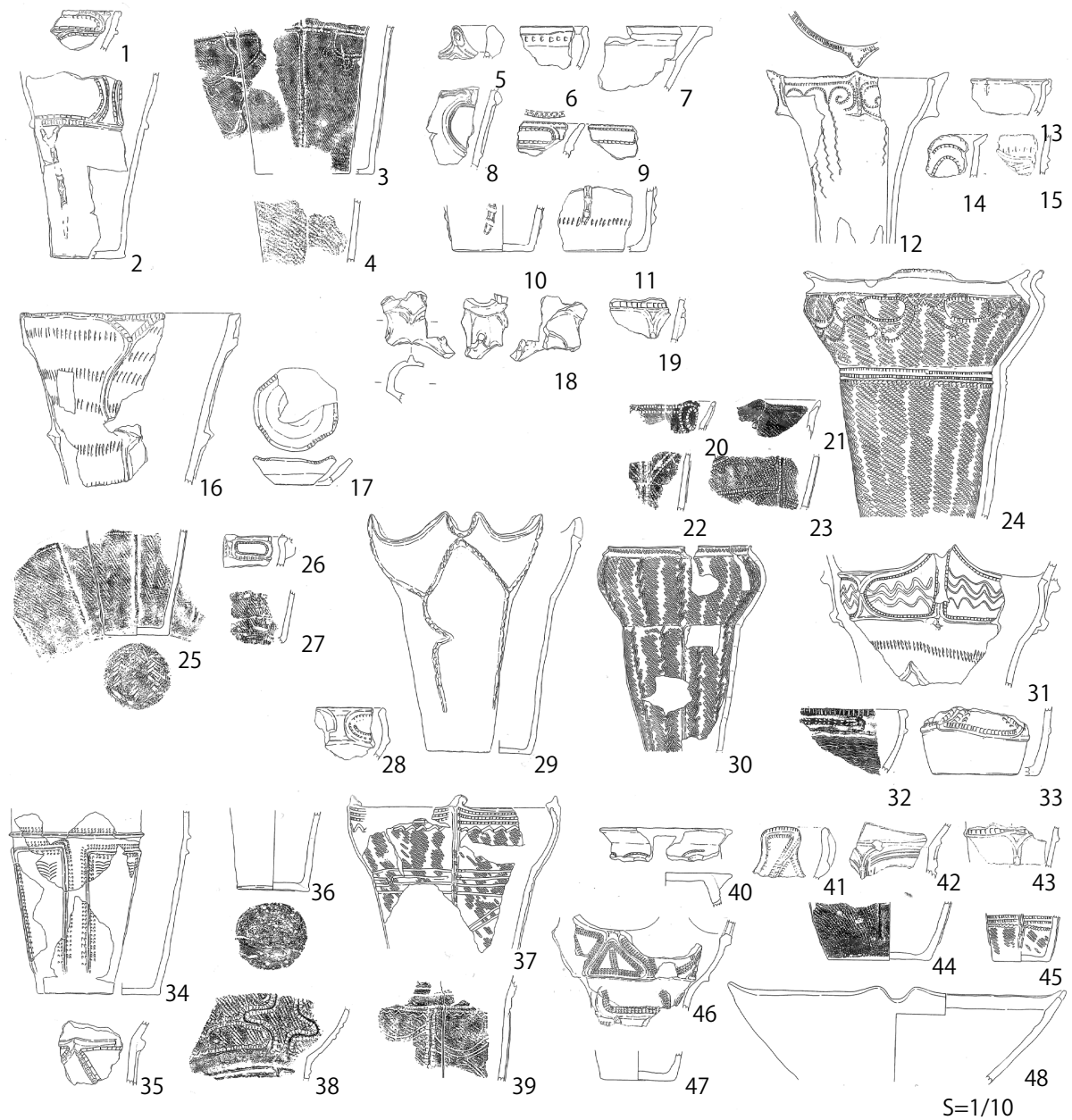
今回、栃木県北部の槻沢遺跡、三輪仲町遺跡、山苗代 A 遺跡の中期前葉(阿玉台 I b ~ III 式期)の大木式系土器および阿玉台式土器 78 点に施文された縄文を、分析・観察した。以前に分析した品川台遺跡と三輪仲町遺跡、山苗代 A 遺跡は似たような傾向が見られた。大木式系土器では8割以上が2段 LR の縄を縦回転施文したもので、これに2段 LR と RL を交互に縦回転施文した条が綾杉状のもの、2段 RL の縄を縦回転施文したものの、1段 L の縄を縦回転施文したものが伴う。また、3段の縄や前々段反撚りの縄を縦回転施文したのものもあった。一方、槻沢遺跡 SK393 では、2段 LR の縄の縦回転施文による単節斜縄文の比率が、50%以下と少ない。筆者が茨城県北部で注目した、直前段反撚りの縄による条が不揃いな縄文は、槻沢遺跡 SK393 で1~2例確認されたにすぎず、他の3遺跡では確認できず、低調であることがわかった。

【註】

註1 堀越正行は、阿玉台式の縄文受容にあたっては、大木式の LR ではなく、敢えてそれと反する RL としたという、重要な指摘を行っている。

【参考文献】

- 海老原郁雄,1980,『栃木県埋蔵文化財調査報告第34集 槻沢(つきのきざわ)遺跡-栃木県那須郡西那須野町-』栃木県教育委員会
- 後藤信祐,1996,『栃木県埋蔵文化財調査報告第171集 槻沢遺跡Ⅲ 県営圃場整備事業「井口・槻沢地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会
- 進藤敏雄,1996,『栃木県埋蔵文化財調査報告第177集 小丸山古墳群 山苗代 A・C 遺跡 矢板市矢板南地区工業用地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会



1~4：第2号土坑 5~11：第11号土坑 12~15：第21号土坑 16~24：第5号土坑
 25~27：第26号土坑 28~30：第31号土坑 31~39：第25号土坑 40~48：第14号土坑

第7図 山苗代A遺跡 中期前葉 一括遺物

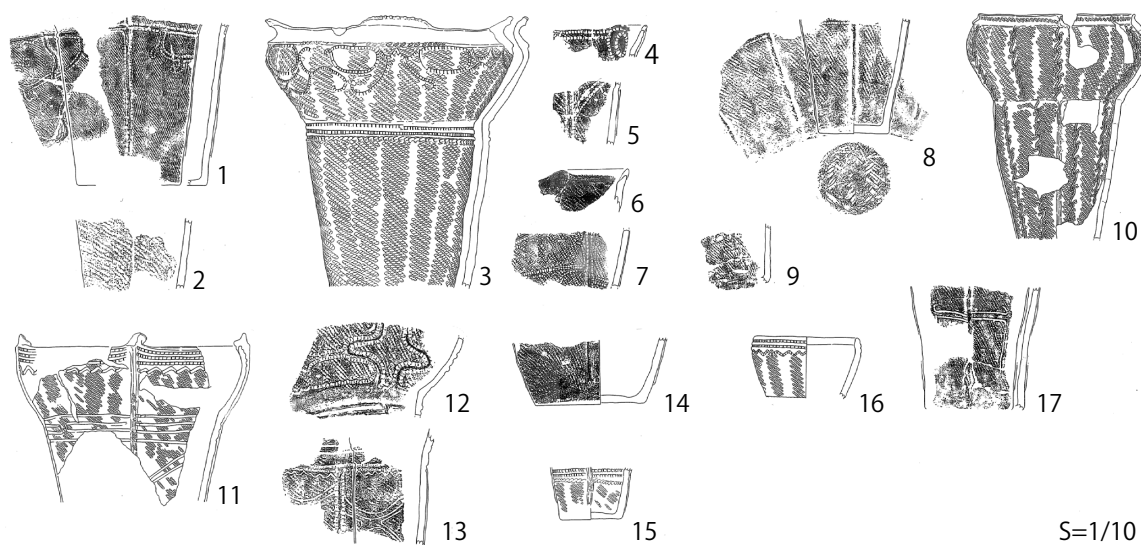
塚原孝一,1994,『栃木県埋蔵文化財調査報告第143集 三輪仲町遺跡 一般国道293号の道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会

塚本師也,1992,『栃木県埋蔵文化財調査報告第128集 品川台遺跡 品川代行業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会

塚本師也,2013,「第10回 阿玉台式土器の細分(4)」『アルカ通信』NO.122,考古学研究所(株)アルカ

塚本師也,2019,「栃木県北部における縄文時代中期前~中葉の土器編年」『研究紀要』第27号,公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター

堀越正行,2008,『千葉の貝塚に学ぶ』



第8図 山苗代A遺跡 縄文施文土器

第4表 山苗代A遺跡出土土器 縄文施文観察表

挿図	番号	出土場所	土器の型式・類別	時期	施文原体・施文方向等	実見
8	1	第2号土坑	七郎内II群土器	阿玉台I b 古	2段LRの縦回線施文	
8	2	第2号土坑	縄文施文体部	阿玉台I b 古	2段LRの縦回線施文（硬く粗い繊維を擦っているため、節が不明瞭。1段Lの可能性あり。）	○
8	3	第5号土坑	七郎内II群土器	阿玉台I b 新	前々段反撚りLRRの縦回転施文	○
8	4	第5号土坑	七郎内II群土器	阿玉台I b 新	2段LRの縦回転施文	○
8	5	第5号土坑	七郎内II群土器	阿玉台I b 新	2段LRの縦回転施文	○
8	6	第5号土坑	全面縄文	阿玉台I b 新	2段LRの縦回転施文	○
8	7	第5号土坑	七郎内II群土器	阿玉台I b 新	2段LRの縦回転施文	○
8	8	第26号土坑	七郎内II群土器	阿玉台I b	2段LRの縦回転間隔施文	○
8	9	第26号土坑	縄文施文体部	阿玉台I b	2段LRの縦回転施文	
8	10	第31号土坑	原体圧痕	阿玉台II	2段LRの縦回転間隔施文	○
8	11	第25号土坑	七郎内II群土器	阿玉台I b～II	2段LRの縦回転施文	○
8	12	第25号土坑	七郎内II群土器	阿玉台I b～II	2段LRの縦回転施文	○
8	13	第25号土坑	七郎内II群土器	阿玉台I b～II	1段Lの縦回転施文（硬く粗い繊維で擦ってあるため、節が不明瞭。2段LRの可能性あり。）	○
8	14	第14号土坑	縄文地縦位隆帯	阿玉台III古	2段LRの縦回転施文	○
8	15	第14号土坑	七郎内II群土器	阿玉台III古	2段LRの縦回転施文	○
8	16	第17号土坑	七郎内II群土器	—	2段LRの縦回転間隔施文	
8	17	第17号土坑	七郎内II群土器	—	2段LRの縦回転施文	○

栃木県北東部における敷石住居の出現と柄鏡形住居の受容

—那須塩原市槻沢遺跡の発掘調査成果を中心に—

ごとうしんすけ
後藤 信 祐

はじめに

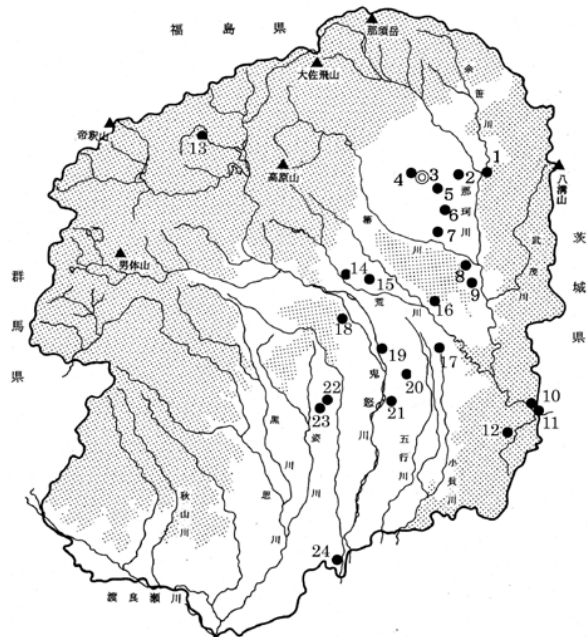
1. 敷石住居・柄鏡形住居出現等についての研究抄
2. 敷石住居出現以前の住居正中線上張出部
3. 敷石住居出現以前の部分敷石・床面石列
4. 栃木県北東部の敷石住居の出現と柄鏡形住居の受容
5. まとめ

敷石住居・柄鏡形住居は縄文時代中期後葉から後期前葉に中部地方から東北地方南部で確認されているが、両地域の関係を明らかにするには栃木県の様相、特に那珂川上流域の様相を明らかにすることが重要と考える。そこで那須塩原市槻沢遺跡を主に、栃木県北東部の中期後葉の住居正中線上の張出部、床面の部分敷石や石列を取り上げ、住居敷石の出現と柄鏡形住居の受容について再検討をおこなった。

その結果、部分敷石については複式炉の土器埋設部を中心とした敷石からの発展したものが後期前葉まであり、継続する拠点集落内では一時期1軒程度存在すると予想した。住居正中線上の張出部については、槻沢遺跡では中期後葉の複式炉住居の前庭部に多く検出され出入口部と考えられるものの、それ以降の住居では張出部が発達しないことから、中期末葉～後期前葉の柄鏡形(敷石)住居は、従来から言われてきたように関東地方南西部系譜の住居であることを確認した。また、栃木県北東部ではこのような柄鏡形(敷石)住居は、中期末～後期初頭の段階には継続集落から離れた地点に単独で検出される傾向があり、後期初頭～前葉には継続集落内に1軒営まれるもの、新たに配石遺構を伴う数軒の柄鏡形(敷石)住居を含む集落が出現するなど多様なものがあると予想した。

はじめに

槻沢遺跡に集落が営まれた縄文時代中期中葉から後期前葉、栃木県北東部の那珂川やその支流の段丘上には多くの集落が展開し、縄文時代の中でも最も繁栄した時期として知られている。そして中期後葉以降晩期まで、竪穴住居内外の多く施設には石が多用されるようになる。時期や地域によって形態や石の選択・組み方は多少異なるものの、住居内の代表的な施設がそのほぼ中央に付設される炉である。なかでも東北地方南部を中心に分布する土器埋設部・石組部・前庭部で構成される中期後葉の複式炉はその頂点で、南縁に位置する栃木県北部でも同じ構成の複式炉が多くみられる⁽¹⁾。また、その終末には敷石住居が出現し、それ以降、集石や配石遺構、墓など屋外の施設にも石が多用されるようになる。



1 ハッケトンヤ遺跡 2 長者ヶ平遺跡 3 槻沢遺跡 4 井口遺跡 5 草刈道下遺跡 6 平林真子遺跡 7 片府田富士山遺跡 8 浄法寺遺跡 9 三輪仲町遺跡 10 河原台遺跡 11 埼玉遺跡 12 松の木遺跡 13 仲内遺跡 14 広表遺跡 15 石関遺跡 16 室ノ木A遺跡 17 茨ノ平遺跡 18 古宿遺跡 19 勝山遺跡 20 上の原遺跡 21 竹下遺跡 22 御城田遺跡 23 上欠遺跡 24 横倉遺跡

第1図 張出部付き住居・敷石住居関連遺跡位置図

住居内に石を用いた最大の遺構である敷石住居は、中期後葉から後期前葉に中部地方から東北地方南部まで確認されている。中部高地から関東地方西部の山地寄りの地域では柄鏡形敷石住居が顕著で、すでに中期後葉には確認されていることから、この地方で出現し、その後周辺に拡散していったものと考えられている。一方、東北地方南部では中期後葉には、土器埋設部・石組部・前庭部で構成される複式炉が住居に設けられるようになり、初期のものは大型で石組部や埋設土器の周囲を縁石で囲い、間に石を敷き並べるなど精巧なものも多い。そして、中期末葉には福島県北部・宮城県南部・新潟県北部で複式炉を中心とした敷石住居が認められ、後期前葉には柄鏡形敷石住居もみられるようになる。この二つの地域の敷石住居・柄鏡形住居の関係については、西関東からの伝播、それぞれの地域での発生といった異なる二つの意見が提出されている。

この間に位置する栃木県北東部の那珂川上流域は、いつの時代も関東と東北を結ぶ内陸の大動脈であり、両者の関係を解明には重要な地域と考えられる⁽²⁾。ここでは那須野が原扇状地の扇中央部に位置する那須塩原市槻沢遺跡を中心に、中期後葉の住居正中線上の張出部、部分敷石や石列など関連する施設について検討し、栃木県北東部の敷石住居・柄鏡形住居の出現と受容について私見を述べてみたい。

1. 敷石住居・柄鏡形住居出現等についての研究抄

大正14年(1924)に東京都町田市高ヶ坂遺跡で敷石住居が初めて発見されてから、あと数年で100年を迎える。今日まで甲信から関東地方西部を中心に敷石住居・柄鏡形住居の時期や分布、地域性や性格など多くの研究が提出されている。ここでは柄鏡形住居、敷石住居の出現を中心に、中部から関東地方西部と東北地方南部の研究の現状について、管見ではあるが把握しておきたい。

まず、全国的集成を行い敷石住居・柄鏡形住居址研究の第一人者である山本暉久は、柄鏡形(敷石)住居は関東地方西部・中部山地・伊豆半島を中心に分布し、中部山地や西関東の山地寄りの地域では床面敷石が顕著で、関東でも下末吉・武蔵野・大宮台地、東京湾東岸の千葉県域では部分敷石や敷石をもたない柄鏡形住居が優勢であることを指摘している。そして敷石については中期後半段階に現れた住居奥壁部の石柱・石壇に、張出部については出入口に設置された埋甕を中心とする小張出にそれぞれの初源を求めた。

また、土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉構造が、柄鏡形(敷石)住居の埋甕と敷石を伴う張出部と共通性があるとし、東北南部の複式炉に付随して敷石された住居の成立については、複式炉を発達させた大木式土器文化圏内の集団が柄鏡形態・構造の受容は否定しつつ、選択的・排他的に敷石風習のみ受容した可能性を指摘している(山本2000)。

さらに、関東南西部～山梨・長野地域の集落が、期終末に住居は柄鏡形(敷石)住居へと変質しつつ集落の継続を絶つ傾向があることを指摘し、柄鏡形(敷石)住居が多数の堅穴住居群の中に単独ないし少数出現するのではなく、一気に柄鏡形住居へ変化を遂げていることから、それまで強固に規制を続けてきた集落構造(環状集落)の崩壊と捉えている。そして、柄鏡形(敷石)住居の性格については、特殊な家屋・施設ではなく、出現過程から一般的な住居であることを強調している。(山本2012)

石井寛は明瞭な張出部を有する住居址は、加曾利EⅢ式古段階に神奈川県西部や山梨県笹子峠東側でやや目立つほか、利根川上流域や長野県・山梨県にまばらに存在し、加曾利EⅣ式期には神奈川県東部から下総台地など関東東部地域へ拡散したとしている。一方、張出部が不明瞭な敷石住居址(部分敷石が大半)は千曲川・犀川といった中部高地を中心に検出されていることを指摘している。

敷石行為については、加曾利EⅢ式古段階に張出部・主体部入口部埋甕周辺(中部高地を中心とした埋甕上への石蓋との関連)・炉址周辺・奥壁部周辺・壁際を巡る周壁型(柱穴際の礫の配置)などの主軸と関連する部位にあり、これらが組み合わさりながら顕現していったとしている。また、張出部については、

方形小張出付住居から円形5本プラン住居を介することにより初期柄鏡形住居への変遷は可能とするが、明瞭な張出部は埋甕上の石蓋や埋甕周囲の部分敷石など入口部への精神性付与の高まりと関連しながら成立し、住居構造に関わる諸要素も加味しながら発達・展開したとしている(石井 1998)。

本橋恵美子は、中期後半の出入口部に設置された埋甕を中心とした小張出が柄鏡形(敷石)住居の張出部の祖源とする山本暉久の考えに対し、小張出に埋甕をもつ潮見台型住居址の出現と柄鏡形住居の出現には空白期があること、分布についても重ならないことから、潮見台型住居址は柄鏡形出現前の住居形態で、柄鏡形住居とは別の住居形態としている。そして、柄鏡形住居については加曾利 E 3 新式期に南関東で出現した住居形態であり、加曾利 E 4 式期に一挙に中部地方から東北南部まで広まったとしている。(本橋 2017)。

一方、東北地方南部の敷石住居・柄鏡形住居については、鈴鹿良一が福島県の最も古い敷石住居は大木 10 式中段階であり、関東地方の加曾利 E 式土器分布圏からの影響によって成立したとしながらも、複式炉を有する住居で在地性が強いことから、成立時の背景の相違を指摘している(鈴鹿 1986)。また、敷石住居が住居の部分敷石の場合、関東の方は壁際の近いほうに、福島・宮城県のは炉を中心に広がっている傾向があることから発生が異なる可能性があること、柄鏡(張出部)については関東からの影響で、福島には時期的に少し遅れてくるという考えを示している(三春町教委 1989)。

筆者も那須塩原市槻沢遺跡と那須町ハッケトンヤ遺跡の発掘調査で敷石住居を調査し、那須地方の敷石住居は中期後葉以降の複式炉の火に対する儀礼から炉の周辺に敷石を施す那須地方独自のものと、関東地方西部で生成し後期初頭以降に伝播した壁際まで敷石を施す柄鏡形住居の系譜の異なる二者が存在したとする見解を示した(後藤 2010b)。

塚本師也は栃木県内の大規模集落の消長から、阿玉台 I b 式から加曾利 E 式で完結する遺跡よりも、堀之内 2 式・加曾利 B1 式、もしくは晩期中後葉まで存続する遺跡が 2 倍あるとし、中期末葉で集落が断絶する関東地方南西部と様相が異なることを指摘している⁽³⁾。そして、栃木県では中期終末に集落の断絶・分散・小規模化が起こってないことから、本県の柄鏡形(敷石)住居の出現背景には別の要因を考える必要性を説き、中部から西関東に系譜が求められる遺構・遺物のなかの祭祀的なものに注目し、これらの屋内祭祀とともに受容された可能性を指摘している(塚本 2018)。

また近年、具体例は示していないが、太田圭は栃木県北部から福島県南部が中期後葉段階に在地的な敷石行為が発達していたことが、その後西南東を中心とする典型的な住居内敷石行為や柄鏡形住居を受容する素地となった可能性が高いとしている(太田 2019)。

以上、甲信～西関東、東北南部、本県の敷石住居・柄鏡形住居の出現や甲信～西関東、東北南部の関係など各研究者の意見を記してきた。このような状況を理解したうえで、栃木県の北東部の縄文中期後葉の住居正中線の張出部と床面敷石について検討していきたい。

2. 敷石住居出現以前の住居正中線上張出部

敷石住居出現以前の住居正中線上に張出部を持つ事例について、槻沢遺跡(海老原 1980・後藤 1996)を中心に見ていきたい。このような住居は中期後葉に多く確認されており、付設される炉は例外的に埋甕炉があるものの、ほとんどが複式炉である。複式炉の中軸線は住居の正中線に一致し、柱穴はこれを基軸として対称的に配置されているものが多い。また、炉の前庭部は壁まで続く浅い掘り込みが殆どであり、槻沢遺跡をはじめ那須地方のものは踏みしめにより硬化が顕著なものが多い。

前庭部が壁外へ U 字状に張出すものは、SI-13・27・151・153・157a・157b・160、S52- 8H・9H (第 2 図①～⑨)などがある⁽⁴⁾。ほとんどが加曾利 E II 新～E III 式期のものである。張出部の半分が調査区外

となるが、前庭部が壁外へ大きく張り出すSI-157b・160(第2図①・②)は、石組部と前庭部からなる大形の初期複式炉で加曾利EⅡ式段階あることは注目される⁽⁵⁾。なお、この時期以降、SI-10(第2図⑩)・21(第3図⑤)・24・48・120(第2図⑫)・154・155(第2図⑪)・S 52-2H・18Hなど複式炉前庭部の壁が外側にわずかに湾曲するものも多く、SI-09・34・111(第2図⑬～⑮)など中期末～後期初頭まで見られる。対ピットが付設されるものも少なくなく、ほかの部分に出入口施設が認められないことから、前庭部が出入口部と考える要因となっている。

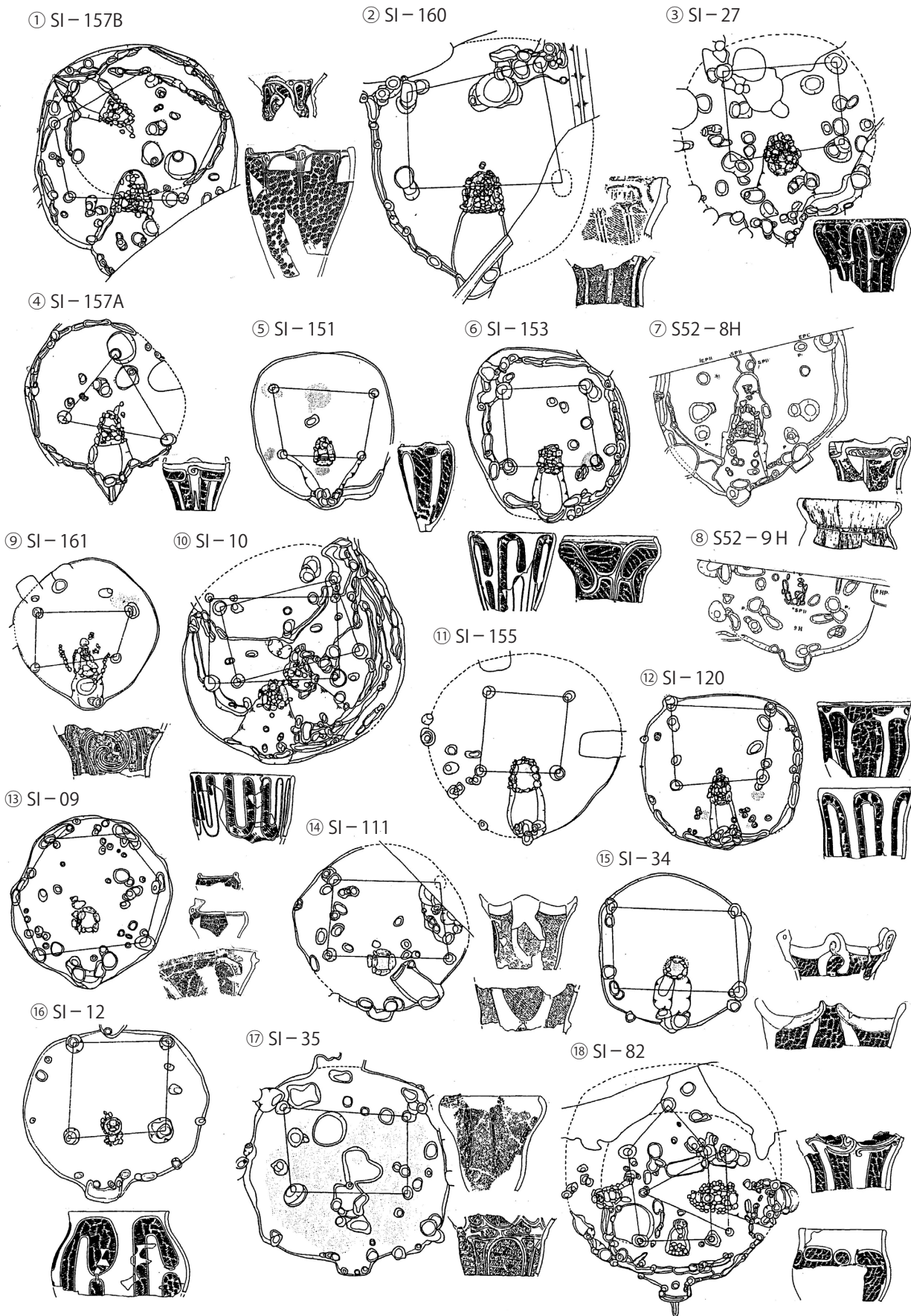
一方、コの字状の張出部をもつものは、SI-12・35・82a・82bの4軒で確認されている。SI-12(第2図⑯)は胴部下半を欠く大型の大木9式の深鉢形土器を逆位に埋設した石敷埋甕炉で、周囲に部分敷石を施している。槻沢遺跡ではこの時期の炉はSI-12以外すべて複式炉であり、複式炉住居のU字状張出部と異なりコの字状で浅い掘り込みと対ピットが検出されており興味深い⁽⁶⁾。なお、この住居跡の炉の位置は複式炉の土器埋設部とほぼほぼ同じ位置にあり、柱穴の配置もこの時期の複式炉住居同様、前面の柱穴が炉を挟んで対峙する4本主柱である。SI-82(第2図⑱)は建て替えが予想される住居で、新旧いずれの住居跡の張出部にも溝が巡る。古いほうのSI-82bの張出部中央には後述する横穴と思われ40cmほど溝が延びている。新しいほうのSI-82aは、土器埋設複式炉で、時期は加曾利EⅢ式(大木9式新段階)である。SI-35(第2図⑲)も埋設土器以外の石がすべて抜かれているが槻沢型土器埋設複式炉で、複式炉の中軸線上に対ピットのある張出部をもつ同様の形態の住居である。時期は加曾利EⅣ式(大木10式古段階)である。

槻沢遺跡以外の栃木県北東部では、柄鏡形(敷石)住居出現以前の張出部をもつ住居は現在のところ、大田原市片府田富士山遺跡SI-14(第4図②、水野2012)、矢板市広表遺跡SI-02(第4図⑥、海老原1999)などがある。ほかに壁が明確でないが、前庭部がやや長く先端が丸く収束する那須町ハケットンヤ遺跡SI-09(後藤2007)、片府田富士山遺跡SI-17(第2図④)、槻沢遺跡SI-71なども壁外張出の前庭部の可能性がある。いずれも炉は複式炉で、加曾利EⅡ新～EⅢ式段階のものである。

このほか県内で中期の住居で張出部が確認できたのは、高根沢町上の原遺跡JT-5号跡(第4図⑤、青木1981)と茂木町絵の木遺跡A4住居(中村2005)の2例である。前者は前面に浅い掘り込みを有する石囲い炉で、張出部は中央が窪んでおり、加曾利EⅢ式期である。後者は、土坑と重複するなど遺存状況が悪く張出部も不明瞭であるが、炉は石囲い炉で加曾利EⅡ式期である。

また、炉の中軸線上の前庭部壁に口径30cm前後で深さ50～100cmの柱穴状の横穴を掘る例が、槻沢遺跡SI-45・64・65・80・82b・90・117・127・157A(第2図④・⑱、第3図①・②・⑧)で確認されている。炉は住居や土坑との重複、炉石の取り壊しなどで明確でないものが少なくないが、ほとんどが石組複式炉で石組部からハの字に開く浅い掘り込みの前庭部が壁に接続する。類例是那須町ハケットンヤ遺跡SI-14(第4図②)、大田原市片府田富士山遺跡SI-04・19(第4図①・③)、矢板市広表遺跡SI-02(第4図⑥)で検出されている。片府田富士山遺跡は石組複式炉で加曾利EⅡ式新段階、ハケットンヤ遺跡・広表遺跡は土器埋設複式炉でやや新しい加曾利EⅢ式期である⁽⁷⁾。槻沢遺跡SI-117(第3図②)は石組部からハの字開いた前庭部が収束しコの字に張り出して壁に接続している珍しい例である。片府田富士山遺跡SI-04も炉の作り替えとされているが、同形態のものかもしれない。

なお、この横穴の性格については、対ピットがあることからこの部分が出入口で、その施設の一部と考えることが妥当である。しかし、規模が対ピットより大きく主柱穴ほどの規模があり疑問が残る。前庭部の他の施設としては埋甕があるが、槻沢遺跡では前庭部で埋甕が検出されたのは前庭部に張出部をもたないSI-20のみである。口径35cm深さ45cmの柱穴状のピットの底に胴部下半を欠く深鉢を埋設している(第3図④)。竪穴と横穴の違いはあるが規模や形態は酷似しており、柱穴というよりは埋甕のような特別な



住居跡 1/150 土器 1/16

第2図 槻沢遺跡の張出部付き住居

ものを入れた穴と考えられないであろうか。

複式炉の前庭部の埋甕については、槻沢遺跡 SI-20 のほかには日光市仲内遺跡 SI-701 (片根 2006) があるのみである。また、中期末葉の石囲い炉・地床炉の段階には片府田富士山遺跡 SI-20、那珂川町三輪仲町遺跡 SI-034 (塚原 1994)、那須烏山市室の木 A 遺跡 SI-1 (木下 1993)、桧の木遺跡 A10 住などで検出されているが、張出部を持つ住居では検出例がない。栃木県北東部ではこの時期、石囲い炉住居となるが、炉は中心より出入口側に寄っており、ほぼ複式炉の土器埋設部に位置するものが多い。支柱穴も炉を挟んで2本、奥壁側にこれに対応する2本が位置する4本支柱で、住居の中軸に対し横長の長方形の複式炉住居の配置のものが少なくない。埋甕は炉の前面壁際に位置するが、槻沢遺跡 SI-20 (第3図④)、片府田富士山遺跡 SI-20、三輪仲町遺跡 SI-034、桧の木遺跡 A10 住など前庭部の範囲に入るものの、炉の中軸線からは若干ずれるものも少なくない。

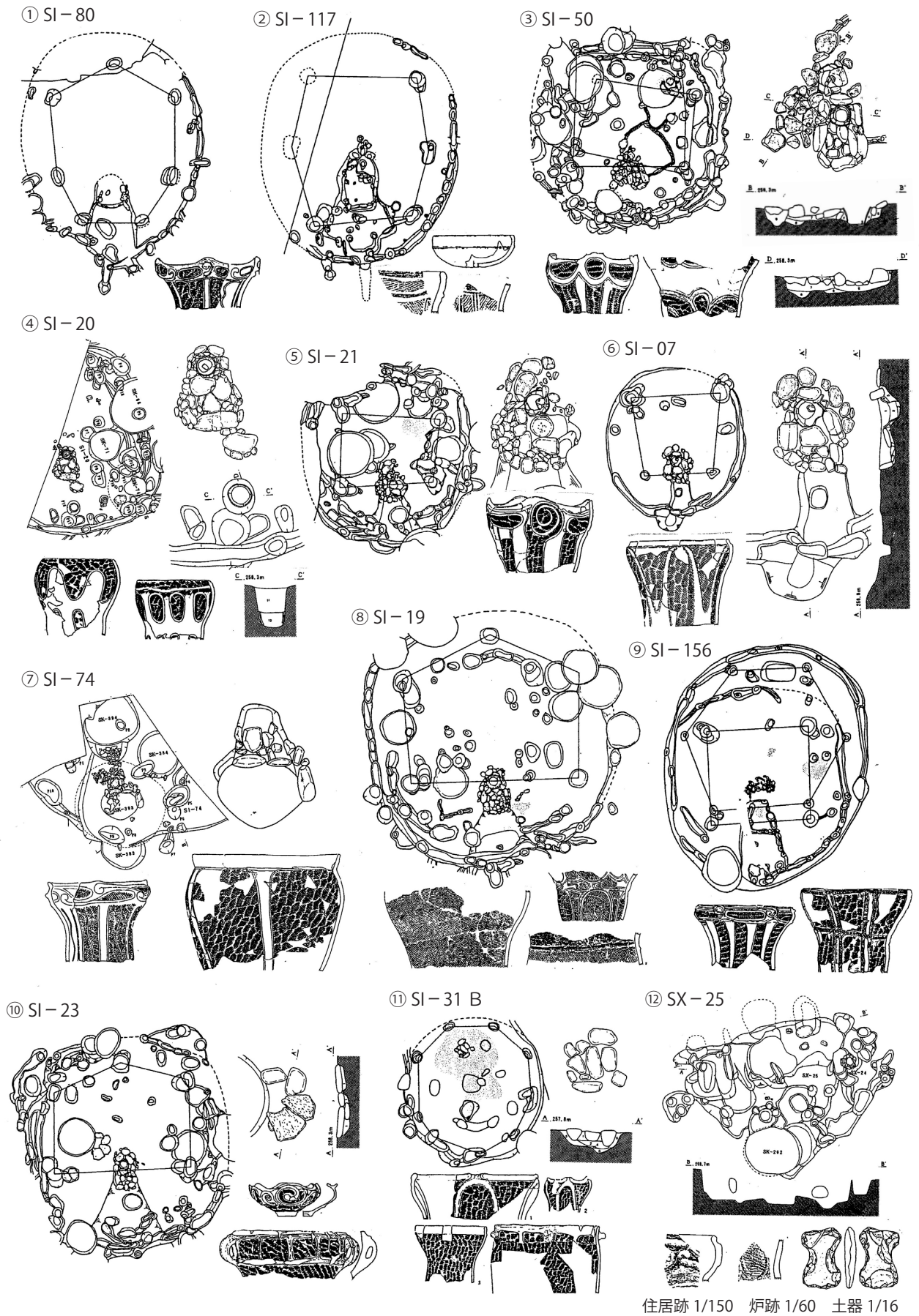
住居の正中線の張出部については、槻沢遺跡では初期複式炉である石組複式炉の段階(加曾利 E II 式段階)に前庭部壁外へ U 字状の張出部が確認できる。この前の段階については槻沢遺跡では住居跡が確認されていないことから明確ではない。また、この張出部が槻沢遺跡特有なものか、槻沢型複式炉の分布圏まで広がるかについても、この時期の複式炉住居の検出例が少なく明確ではない。つぎの加曾利 E III 式段階になると、コの字状の張出部や僅かに張り出すものなど、栃木県北東部の複式炉住居には多くみられる。しかし、中期末葉の加曾利 E IV 式段階には、SI-35 (第2図⑰)の複式炉住居で確認されているものの、栃木県北東部では石囲い炉住居に変化し、張出部や対ピット・横穴などは殆ど認められないのが現状である。

中期末から後期前葉の張出部をもつ住居跡については、槻沢遺跡では F 区 SI-07 (第5図、中期末～後期初頭、後藤 1995)があるのみである。敷石住居を除くと県内でも宇都宮市御城田遺跡 SI-68 (第4図⑩、綱取1式、芹澤 1985)、塙平遺跡2次 SI-01 (第4図⑨、綱取2式、川原 1995)、矢板市石関遺跡2号住居(第4図⑪、堀之内2式、海老原 1979)、小山市横倉遺跡 SI-76 (堀之内2式、江原 2016)のみで、調査面積にもよるが現状では複数軒検出されている遺跡はない。いずれも柱穴は壁柱穴で、張出部に対ピットのあるもの、溝状ピットなどが認められる。張出部に埋甕など他の施設は認められないが、中期後葉の張出部をもつ複式炉住居などとは構造が異なり、空白期もあることから、これらは南関東系譜の柄鏡形住居と考えられる。

3. 住居床面の部分敷石・床面石列

槻沢遺跡では敷石住居跡が SI-37・38・62 (第5図)の3軒検出されている。掘り込みが浅く遺構の重複が激しいことから遺存状況は悪いが、SI-62 が土器埋設複式炉で、埋設土器から中期末葉(大木 10 式中段階)と考えられる。SI-37・38 が石囲い炉で、SI-38 が後期初頭、SI-37 が後期前葉で、各時期1軒確認されている。ここではこれらの敷石住居以前の、床面に石を敷く(部分敷石)・並べる(石列)・立てる(立石)・置く(丸石)といった行為が窺える住居跡を取り上げ、敷石住居の遡源になりうるかを検討してみた(8)。

まず、床に石を敷く(部分敷石)行為については、炉の作り替えによるものと、炉以外の床の一部に敷くものがある。炉の作り替えによるものは、旧炉の縁石など床面ラインから上に出る炉構築材を取り除き、構築材を平らにし床面とするもので、被熱で再利用できない埋設土器、石組部の敷石は残しているものが少なくない。SI-19・21・23・50・75・156 (第3図③・⑤・⑨～⑪)などで、炉を前庭部側にずらして作り変えるものに多く、旧炉埋設土器の下部を円筒状に残し、その上に石組部の縁石・奥壁などの大きな石材を置き、周辺に割石など小さな石材を敷いている。再利用ができない旧炉の構築材を用いるため、若干凹凸が見られ、これは建て替えによる床面補修と考えられる。また、SI-20 (第3図②)では複式炉の石



第3図 槻沢遺跡の張出部横穴・部分敷石をもつ住居等

組部前面に平石を敷いているものがあるが、平石を剥がすとピットがあり、旧住居の柱穴を塞ぐための床面補修と考えられる。

炉の作り替えなどの床面補修ではなく、炉の埋設土器の周囲に敷石を行うものに、SI-07・12・82A、S52-2H・16Hがある。SI-12・82A、S52-2H・16Hは大木9式新段階で、SI-82A(第2図⑱)は土器埋設部から石組部にかけての縁石の周囲に拳大の礫を二重に敷き並べている。SI-12(第2図⑲)は前節でもふれたが、埋設炉の周囲に部分敷石を施している。酷似するものは宇都宮市御城田遺跡63号住居跡(第4図⑳)がある。胴部下半を欠く口縁部が直線的に開く大型の鉢を逆位に埋設し、周囲に石囲いを施し、東側に薄い板石を一行敷いている。SI-07(第2図⑥)は複式炉の土器埋設部から石組部にかけて楕円形の平石などを一行敷いたもので、時期は大木10式古段階である。

SI-07と同様の敷石は那須町ハケットンヤ遺跡SI-11(第4図㉑)がある。直径4mの円形プランで、柱穴は本地域の複式炉住居と同じ4本主柱であるが、いずれも壁に接しており後出的である。奥の縁石周囲に楕円形の平石を敷いた方形の石囲い炉で、石囲い炉の幅で壁まで前庭部の浅い掘り込みが確認された。前庭部側の縁石が一段低く、奥壁側の炉床が焼土化しており、複式炉の残影がみられる。敷石下には深鉢形土器の胴部を輪切り状にした埋設土器が確認され、最終段階の土器埋設複式炉から石囲い炉への変遷が窺える好例である。前述の複式炉の作り替えと異なり、敷石は旧炉構築材ではなく敷石のための楕円形の平石を使用していることが注目される。時期は埋設土器から中期末葉大木10式中段階と考えられる。東側に近接して方形の石囲い炉の周囲に大形の板石と扁平な礫を敷いた敷石住居SI-08(第4図㉒)が検出されている。敷石上からは中期末～後期前葉の小破片が出土しており、槻沢遺跡例から判断して後期初頭から前葉と考えられる。

なお、方形の石囲い炉の周囲に部分敷石を施す例は、那珂川町浄法寺遺跡10号住居(第4図㉓、塚本1997)と三輪仲町遺跡SI-37(第4図㉔)でも確認されている。どちらも一辺一石の方形石囲い炉で、前者は周囲3辺に径20～30cmの礫を巡らす程度である。炉の検出のみで時期不明であるが、炉の形態から中期末～後期初頭であることは間違えない。後者は南と西側の2辺を失っているが、北半周囲に拳大の礫を敷いている。奥壁側の炉床が焼土化していることから南側が焚口と想定され、これも複式炉の残影がみられる。時期は加曾利EⅣ式期である。このように、那須地方では炉の周囲の部分敷石の住居は、炉の周囲に一行の敷石を除くと各遺跡一時期1軒で、現在のところ複数軒検出されている遺跡はない。

炉周辺以外の床面の部分敷石は、槻沢遺跡ではSI-23、SI-31B、S52-13Hがある。いずれも1m前後の略円形の浅い掘方に、平石や楕円形の扁平礫などを平坦に敷いている。SI-23(第3図㉕)は両耳壺を埋設土器とした複式炉で、旧炉埋設土器上に石皿を敷いている。土坑により壊れているが土器埋設部に近接して平石4個を敷いた部分敷石がみられる。SI-23が大木10式古段階、SI-31B(第3図㉖)・S52-13Hはこれより1段階新しい。なお、槻沢遺跡以外では、那珂川町三輪仲町遺跡第8次調査SI-12の土器敷石組炉の前面で部分敷石が検出されている。報告書未刊のため詳細は不明であるが、加曾利EⅡ式期で稀有な例である(眞保1998)。

つぎに、床面石列の住居について見ていく。槻沢遺跡ではSI-01・19・50・52A・115・161、S52-16Haで確認されている。SI-50(第3図③)はコの字状、SI-161(第2図⑨)はハの字状の石列で、溝を掘って5～10cmほどの小石を充填している。いずれも炉の周辺で確認されており、炉を意識した石列である。このほかの住居も炉の周辺で検出されているが、溝と数個の石が残る程度で形状は不明である。SI-19(第3図⑩)がやや新しいが、大木9式新段階に多くみられる。

周辺地域では那須塩原市草刈道下遺跡炉跡(長山2013)、大田原市長ヶ平遺跡SI-2(第4図⑧、海老原2002)と那須町ハケットンヤ遺跡SI-14(第4図⑦)で検出されている。草刈道下遺跡の炉跡は、1941



住居跡 1/150 炉跡 1/60 土器 1/16

第4図 栃木県北東部の部分敷石・張出部をもつ住居

年の発掘調査で検出されるもので(八幡 1941)、写真と発掘所見などから長山が再吟味を行っている。それによると炉は槻沢型石組複式炉で、前面に10cmほどの大きさの川原石が弧状に並べられていたようである。後二例は、住居中央の硬化が顕著な床面のアメーバ状の亀裂に小礫を埋め込んだものである。槻沢遺跡の溝を掘って石を詰めていく石列とは石の大きさも異なり、その性格も異なるものかもしれない。海老原郁雄は「内区床面踏みしめに伴う亀裂損傷の補修整備」(海老原 2002)としているが、槻沢遺跡では、SI-56・58 などの中期末葉の方形石囲い炉の住居の硬化床面に亀裂があったが、小礫の充填は行われていない。長者ヶ平遺跡 SI-2 の炉は調査区外のため明らかでないが、覆土中の遺物から槻沢遺跡やハッケトンヤ遺跡よりは一段階遅い加曾利 E IV 式期と考えられる。このような石列は、加曾利 E III 式期を中心に一部加曾利 E IV 式までの複式炉住居に見られるが、周辺地域を含めてもこの3遺跡以外に検出例がないことから、ごく短期間的那須地方特有のものであったと考えられる。

立石は SI-10・65・161 (第2図⑨・⑩、第3図⑧)で検出されている。いずれも炉の先端に位置し、細長い大形の自然礫を立てて設置している。加曾利 E II 新～E III 式期の住居で、次期の住居には認められない。丸石は、SI-11・120・154、S52-2H の床面から検出されている。壁際や支柱穴際からの出土が多く、SI-154 を除き倒置深鉢が出土している(後藤 2009 b)。県内では宇都宮市上欠遺跡 SI-53 (岩淵 1985)で丸石と倒置深鉢の供伴例がある。

なお、丸石と立石の供件事例として SX-25 (第3図⑫)がある。直径40cmの大きな丸石と長さ40cmの正立状態の柱状礫が2mの間隔で出土している。環状に巡る住居群の内側の竪穴住居のない場所で、打製石斧と土器片が数点出土しているのみで時期の決定は難しいが、時期は中期後葉と考えられる。

4. 栃木県北東部の敷石住居の出現と柄鏡形住居の受容

槻沢遺跡では、大木 10 式期、称名寺式期、堀之内 1 式期の敷石住居跡が各 1 軒検出されている(第5図)。いずれも重複や地山への掘り込みが浅いため形状の把握は難しいが、炉を中心とした部分敷石である。槻沢遺跡ではこの時期、複式炉から石囲い炉に代わる時期で、30軒を超える住居が調査区中央から北西に多く検出されているが、掘り込みが浅いため炉跡のみの検出でプラン等が不明瞭なものが少なくない。時期は中期末～後期前葉であることは間違えなく、さらに時期を限定するのは難しいものの、敷石住居が継続集落内に一時期1軒あったようである。大木 10 式期の SI-62 は槻沢型土器埋設複式炉の周囲に拳大の円礫を敷いており、この時期の住居の中では最も南東に位置する。これとほぼ同じ時期と考えられる柄鏡形住居が、谷を挟んで200mほど東のF区から1軒(SI-07)検出されている。F区では7軒の竪穴住居跡が検出されているがSI-07の1軒が最も古い。数基の土坑と後期中葉の竪穴住居にサンドイッチされ残りは良好ではないが、方形の石囲い炉を付設する円形プランの住居で先端が広がる張出部をもつ。壁柱穴が廻り張出連結部には対ピットが確認されている。出土遺物は中期末～後期初頭の微隆起線文の土器の小破片のみで、さらに時期を絞り込むことは難しい。ただ前節で述べたように、この柄鏡形住居は南関東系と考えられるもので、F区でも丘陵の北西緩斜面に立地し、浅い谷を挟んで継続する拠点集落を望める位置にあることは意味深である。

中期末～後期初頭の段階の柄鏡形(敷石)住居は、槻沢遺跡から那珂川を下って茨城県境に近い茂木町河原台遺跡で1軒検出されている(第4図⑰、中村 1994)。調査面積は1,425㎡であるが、この住居以外同時期の遺構は検出されていない。500m南には中期後葉から後期前葉を中心とした塙平遺跡がある(後藤 1994)。道路拡幅部分のみの調査であるが、竪穴住居跡や土坑が多数検出されており、中期後葉から後期前葉の拠点集落と考えられる。壁柱穴で石囲い炉が付設された柄鏡形住居が1軒検出されているが、後期前葉堀之内 1 式期である(第4図⑨、川原 1995)。河原台遺跡の柄鏡形敷石住居も、前段階から継続する



第5図 槻沢遺跡の敷石住居の変遷と柄鏡形住居

拠点集落である埴平遺跡から距離を置いて単独で存在したと予想され、槻沢遺跡と同様な傾向か窺える例かもしれない。

那須烏山市荻ノ平遺跡でも隅丸長方形のプランに張出部を有する柄鏡形敷石住居(Ⅲ区 SI-14)が検出されている(第4図⑱、津野 2007)。周壁に川原石を、北東・北西の奥壁コーナーに板石を配し、中央やや南の張出部側に石囲い炉を有するもので、槻沢遺跡などの炉周辺の敷石とは異なる。道路幅の調査であるが、同じ時期の住居の中では斜面上位の最も東側に位置する。時期は称名寺式新～堀之内Ⅰ式古段階である。

那珂川上流域は縄文中期末葉～後期前葉の集落が比較的多く存在する地域である。この中には茂木町松の木遺跡や那珂川町三輪仲町遺跡など石囲い炉を付設する竪穴住居は多数検出されているが、柄鏡形住居・敷石住居が検出されていない遺跡も少なくない⁽⁹⁾。また前述したように、出入口部に埋甕がある住居は三輪仲町遺跡 SI-034、室ノ木 A 遺跡 SI-1 (木下 1993)、埴平遺跡 SI-02、松の木遺跡 A10 住・B14 住居などで認められるものの、正中線に張出部を持つ住居・柄鏡形住居からは検出されていない。

水系は異なるが、鬼怒川流域の宇都宮市古宿遺跡(中期末から後期前葉の敷石住居4軒を含む住居14軒、芹澤 1994)、さくら市勝山遺跡(後期前葉の柄鏡形敷石住居が7軒、小竹 1995)などでは複数軒の柄鏡形(敷石)住居と配石遺構で構成される集落が検出されている。古宿遺跡については塚本が指摘するように、柄鏡形(敷石)住居の分布の濃い関東北西の山地に近い(塚本 2017)ということも考えられるが、配石遺構とセットで構成されていること、中期からの継続集落ではなくこの時期に新たに集落が形成されていることも重視する必要があるだろう。詳細は不明であるが、後期前葉の敷石住居が4軒検出されている大田原市平林真子遺跡もこのような集落であったかもしれない(中木 1997)。

那珂川上流域の敷石住居・柄鏡形住居については、継続集落では炉周辺の部分敷石から発展した敷石住居が中期末葉から後期前葉の段階に一時期Ⅰ軒あるもの(槻沢遺跡・ハケットンヤ遺跡)が確認されたが、南関東系譜の柄鏡形(敷石)住居は中期末～後期初頭の初期の段階では前代から続く拠点集落から距離を置いて構築されたと予想される(槻沢遺跡 F 区、河原台遺跡と埴平遺跡)。その後、後期前葉には継続集落内の周縁に位置するもの(荻ノ平遺跡・埴平遺跡・御城田遺跡)、数軒の柄鏡形(敷石)住居、配石遺構を含む新たな集落(平林真子遺跡・勝山遺跡・古宿遺跡)が出現するなど多様であったと考えられる。そして柄鏡形(敷石)住居の受容後まもなく後期前葉(堀之内Ⅰ式、綱取Ⅱ式)をもって、那珂川上流域の集落の多くは終焉を迎える。

5. まとめ

これまで槻沢遺跡を中心に栃木県北東部の敷石住居の出現と柄鏡形住居の受容について検討を行ってきた。その結果、住居の中軸線上に張出部をもつものは加曽利 EⅡ式新～EⅢ式段階に複式炉住居を中心に認められるものの、中期末葉にはほとんど認められないことなどから、後期初頭以降の柄鏡形(敷石)住居は別系統の南関東系譜の住居と考えられるとした。また、住居床面の敷石については炉を中心としたものが多く、壁際まで及ぶものがないことから、複式炉作り替えに伴うものも含め炉の周囲の敷石や石列などから発展したもので、後期初頭以降の柄鏡形の敷石住居は別系統のものとした。これらは、筆者や鈴鹿氏のこれまでの見解をほぼ追認するものとなった。

福島県の状況についてみると、中通りの三春町越和田遺跡では、中期末葉の複式炉住居から後期初頭の石囲い炉住居、後期前葉の敷石住居へといった集落の段階的変遷が読み取れ、後期初頭の石囲い炉住居には入り口ピットや埋甕が検出されるものが多いという特徴がみられる(福島 1996)。また、本宮市高木遺跡でも、中期後葉から続く複式炉住居から後期初頭には石囲い炉住居と部分敷石・柄鏡形の敷石住居で構成され、後期前葉には大型の柄鏡形敷石住居のみの集落になるといった、概ね越和田遺跡と同様な変遷が

窺える(大河原 2003)。両遺跡とも大木式土器から加曾利 E 系の土器へ変わる時期に、複式炉住居から石囲い炉住居・柄鏡形住居へ変わっており、大きな画期としてとらえられる。一方、福島県北東部の集落内の敷石住居のあり方については、浜通り北部の敷石住居には複式炉を中心に床面の大半に敷石を施すものと、炉の周囲及び奥壁際に部分的な敷石を施すものの 2 形態があり、前者は一般的な集落から離れた見晴らしの良い場所に単独で立地する傾向が、後者は一般的な住居とともに集落を構成する傾向があることが指摘されている(笠井 2006)。中通りでは複式炉敷石住居が、福島県北東部では柄鏡形敷石住居が認められないことも関係するが、両地域の集落での敷石住居のあり方も異なるようである。

栃木県北東部の炉を中心とした敷石住居、初期の柄鏡形(敷石)住居の受容については福島県北東部と近似し、良好な資料はないが本格的柄鏡形(敷石)住居の受容については、中通りと似た傾向が予想される。しかし、栃木県北東部では現在のところ、越田和遺跡や高木遺跡のような一遺跡で複式炉住居から敷石住居への変遷がたどれるような遺跡は確認されていない。なお、いずれの地域も後期前葉をもって集落の終焉を迎える遺跡が多いことは意味深である⁽¹⁰⁾。

槻沢遺跡では中期後葉大木 9 式後半段階に住居正中線の張出部や床面の部分敷石や石列がみられるが、中部高地から関東地方南西部でも加曾利 E Ⅲ式期に小張出部を持つ住居(潮見台型住居)や部分敷石が確認されている。張出部については形態や埋甕の有無、部分敷石については炉周辺と奥壁部・張出部などの差異は認められるものの、両地域で張出部や敷石という情報は共有されていた可能性は高い。東北南部の複式炉文化圏については、山本氏が指摘するように、床面敷石は受容したものの住居正中線上の張出部については否定されたのかもしれない。栃木県北東部では中期後半以降、中部から関東地方南西部に系譜が求められる連弧文土器・曾利式系土器・両耳壺形土器・有孔鍔付土器・石棒・丸石・立石・住居内埋甕・倒置深鉢など多くの遺構・遺物が出土していることはこれまで何度も指摘してきた(後藤 2017)。福島県中通りをはじめとする東北地方南部でも同様の遺構・遺物が出土しており、栃木県北東部を介した受容が推察される。これらの受容形態はさまざまであるが、柄鏡形(敷石)住居については、時期的に両耳壺形土器・石棒などが同様の受容を示すものと考えられる。

最後に、栃木県北東部の敷石住居の発掘調査例はまだ少なく、発掘調査された遺跡でも部分的なもので集落全体の様相がわかるものはほとんどないのが現状である。今後、発掘調査によって新たな展開も十分予想されるが、現段階での私見を記してきた。先学のご批判・ご叱正を賜れば幸いである。

[註]

註 1 複式炉分布圏の南縁である栃木県北部の土器埋設複式炉は、東北南部を中心に分布する大規模で石が精緻に組まれた上原型複式炉の影響下で成立したと考えられていた。筆者は平成 3～5 年の槻沢遺跡の発掘調査で出現期の複式炉が東北南部とほぼ同じ形態であること、土器をはじめ遺物・遺構に南からの影響が認められるものがそれ以前に比べ多いことなどから、北を意識しながらも前段階の地元の土器埋設石囲い炉から発展した栃木県北部の地域色豊かな複式炉であることを指摘し(後藤 2005b)、胴部下半を欠くキャリパー形の加曾利 E 系の土器を埋設土器に用いるものが多いことから「加曾利 E の複式炉」と呼称した(後藤 2010a)。その後、阿部昭典はこのような特徴を有する複式炉を「槻沢型複式炉」と提唱しており(阿部 2012)、筆者も遺跡名を冠することについては基本的に同意する。しかし、ほぼ同時期に埋設土器を持たない同型の特徴を有する複式炉が槻沢遺跡のほか、那須塩原市井口遺跡(近江屋 2002)・同市草刈道下遺跡(長山 2013)・大田原市片府田富士山遺跡(水野他 2012)・那須町ハケットンヤ遺跡(後藤 2007a)、日光市仲内遺跡(片根 2012)などで出土しており、上原型複式炉最盛期の福島県への広がりには管見では郡山市びわ首沢遺跡(金崎 1980)で 1 例あるのみで希薄なようである。このような石組複式炉については、大木 9 式中段階に福島県浜通りから中通りで散見される石囲部・石組部・前庭部で構成される上田郷型複式炉との関係が考えられ、槻沢遺跡でも遺存状態は良くないが同型と考えられる複式炉が 1 例(SI-71)確認されてい

る。那須地方のものは上田郷型複式炉より若干新しい大木9式新段階のものが多く、A字形や先端がやや窄まる長方形で奥室に石を敷かないものから、前室よりやや深い小型の奥室に石を敷いたものへの変遷が想定される(後藤2007b)。このようなことから、栃木県北部に特徴的な土器埋設複式炉を「槻沢型土器埋設複式炉」、土器を埋設しない石組複式炉を「槻沢型石組複式炉」とし、両者を総称して「槻沢型複式炉」とすることを提唱したい。

註2 東北地方南部との関連を考えるには、本県のほかに茨城県も視野に入れなければならないが、茨城県では柄鏡形住居は確認されているものの、管見では敷石住居は確認されていない。福島県では敷石住居は、中通り・会津地方で多く検出されているが、浜通り地方では南相馬市小高区より南では確認されていない。このことから、両地方の敷石住居の関連については栃木県及び新潟県の状況を把握することが重要と考えている。

註3 筆者も概ね支持するが、栃木県北東部から福島県南部の中期から継続する拠点集落は堀之内1式、綱取2式をもって終息するものが多いと考えている。これ以降も継続が考えられる遺跡でも地点を変え、規模が極端に小さくなるものが少なくない。これは、中期中葉阿玉台式期から数型式にわたって存続した拠点集落の崩壊・分散であり、栃木県北東部の中期縄文社会の終焉として位置付けられる。敷石住居や柄鏡形住居もこの時期に対応し、このような変革の中で考えていく必要がある。なお、栃木県の縄文時代の時期区分については、早期前半燃糸文系土器群の段階、中期中葉、中期前葉、後期中葉、晩期後半の各段階に大きな画期があり、この時期の前後で遺跡立地が変わり、集落の断絶がみられるものが多いという指摘をしたことがある(後藤2000)。

註4 以下、槻沢遺跡の住居については昭和52年調査のものはS 52-●H、平成3～5年度調査のものはSI-●と表記する。

註5 SI-74についても、北側が削平され、南側も土坑との重複が著しくわかりにくい、ほぼ同じ時期の石組部と前庭部からなる石組複式炉の住居である。前庭部かかる半円形状の掘り込みを土坑の重複として報告したが、土坑底面と前庭部のレベルが同じであることを考えると、U字状の張出部である可能性が高い。

註6 那須地方の土器埋設複式炉は東北南部のものに比べ小形のものが多く、埋設土器は胴部下半を欠いた口径25～30cmのキャリパー形の深鉢を使用するものが少なくない。本住居跡の埋設土器は大木9式土器であるが、口径39cm、胴部最大径53cmで、那須地方の複式炉の埋設土器には規格外の大きさであることから不適であったと考えられる。胴部上半に最大径を有し口縁部ですばまる器形であることから、胴部下半を欠いて逆に埋設することでキャリパー形の埋設土器と同様の形態となる。複式炉の分布の中心地域の大木式土器でありながら、複式炉の埋設土器に使用されなかった稀有な例である。埋設土器や炉床に敷く土器片など炉材として使用する土器は再利用品であり、土器型式よりも大きさ、形を優先することは以前にも指摘した(後藤2017)。

註7 壁が黒色土で確認面がローム面の場合、溝として報告されているものもある。横穴の掘り込みは前庭部底面の高さとはほぼ同じで、先端が低くなるよう若干斜めに掘っているものも少なくない。

註8 敷石ではないが、中期後葉にみられる槻沢遺跡SI-02のような住居中央から炉周囲の焼土床も、床に施す行為として敷石の出現に関連するかもしれない。

註9 三輪仲町遺跡町調査15号住居はこの時期の住居としては最も東に位置する。壁柱穴が巡る柄鏡形住居とされているが、炉がなく張出部も溝とピットが片方のみで不明瞭であることから、ここでは保留とする。

註10 阿武隈川の自然堤防上に立地する高木遺跡は、阿武隈川の氾濫により集落が終焉を迎えている。ほぼ同じ時期に本県及び東北南部多くの遺跡が集落の終焉が認められており、大規模な自然災害が一因として考えられるかもしれない。

[参考文献]

- 青木健二 1981 『芳賀高根沢工業団地内上の原遺跡発掘調査報告書』 栃木県企業局
 新井 潔 1997 『三輪仲町遺跡』(『宇都宮市埋蔵文化財報告書』第11冊) 小川町教育委員会
 阿部昭典 2012 「東北から見る那須地域の縄文中・後期文化」『栃木県立なす風土記の丘資料館第20回特別展図録 那須の縄文社会が変わるころ—縄文時代中期から後期へ—』 栃木県教育委員会
 石井 寛 1998 「柄鏡形住居址・敷石住居址の成立と展開に関する一考察」『縄文時代』第9号 縄文時代文化研究会

- 江原 英 2016 『横倉遺跡・横倉戸館古墳群』(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 383 集) 栃木県教育委員会・(公財)とちぎ未来づくり財団
- 近江屋成陽他 2002 『井口遺跡発掘調査報告書』 西那須野町
- 海老原郁雄 1979 『石関(彦左エ文山)遺跡』(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 25 集) 栃木県教育委員会
- 海老原郁雄 1980 『槻沢(つきのきざわ)遺跡』(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 34 集) 栃木県教育委員会
- 海老原郁雄・永岡弘章 2016 「北関東・堀之内期の柄鏡形住居」『唐澤考古』第 35 号 唐澤考古会
- 海老原郁雄 1999 『「南いわき幹線」矢板管内地点発掘調査報告書Ⅱ・広表遺跡』(『矢板市埋蔵文化財調査報告』第 4 集) 矢板市教育委員会
- 海老原郁雄・中木太 2002 『長者ヶ平遺跡発掘調査報告書』 大田原市教育委員会
- 大河原勉 2003 『阿武隈川築堤遺跡発掘調査報告書 3 高木・北ノ脇遺跡』 福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興財団
- 大田 圭 2019 「縄文時代の栃木県における竪穴住居数の動向とその背景—諸文化要素からみる北関東における縄文時代中期／後期移行期の一様相—」『東京大学考古学研究室研究紀要』第 32 号 東京大学考古学研究室
- 笠井宗吉 2006 「熊平 B 遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告』43 福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興財団
- 片根義幸 2006 『仲内遺跡』(『栃木県埋蔵文化財発掘調査報告』第 296 集) 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団
- 片根義幸 2012 『仲内遺跡』2 (『栃木県埋蔵文化財発掘調査報告』第 349 集) 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ未来づくり財団
- 金崎佳生他 1980 『びわ首沢遺跡』 郡山市教育委員会
- 川原由典他 1990 「井口遺跡」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報〔平成元年度〕』(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 113 集) 栃木県教育委員会
- 川原由典他 1995 『埴平遺跡』Ⅱ (『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 163 集) 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 木下 実 1993 『室ノ木 A 遺跡』 南那須町教育委員会
- 小竹弘則他 1995 『堂原・勝山城』 氏家町教育委員会
- 後藤信祐・谷中隆 1994 『埴平遺跡』Ⅰ (『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 144 集) 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 後藤信祐 1995 『槻沢遺跡』Ⅱ (『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 164 集) 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 後藤信祐 1996 『槻沢遺跡』Ⅲ (『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 171 集) 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 後藤信祐 2000 「第二編 原始古代 第二章 縄文時代」『高根沢町史』通史編 1 高根沢町史編さん委員会
- 後藤信祐 2001 「槻沢遺跡における竪穴住居建て替えに関する覚書—竪穴住居建て替えに伴う炉の作り替えパターン—」『研究紀要』第 13 号 (財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 後藤信祐 2005a 「堂ヶ原遺跡の複式炉の再検討—栃木県における複式炉の終焉—」『研究紀要』第 9 号 (財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 後藤信祐 2005b 「栃木県における複式炉の様相」『日本考古学協会 2005 年度福島大会シンポジウム資料集』 同大会実行委員会
- 後藤信祐 2007a 『ハッケトンヤ遺跡』(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 302 集) 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団
- 後藤信祐 2007b 「那須町向山神社遺跡の石組複式炉の再評価」『栃木県考古学会誌』第 28 集 栃木県考古学会
- 後藤信祐 2009a 「栃木県における中期後半～後期前半の「埋壘」の様相」『野州考古学論攷—中村紀男先生追悼論集—』 同論集刊行会

- 後藤信祐 2009b 「堂ヶ原遺跡出土の両耳壺について」『H isutory & C alture 氏家の歴史と文化』第 8 号 氏家歴史文化研究会
- 後藤信祐 2010a 「加曾利 E の複式炉・大木の複式炉―掘り方と埋設土器からみた複式炉の検討―」『研究紀要』第 18 号 (公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター
- 後藤信祐 2010b 「那須の縄文時代―袋状土坑・複式炉・配石と土器棺墓のころ―」『ブックレット 那須をとらえる』1 (有)随想舎
- 後藤信祐 2017 「栃木県における曾利式系土器の様相」『研究紀要』第 25 号 (公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター
- 眞保昌弘 1998 「三輪仲町遺跡(第 8 次調査)」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報 20 平成 8 年度(1996)』 栃木県教育委員会
- 鈴鹿良一 1986 「複式炉と敷石住居」『福島の研究』第 1 巻 地質考古篇 清文堂出版株式会社
- 芹澤清八 1985 ～ 1987 『御城田遺跡』(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 68 集) 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 芹澤清八 1994 『古宿遺跡』(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 142 集) 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 塚原孝一 1994 『三輪仲町遺跡』(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 143 集) 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 塚本師也 1997 『浄法寺遺跡』(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 196 集) 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 塚本師也 2007 「第 4 章 縄文時代 第 4 節 遺構研究 1. 建物跡」『研究紀要』第 15 号 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 塚本師也 2018 「栃木県における柄鏡形(敷石)住居の受容と背景」『国史学』第 223 号 国史学会
- 津野 仁 2007 『荻ノ平遺跡』(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 270 集) 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団
- 中木 太 1997 「大田原市平林真子遺跡の敷石住居について」『那須文化研究』9 那須文化研究会
- 中村信博 2005 『桧の木遺跡』1 本田技研工業株式会社桧の木遺跡調査団
- 中村紀男他 1994 『河原台』(『茂木町埋蔵文化財調査報告書』第 1 集) 茂木町教育委員会
- 長山明弘 2013 「那須塩原市草刈道下遺跡の複式炉と土器 - 「下野國那須郡石林の發見物」の再吟味 -」『型式論の実践的研究 I - 地域編年研究の広域展開を目指して -』(『千葉大学大学院人文社会科学部研究科研究プロジェクト報告書』第 251 集) 柳澤清一 編
- 福島雅儀他 1996 「越田和遺跡」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告』8 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター
- 福島雅儀 2012 「阿武隈川上流域における縄文中期から後期への集落変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 172 集 国立歴史民俗博物館
- 本橋恵美子 2017 「縄文時代における柄鏡形住居址の再検討」『山本暉久先生古稀記念論集 二十一世紀の考古学の現在』株式会社六一書房
- 水野順敏・新井 潔 2012 『片府田富士山遺跡』(『大田原市埋蔵文化財調査報告』第 1 集) 大田原市教育委員会
- 三春町教育委員会 1989 『シンポジウム縄文の配石と集落―三春町西方前遺跡と柴原 A 遺跡の問題点― 討議集』
- 山本暉久 2000 「外縁部の柄鏡形(敷石)住居」『縄文時代』第 11 号 縄文時代文化研究会
- 山本暉久 2002 『敷石住居址の研究』 六一書房
- 山本暉久 2012 「縄文時代社会の変質―関東・中部地方からみた縄文時代中期から後期へ―」『栃木県立なす風土記の丘資料館第 20 回特別展図録 那須の縄文社会が変わるころ―縄文時代中期から後期へ―』 栃木県教育委員会

栃木県域出土の初期須恵器集成

いけ だ とし ひろ うち やま とし ゆき
池田敏宏・内山敏行

1. はじめに
2. 初期須恵器研究略史－栃木県域事例を中心に－
3. 栃木県域出土の初期須恵器集成
4. 収束－栃木県域における初期須恵器～定型化以降須恵器の傾向－

1・2章では、執筆の契機、ならびに栃木県域を中心とした初期須恵器の研究略史を記した。3章では、本県域出土の初期須恵器一覧ならびに集成図を提示した。4章では、5世紀代須恵器の本県域出土傾向を整理した。

1. はじめに

筆者の一人・内山は、長年にわたり朝鮮半島系遺物研究に関わると共に、東谷・中島地区遺跡群(古墳時代中期の下毛野中心地域)において伽耶系陶質土器・初期須恵器が比較的多く出土する意義付けを行ったことがある(内山 2013・2016)。

また、もう一人の筆者・池田は、真岡市石島地内に所在する、古代集落跡(くるま橋遺跡)の整理・報告書作成を担当しており⁽¹⁾、大量の7～10世紀土器群中に初期須恵器が数点、混ざっていることに気がついた⁽²⁾。だが、発掘調査報告書の性格からずれるため、『くるま橋遺跡Ⅱ』報文中では初期須恵器出土の事実記載と、栃木県域出土初期須恵器一覧表の部分提示にとどめた。

梁木 誠氏や、小森哲也氏が本県域出土初期須恵器を集成してから早30年(梁木 1987, 小森 1988)。資料蓄積および初期須恵器研究が飛躍的に進んだ現在の視点から、栃木県域出土の初期須恵器一覧・集成図を改めて提示することに意義を感じ、ここに小文を草した次第である。

2. 初期須恵器研究略史－栃木県域事例を中心に－

〔全般的傾向〕

周知のとおり、須恵器は、日本自生の焼き物ではない。4世紀末から5世紀前半頃、朝鮮半島から陶質土器や、その製作技術(穴窯を用いた還元焰焼成、回転台成形技術、専門工人など)がもたらされ、北部九州、瀬戸内、大阪湾岸などの地域で須恵器が生産されたのが始まりである⁽³⁾。なかでも、ヤマト王権(のち律令政府)膝下の陶邑窯跡群(大阪府泉北丘陵に所在)では、5世紀～10世紀に至るまで、継続的に数多の窯が営まれたことが調査・研究の結果、明らかとなっている(併せて、精緻な出土須恵器編年等々が示され、全国的に窯業遺跡・遺構・遺物研究が進展するための礎を築いた)⁽⁴⁾。

〔本県域の動向〕

一方、東国各地でも1970年代以降の発掘調査事例増加に伴い古墳時代以降の土師器編年研究が活発化した。そして、広域クロス・ディテイングに有益な陶邑窯産須恵器や⁽⁵⁾、在産土師器に見られる須恵器の影響などに関心が及ぶようになっていった(本県の古墳時代土器編年としては大島 1979, 橋本 1981, 橋本・梁木 1984, 梁木・田熊 1989, 津野 1995, 梁木 1998, 藤田 1999 などがある)。そうした流れのもと、1987年11月

には、『東国における古式須恵器をめぐる諸問題』と題されたシンポジウムが開催された(千曲川水系古代文化研究所編1987)。その際、梁木 誠氏は栃木県域の初期須恵器動向を要約、須恵器を模倣した土師器が定量確認できることを報告した(梁木1987)。また翌年には、小森哲也氏が下野市(旧・南河内町)二ノ谷遺跡の考察において県内出土古式須恵器の傾向概観(遺跡の種別、器種、土師器編年との対応関係、位置付け)や、他地域事例(西日本、ひいては朝鮮半島伽耶地域)との比較を試みている(小森1988)。

次いで、柳沼賢治氏は、科学研究費補助金基盤研究『阿武隈川流域における古墳時代首長層の動向把握のための基礎研究』に携わり、北関東以北の1道9県を対象に古式須恵器出土遺跡分布を検討⁽⁶⁾。南東北「内陸部では栃木県宇都宮市や小山市周辺と福島県の阿武隈川中上流域に大きな搬入拠点が見出せる」旨を示唆している(柳沼2015,42頁)。

また、宇都宮市東谷・中島地区付近で大規模開発事前発掘調査が行われた際、揺籃期～初期須恵器ばかりでなく、伽耶系陶質土器も出土し、一躍注目を集めた(本稿掲載「栃木県域出土初期須恵器一覧表」を参照)。内山は調査担当者として、この発掘～報告書作成に関わると同時に(内山2005・2010・2013)、当該地域の中期集落・豪族居館・古墳群の諸関係整理を行っている(その際、南部居館周辺が渡来系文化を導入する窓口となっていた可能性を指摘)(内山2016)。

3. 栃木県域出土の初期須恵器集成

本県域出土の初期須恵器としては、116例(2020年2月19日現在)がある。以下に出土地一覧表・集成図、ならびに凡例を示す。

栃木県域出土初期須恵器一覧(凡例)

- ① 「2. 初期須恵器研究略史-栃木県域出土初期須恵器を中心に-」で触れたように、梁木誠氏、小森哲也氏、柳沼賢治氏らによって詳細な初期須恵器出土地一覧表が作成されている。栃木県域出土初期須恵器一覧表、ならびに集成図は、これらを底本としつつ、その後の知見を踏まえ加除筆を行っている。
- ② 本一覧表・集成図は、栃木県域で出土した陶質土器、初期須恵器(陶邑窯編年・揺籃期～TK208号窯式段階)を極力集成することを目的とした。ただし、小破片で時期(型式)特定困難資料については割愛した事例も一部存在する。
- ③ 本一覧表ならびに集成図とも遺物No.は同一とした。なお、須恵器の時期(型式)比定は、共著者(内山・池田)が話合った結果である。
- ④ 初期須恵器出土事例の比較・検討データとして、須恵器定型化以降(陶邑窯編年TK23号・47号窯式～TK10号窯式段階)の事例129例も扱っている。ただし、参考データなので時期(型式)特定が可能な資料を取り上げており、必ずしも網羅的集成にはなっていない。
- ⑤ 須恵器甕は、型式変化の特徴が緩く、かつ少なく、単独品では時期(型式)特定が困難な場合が多い(とりわけ、体部破片出土事例)。それゆえ、時期特定可能資料(須恵器坏・甕類、土師器坏・甕類、埴輪破片など)が共伴していない事例については一覧表・集成図、参考データへの掲載を割愛している。
- ⑥ 2020年2月の時点で整理作業が完結していない真岡市くるま橋遺跡、小山市西高椅遺跡、下野市箕輪城跡、大田原市酢屋5号墳などは掲載していない。

4. 収束－栃木県域における初期須恵器～定型化以降須恵器の傾向－

- (1) 栃木県域の陶質土器は4遺跡5例がある。祭祀遺跡の可能性が高い白山台遺跡[5]以外は、いずれも県央部からの出土で、宇都宮市南部～下野市北部に目立つ(第12図)。なお、権現山遺跡[1,2]、殿山遺跡[3]は豪族居館絡みの出土事例である。
- (2) 揺籃期～TK216号窯式段階の須恵器は8遺跡44例ある。ほとんどが栃木県央部からの出土である。上記・陶質土器と同じく宇都宮市南部～下野市北部に分布傾向がある(第12図)。一方、新郭遺跡[16～18]、砂部遺跡[20～25]など集中分布域から離れた地域で出土する事例も存在する。出土遺跡の性格を見てみると、豪族居館絡みが5例[6～8,14・15]、首長墳(前方後円墳)が1例[11]、集落出土が7例[9,10,12,13,16～18]ある。器種を見ると、坏(蓋・身)よりも特殊器種(組紐文有蓋壺, 把手付高坏・碗)、筒形器台、高坏、甕が占める比率が高い。
- (3) TK208号窯式段階の須恵器は30遺跡88例ある。栃木県央部に加え県北部(那須地域)、県南部(小山・野木, 足利地域)からも出土している。前代と同様、豪族居館関係遺跡[30～34,91～98,105]や首長墳(帆立貝型前方後円墳)[74～89]、拠点集落[20～29,72,90,99・100,102～109,111,113～89]から一定量が出土している。なお、本時期以降、円墳[36～71,110,114]でも須恵器が出土するようになっていく。出土器種は、坏(蓋・身), 甕, 樽形甕, 壺, 鉢など多種多様である。ちなみに、本時期以降、時期特定可能資料を共伴する須恵器甕の出土[29,41・42,63・64,68・69,93・94,102～105,108,111]が目立つようになってくる。墳丘を飾る甕(篠原2006, 佐藤2018・2019)の初現を考えていく上で興味深い事象と言える。
- (4) 本稿では、定型化以降(TK23・47～TK10号窯式)の須恵器例として33遺跡129例を取り上げた。まず、古墳出土事例について記す。前代と比べて須恵器出土古墳の数は少なくなる。しかし、その一方で、古墳1基あたりの須恵器出土数量が増加する傾向がうかがえる[126～139,160～171など]。次に集落出土事例について記す。本時期以降、拠点集落だけでなく中規模集落[117～120など]でも須恵器が出土するようになっていく。さらに、特殊器種よりも坏(蓋・身)の出土比率が勝るようになっている。竪穴住居(建物)跡出土須恵器をめぐるライフ・サイクル(life cycle)検討を行う必要を痛感する。なぜならば、小森氏が指摘するよう、この時期の須恵器は「「だれもが所有していた」ものではない」のであるから(小森1988,140頁)。

謝辞

酒井清治氏(前・駒澤大学教授)には、真岡市くるま橋遺跡出土初期須恵器の御教示を頂くと共に、本データ公表の意義と激励を賜った。また、柳沼賢治氏(福島大学特任教授)からは、科研費研究(柳沼2015)バック・データである「栃木県における古式須恵出土遺跡地名表」の御提供を受けた。さらに、有馬由乃, 石橋 宏, 佐藤 啓, 佐藤 渉, 篠原浩恵, 進藤敏雄, 武田智子, 津野 仁, 永井智教の各氏から出土地一覧表作成・集成図作成・文献収集などに関する御助力を頂いた。末文ながら、記して御礼申し上げます。

[註]

註1 くるま橋遺跡は、真岡市役所二宮コミュニティーセンターから東へ約700mの地点、十二所神社附近に位置する。7世紀中葉～10世紀頃の土師器・須恵器・古代陶器、土製品、石製品、金属製品が出土する古代の拠点集落跡である。また併せて、古墳時代中期の遺構(方墳1基, 竪穴住居跡2軒)、遺物(5世紀の土師器, 初期須恵器)も発見されている(2020年7月、『くるま橋遺跡II』刊行予定)。

註2 酒井清治氏に見て頂いた結果、陶器窯編年・TK216号窯式に相当し、古手の可能性があるとの御教示を得た

(『くるま橋遺跡Ⅱ』をご参照頂きたい)。

註3 菱田哲郎氏が指摘するように「[初期]須恵器の生産をもたらしたのは朝鮮半島からの渡来人」であり、「新しい焼き物を使う生活様式と、その技術が同時に伝わった」と推察できる(菱田1997,14頁、ただし[]内は池田補記)。

なお、田辺昭三氏は、「定型化以前」(= TK73号窯式からTK208号窯式段階)の「須恵器の総称」として「初期須恵器」という語を用いている(田辺1981)。また2000年以降の研究では、初期須恵器導入時の様相(TK73号窯式以上に三国時代の陶質土器の特徴を色濃く残す)を示す語として「揺籃期」も用いられている(宮崎・藤永2006,10頁など)。本稿では、これらの用語・定義を用いる。

註4 陶邑窯跡群の調査成果、ならびに陶邑窯須恵器編年については、森1958文献、田辺1966・1981文献、中村1980・1983・2006文献、菱田1997文献、宮崎・藤永2006文献などが詳述している。また、全国ないし極東的規模で陶質土器・初期須恵器を扱ったものとして檜崎1983文献、九州古文化研究会1985～1987文献、宮川2000文献などがある。御併読頂きたい。

註5 「古墳時代の須恵器は東海から北部九州にかけて対比できるほど規格性が強い。須恵器製作に規範が存在したことを示している。(略)この定型化は渡来技術の日本的消化を示すもの」と言え(宮川2000,44頁)、広域クロス・ディテリングに有益な要素でもある。

註6 柳沼氏は、これに加えて検討対象地域の「古式須恵器出土遺跡地名表」をバック・データとして作成している(2015年10月時点データ、ただし科研費報告書に本表は掲載されていない)。本稿作成にあたって、柳沼氏から「栃木県における古式須恵器出土遺跡地名表」データの御提供があった。

なお、小野寿美子氏は、古霞ヶ浦沿岸地域(茨城県南部～千葉県北部)を対象に5～7世紀の須恵器出土地名表作成ならびに出土傾向検討を行っており(小野2003)、本稿作成のヒントとなった。

[引用・参考文献]

「2. 須恵器研究略史—栃木県域出土初期須恵器を中心に—」関係 ※アイウエオ順

[全般的傾向]

大阪府教育委員会 1972～1994『陶邑』I～VIII

小野寿美子 2003「古霞ヶ浦沿岸地域における古墳時代須恵器の受容」『筑波大学 先史学・考古学研究』第14号、筑波大学歴史・人類学系 先史学・考古学コース

(財)大阪府埋蔵文化財協会 1992～1995『陶邑・大庭寺遺跡』I～IV

酒井清治 1984「II【報告】須恵器の源流—各地の初期須恵器をめぐって— 関東地方」『日本陶磁の源流—須恵器出現の謎を探る—』檜崎彰一監修、柏書房

九州古文化研究会 1985～1987『古文化探叢』第15・16・18集 特集・初期須恵器の地域相

田辺昭三 1966『陶邑古窯跡群I』平安学園考古学クラブ

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

中村 浩 1980『考古学ライブラリー5 須恵器』ニュー・サイエンス社

中村 浩 1983「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』III、大阪府教育委員会

中村 浩 2006『シリーズ「遺跡を学ぶ」028 泉北丘陵に広がる須恵器窯・陶邑窯跡群』新泉社

檜崎彰一監修 1984『日本陶磁の源流—須恵器出現の謎を探る—』柏書房

菱田哲郎 1997『歴史発掘10 須恵器の系譜』講談社

宮川禎一 2000『日本の美術』No.407 陶質土器と須恵器、至文堂

宮崎泰史・藤永正明 2006『平成17年度冬季企画展 重要文化財指定記念 年代のものさし—陶邑の須恵器—』大阪府立近つ飛鳥博物館

森 浩一 1958「和泉・河内窯出土の須恵器編年」『世界陶磁全集』1、河出書房

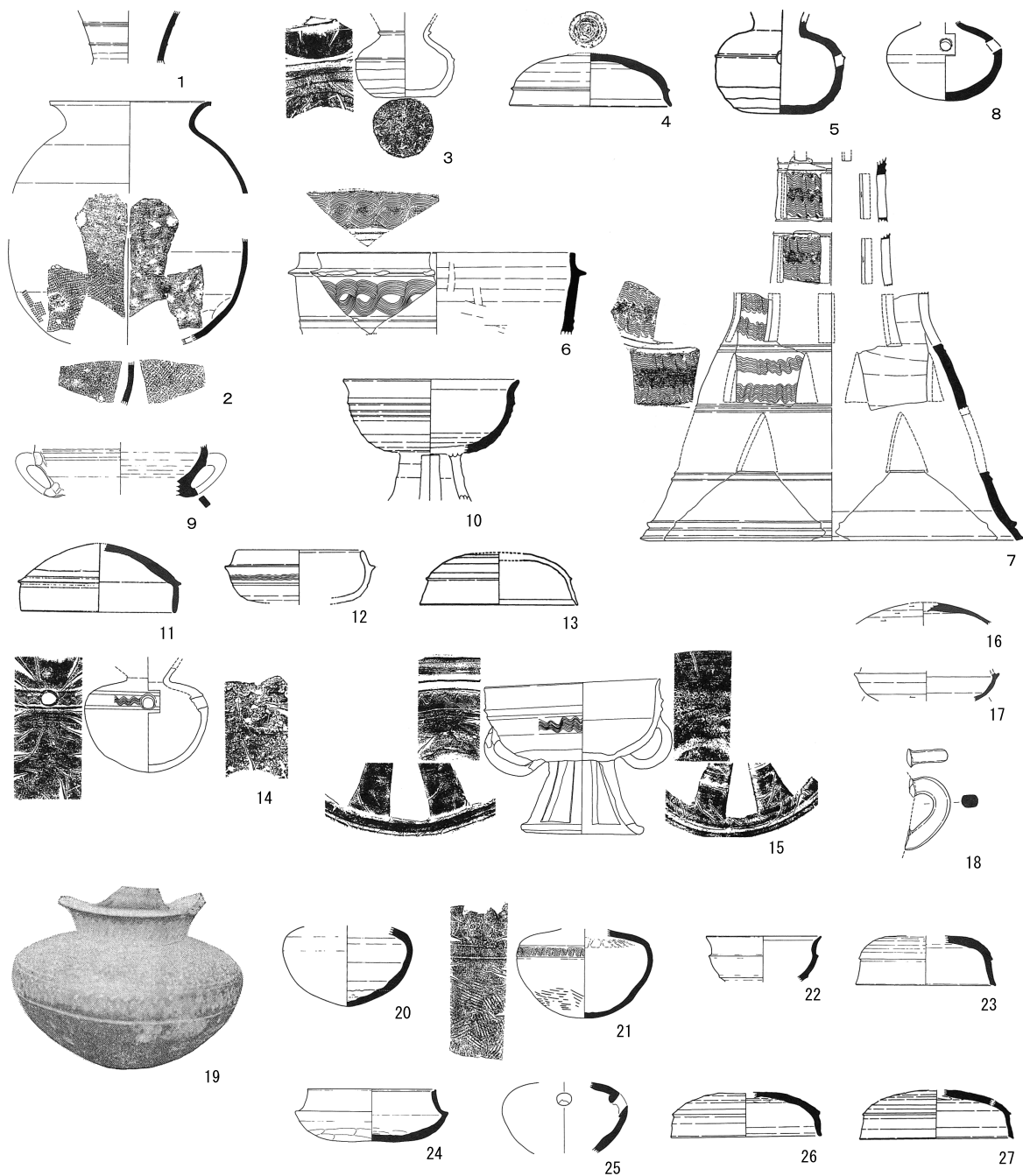
[本県域の動向]

内山敏行 2005「第13章 まとめ 第3節 古墳時代の集落と遺物」『東谷・中島地区遺跡群5 立野遺跡』栃木県教

- 育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 内山敏行 2010 「第12章 まとめ 第2節 古墳時代」『東谷・中島地区遺跡群 10 権現山遺跡北部・杉村遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 内山敏行 2013 「第12章 まとめ 第2節 古墳時代」『東谷・中島地区遺跡群 14 権現山遺跡南部・磯岡遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団
- 内山敏行 2016 「古墳時代中期の下毛野地域と東谷・中島地区遺跡群」『とちぎを掘るー栃木の考古学の到達点ー』栃木県考古学会編、随想舎
- 大島和子 1979 「権現山北遺跡出土の和泉式土器」『峰考古』第2号、宇都宮大学考古学研究会
- 小森哲也 1988 「第6章 成果と問題点 第3節 D5-S1002の須恵器について」『二ノ谷遺跡』住宅・都市整備公団財団法人栃木県文化振興事業団
- 佐藤 渉 2018 「牛塚古墳出土の須恵器甕ー「赤い甕」の儀礼ー」『牛塚古墳・車塚古墳』I、壬生町教育委員会
- 佐藤 渉 2019 「群集墳の大甕儀礼ー群馬県西部を中心にー」『アーキオ・クレイオ』第16号、東京学芸大学考古学研究室
- 篠原祐一 2006 「須恵器大甕祭祀」『栃木県考古学会誌』第27集、栃木県考古学会
- 千曲川水系古代文化研究所編 1987 『第8回 3県シンポジウム 東国における古式須恵器をめぐる諸問題』北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所
- 津野 仁 1995 「栃木県における6・7世紀の土器編年と地域的特徴」『東国土器研究』第4号 特集 東国における律令制成立までの土器様相、東国土器研究会
- 橋本澄朗 1981 「6 古墳時代の土器」『栃木県史』通史編1、栃木県
- 橋本澄朗・梁木 誠 1984 「V 栃木県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
- 柳沼賢治 2015 「阿武隈川流域の古式須恵器」『阿武隈川流域における古墳時代首長層の動向把握のための基礎研究』(課題番号 25370886)平成 25～27 年度科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究報告書 研究代表者 菊地芳朗、福島大学行政政策学類
- 柳沼賢治 2019 「福島県中通りの古墳と集落ー郡山盆地の中期を中心にー」『古墳分布北縁地における地域間交流解明のための実証的研究』(課題番号 16H03504)平成 28～30 年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究報告書 研究代表者 菊地芳朗、福島大学行政政策学類
- 梁木 誠 1987 「栃木県の様相」『第8回 3県シンポジウム 東国における古式須恵器をめぐる諸問題』北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所
- 梁木 誠・田熊清彦 1989 「栃木県の彩色土器について」『東国土器研究』第2号 特集 黒色土器ー出現と背景、東国土器研究会
- 梁木 誠 1998 「栃木県における古墳時代中期の土器様相」『栃木県立なす風土記の丘資料館第6回企画展 ムラ・まつり・古墳ー5世紀の北関東ー』栃木県教育委員会
- 藤田典夫 1999 「栃木県における5世紀の土器編年」『東国土器研究』第5号 特集 東国における古墳時代中期の土器様相と諸問題、東国土器研究会
- 「3. 栃木県域の初期須恵器集成」関係 ※一覧表掲載順**
- 1・2,6・7,30～32,157・158 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2010 『栃木県埋蔵文化財調査報告第331集 東谷・中島地区遺跡群 10 権現山遺跡北部・杉村遺跡』/2013 『栃木県埋蔵文化財調査報告第360集 東谷・中島遺跡群 14 権現山遺跡南部・杉村遺跡』
- 3,14,15,91～98,199～202 日本窯業史研究所 1995 『栃木県上三川町 殿山遺跡I』
- 4 住宅・都市整備公団・財団法人栃木県文化振興事業団 1988 『栃木県埋蔵文化財調査報告第97集 二ノ谷遺跡』
- 5, 11・12,88・89,115・116,209 梁木 誠 1987 「栃木県の様相」『第8回 3県シンポジウム東国における古式須恵器をめぐる諸問題』北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所
- 8,33～35,159～171 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2001 『栃木県埋蔵文化財調査報告第257集 権現山遺跡・百目鬼遺跡』

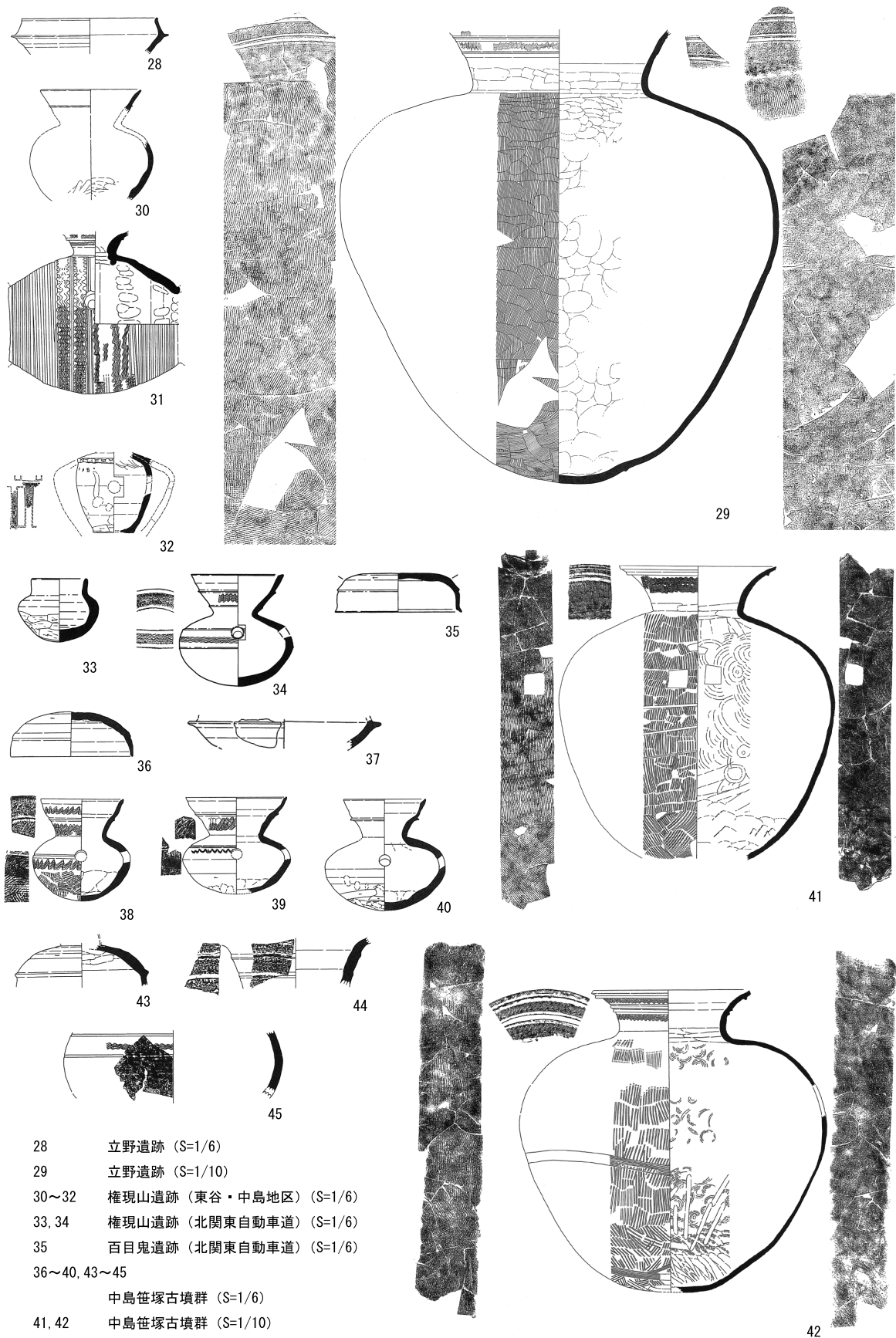
- 9,22～25 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1990『栃木県埋蔵文化財調査報告第108集 砂部遺跡』
- 10,26・27 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2007『栃木県埋蔵文化財調査報告第305集 東谷・中島地区遺跡群8 砂田遺跡』
- 12・13,90,177 宇都宮市教育委員会 1979『宇都宮市埋蔵文化財調査報告第5集 権現山北遺跡』
- 16～18 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1998『栃木県埋蔵文化財調査報告第214集 新郭古墳群・新郭遺跡・下り遺跡』
- 19 湯津上村 1978『湯津上村誌』
- 28・29,152～156 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2005『栃木県埋蔵文化財調査報告第290集 東谷・中島地区遺跡群5 立野遺跡』
- 36～49,172 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2008『栃木県埋蔵文化財調査報告第311集 東谷・中島地区遺跡群9 中島笹塚古墳群・中島笹塚遺跡』
- 50～71,173～175 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2007『栃木県埋蔵文化財調査報告第299集 東谷・中島地区遺跡群7 磯岡北古墳群』
- 72 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2006『栃木県埋蔵文化財調査報告第292集 東谷・中島地区遺跡群6 磯岡遺跡』
- 74～87,126～139 宇都宮市教育委員会 2003『宇都宮市埋蔵文化財調査報告第48集 塚山南古墳・塚山西古墳』
- 99,203～206 日本窯業史研究所 1989『栃木県壬生町 宮の森集落遺跡群』
- 100,207 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1991『栃木県埋蔵文化財調査報告第121集 鹿沼流通業務団地内遺跡』
- 101 大橋泰夫 1987「国分寺町出土の樽形甕」『考古回覧』創刊号、考古学談話会
- 102,215～217 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2007『栃木県埋蔵文化財調査報告第313集 市ノ塚遺跡』
- 103 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2009『栃木県埋蔵文化財調査報告第324集 曲田遺跡・馬場先遺跡』
- 104 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1984『栃木県埋蔵文化財調査報告第57集 赤羽根』
- 105 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1993『栃木県埋蔵文化財調査報告第138集 成沢遺跡』
- 106 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1985『栃木県埋蔵文化財調査報告第70集 鷹の巣前・本郷前・向野原遺跡』
- 107・108,220～223 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1996『栃木県埋蔵文化財調査報告第180集 西裏遺跡』
- 109 栃木県教育委員会・公益財団法人とちぎ未来づくり財団 2011『栃木県埋蔵文化財調査報告第336集 千駄塚浅間遺跡・栗宮宮内遺跡』
- 110 小山市教育委員会 1985『小山市埋蔵文化財調査報告第16集 宮内北遺跡』
- 111 小山市教育委員会 1982『小山市埋蔵文化財調査報告第11集 乙女不動原北浦遺跡』
- 112・113,230 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1998『栃木県埋蔵文化財調査報告第227集 清六Ⅲ遺跡Ⅲ(古墳時代編)』
- 114 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ未来づくり財団 2012『栃木県埋蔵文化財調査報告第351集 菅田古墳群』
- 115・116 足利市教育委員会 1980『丸山耕地遺跡』
- 117～120 宇都宮市教育委員会 1993『宇都宮市埋蔵文化財調査報告第31集 聖山公園遺跡(古代・中世)』
- 121～125 宇都宮市教育委員会 1994『宇都宮市埋蔵文化財調査報告第35集 雷電山遺跡』
- 140～147 宇都宮市教育委員会 2007『宇都宮市埋蔵文化財調査報告第61集 辻の内遺跡』
- 148・149 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 2000『栃木県埋蔵文化財調査報告第239集 成願寺』

- 遺跡』
- 150・151 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2001『栃木県埋蔵文化財調査報告第251集 大関台遺跡』
- 176 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2009『栃木県埋蔵文化財調査報告第318集 権現山遺跡・東谷北浦遺跡』
- 178～198 梁木 誠 1981「宇都宮市富士見町向山出土の須恵器」『峰考古』第3号、宇都宮大学考古学研究会
- 218・219 小山市教育委員会 1986『小山市埋蔵文化財調査報告第17集 喜沢海道間遺跡』
- 208 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1999『栃木県埋蔵文化財調査報告第223集 台畑遺跡・谷向遺跡』
- 210・211 植木茂雄・君島利行 1984「上三川町大山地区内出土の須恵器」『栃木県考古学会誌』第8集、栃木県考古学会
- 212 栃木県教育委員会 1974『栃木県埋蔵文化財調査報告第14集 井頭』
- 214 秋元陽光・斎藤 弘 1984「芳賀郡二宮町大和田富士山古墳について」『栃木県考古学会誌』第8集、栃木県考古学会
- 224・225 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1994『栃木県埋蔵文化財調査報告第149集 田間東道北遺跡』
- 226～229 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1998『栃木県埋蔵文化財調査報告第209集 寺野東遺跡Ⅶ（古墳時代墳墓編）』
- 231・232 栃木県教育委員会 1977『栃木県埋蔵文化財調査報告第19集 上敷遺跡』
- 213 真岡市 1984『真岡市史』第1巻 考古資料編
- 233～245 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1995『栃木県埋蔵文化財調査報告第165集 馬門南遺跡』
- 246 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1995『栃木県埋蔵文化財調査報告第159集 乙畑・大久保古墳群』



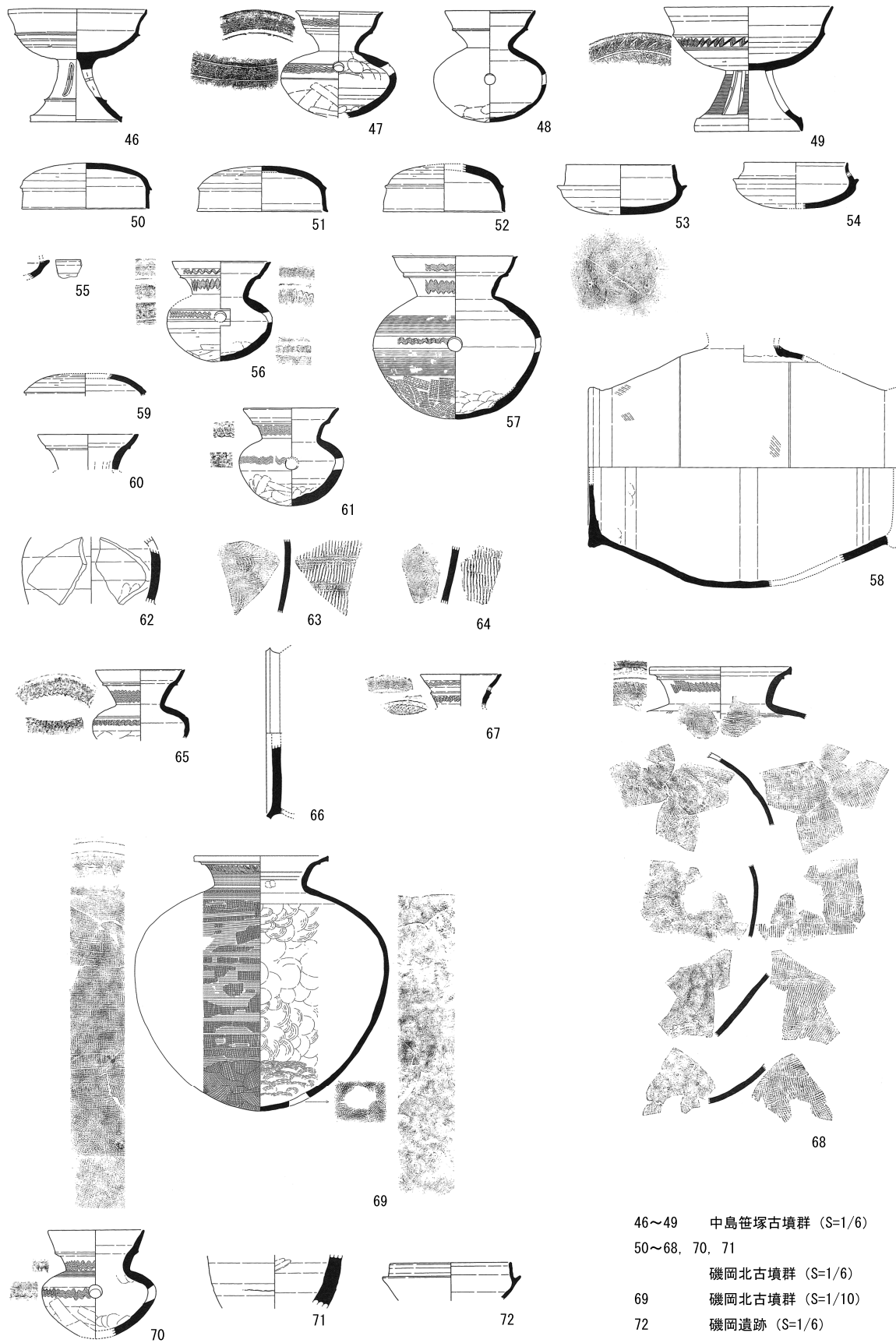
- | | | | |
|------|-------------------------|--------|----------------------|
| 1, 2 | 権現山遺跡 (東谷・中島地区) (S=1/6) | 11 | 塚山古墳 (S=1/6) |
| 3 | 殿山遺跡 (S=1/6) | 12 | 権現山北遺跡 (2号住) (S=1/6) |
| 4 | 二ノ谷遺跡 (S=1/6) | 13 | 権現山北遺跡 (7号住) (S=1/6) |
| 5 | 白山台遺跡 (S=1/6) | 14, 15 | 殿山遺跡 (S=1/6) |
| 6, 7 | 権現山遺跡 (東谷・中島地区) (S=1/6) | 16~18 | 新郭遺跡 (S=1/6) |
| 8 | 権現山遺跡 (北関東自動車道) (S=1/6) | 19 | 岩船台出土 |
| 9 | 砂部遺跡 (S=1/6) | 20~25 | 砂部遺跡 (S=1/6) |
| 10 | 砂田遺跡 (S=1/6) | 26, 27 | 砂田遺跡 (S=1/6) |

第1図 栃木県域出土の初期須恵器 (1)



- 28 立野遺跡 (S=1/6)
- 29 立野遺跡 (S=1/10)
- 30~32 権現山遺跡 (東谷・中島地区) (S=1/6)
- 33, 34 権現山遺跡 (北関東自動車道) (S=1/6)
- 35 百目鬼遺跡 (北関東自動車道) (S=1/6)
- 36~40, 43~45
中島笹塚古墳群 (S=1/6)
- 41, 42 中島笹塚古墳群 (S=1/10)

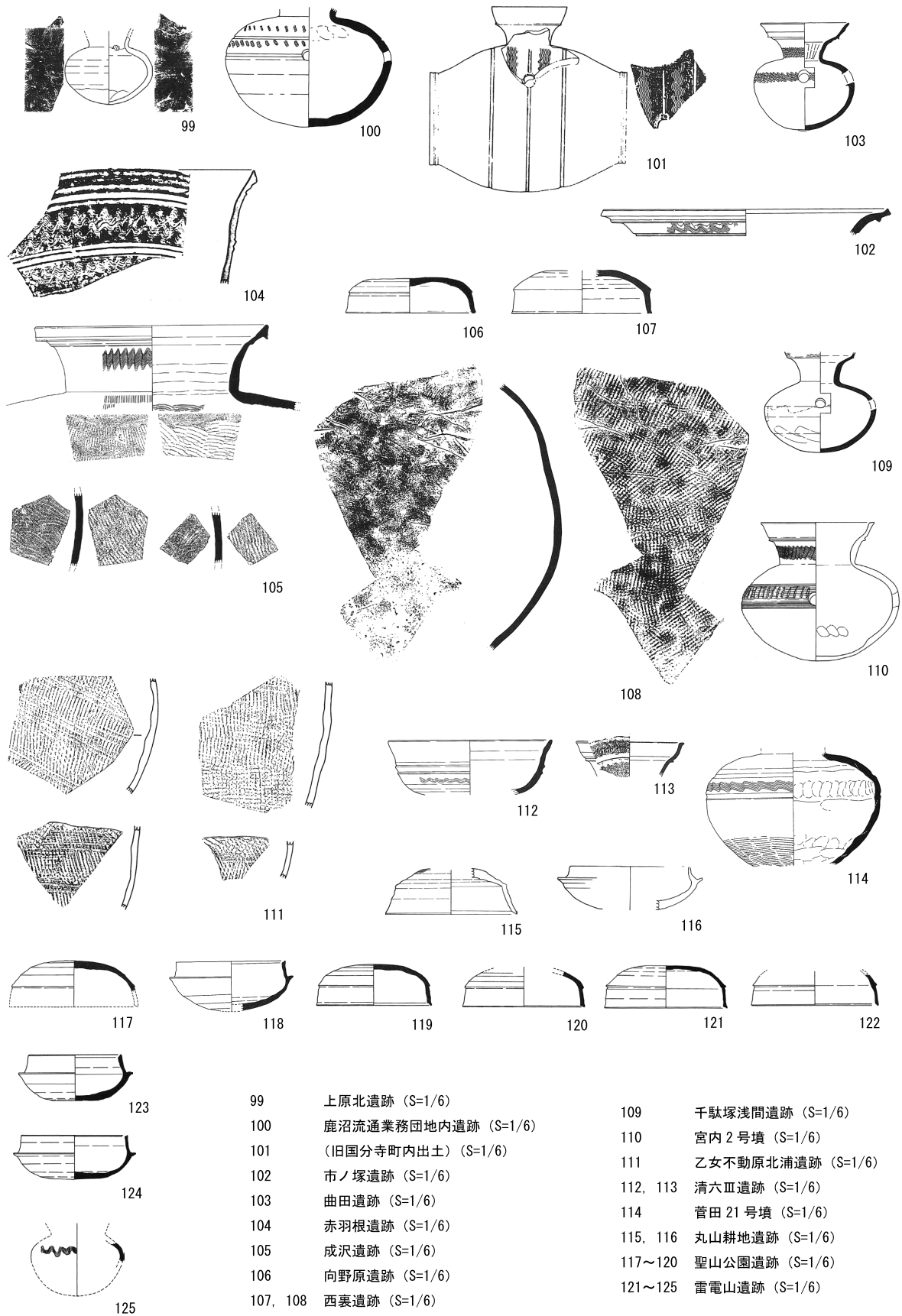
第2図 栃木県出土の初期須恵器 (2)



第 3 図 栃木県域出土の初期須恵器 (3)

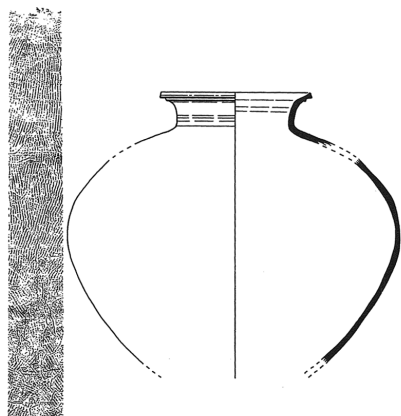


第4図 栃木県域出土の初期須恵器 (4)

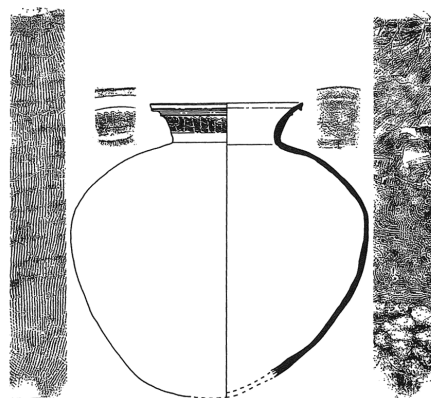


- | | | | |
|----------|---------------------|----------|-------------------|
| 99 | 上原北遺跡 (S=1/6) | 109 | 千駄塚浅間遺跡 (S=1/6) |
| 100 | 鹿沼流通業務団地内遺跡 (S=1/6) | 110 | 宮内2号墳 (S=1/6) |
| 101 | (旧国分寺町内出土) (S=1/6) | 111 | 乙女不動原北浦遺跡 (S=1/6) |
| 102 | 市ノ塚遺跡 (S=1/6) | 112, 113 | 清六皿遺跡 (S=1/6) |
| 103 | 曲田遺跡 (S=1/6) | 114 | 菅田21号墳 (S=1/6) |
| 104 | 赤羽根遺跡 (S=1/6) | 115, 116 | 丸山耕地遺跡 (S=1/6) |
| 105 | 成沢遺跡 (S=1/6) | 117~120 | 聖山公園遺跡 (S=1/6) |
| 106 | 向野原遺跡 (S=1/6) | 121~125 | 雷電山遺跡 (S=1/6) |
| 107, 108 | 西裏遺跡 (S=1/6) | | |

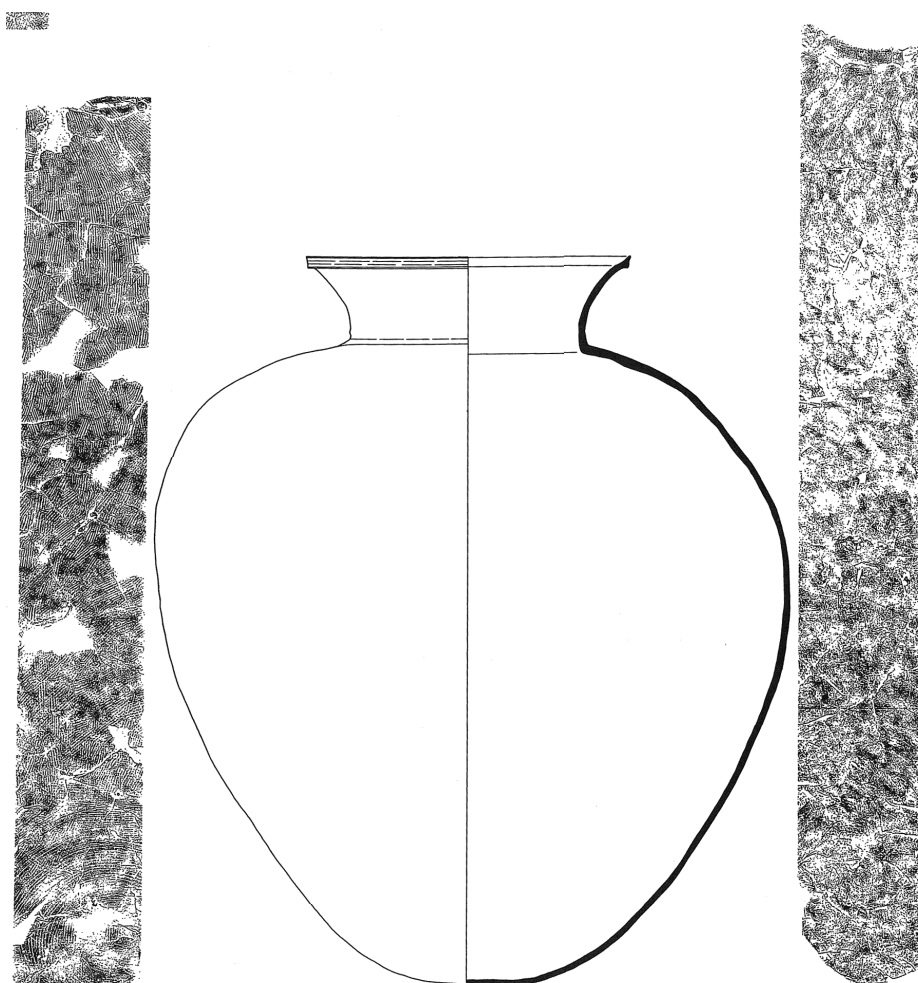
第5図 栃木県域出土の初期須恵器 (5) (定型化以降を含む)



126



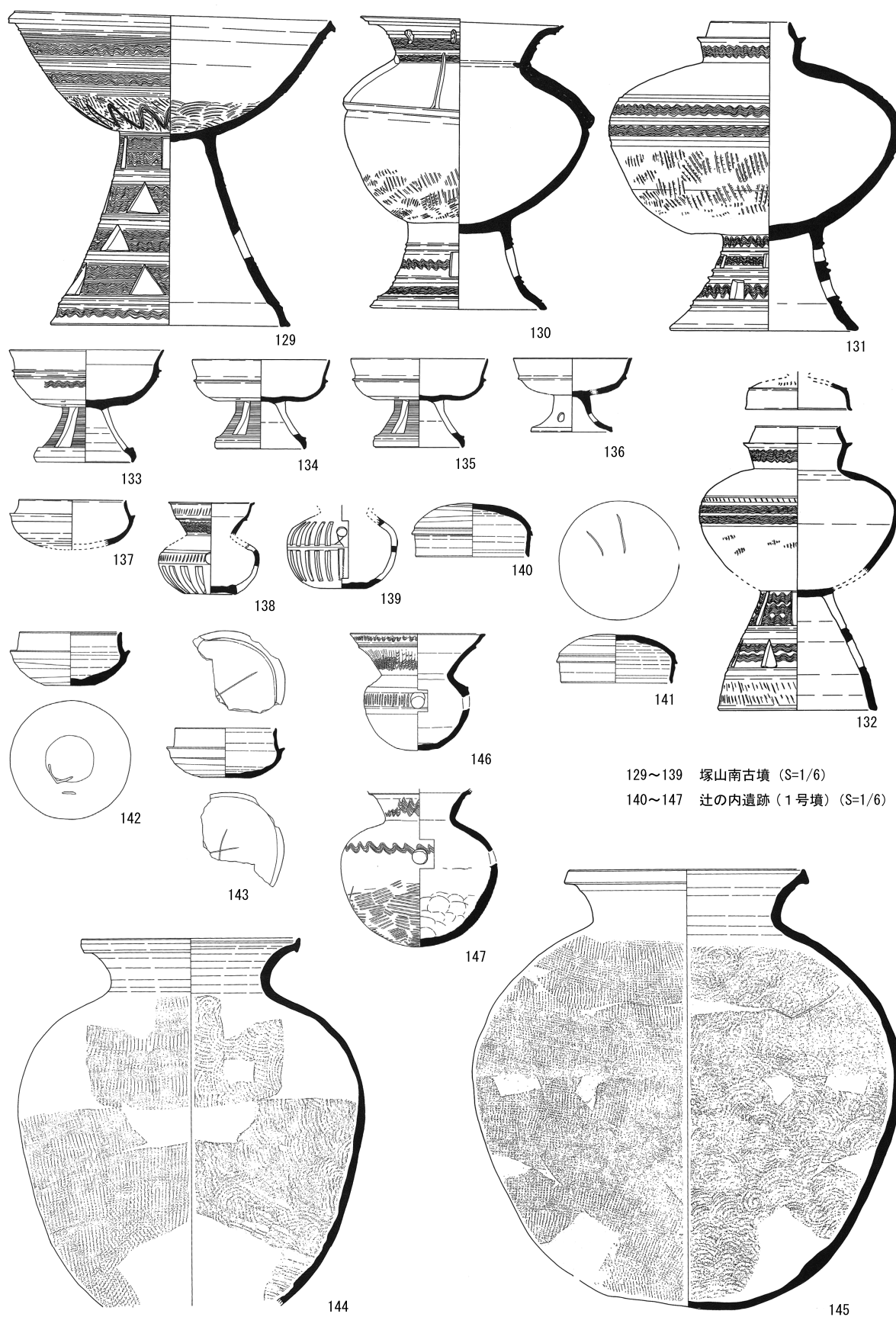
127



128

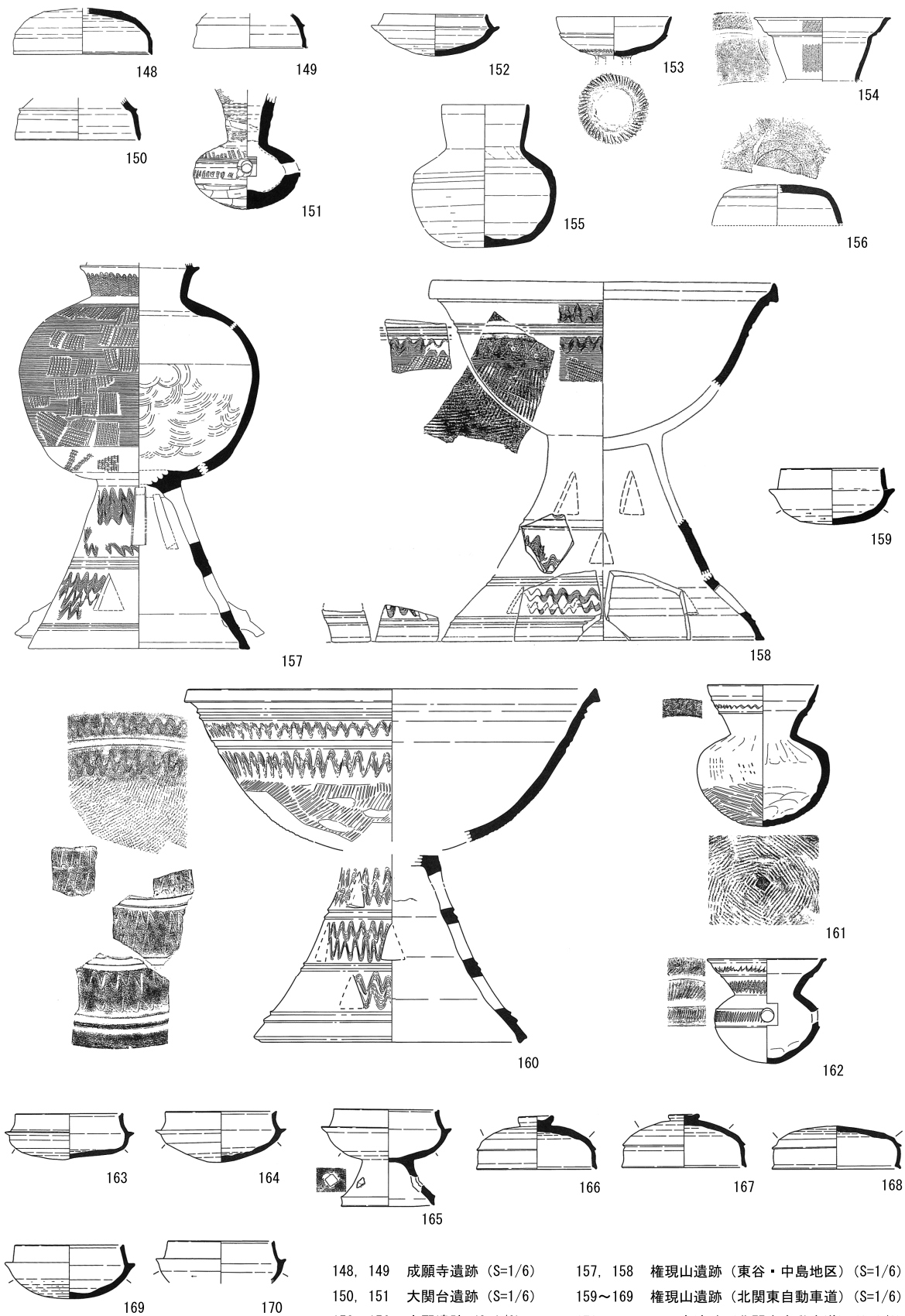
126~128 塚山南古墳 (S=1/10)

第6図 栃木県出土の古式須恵器(6) (定型化以降)

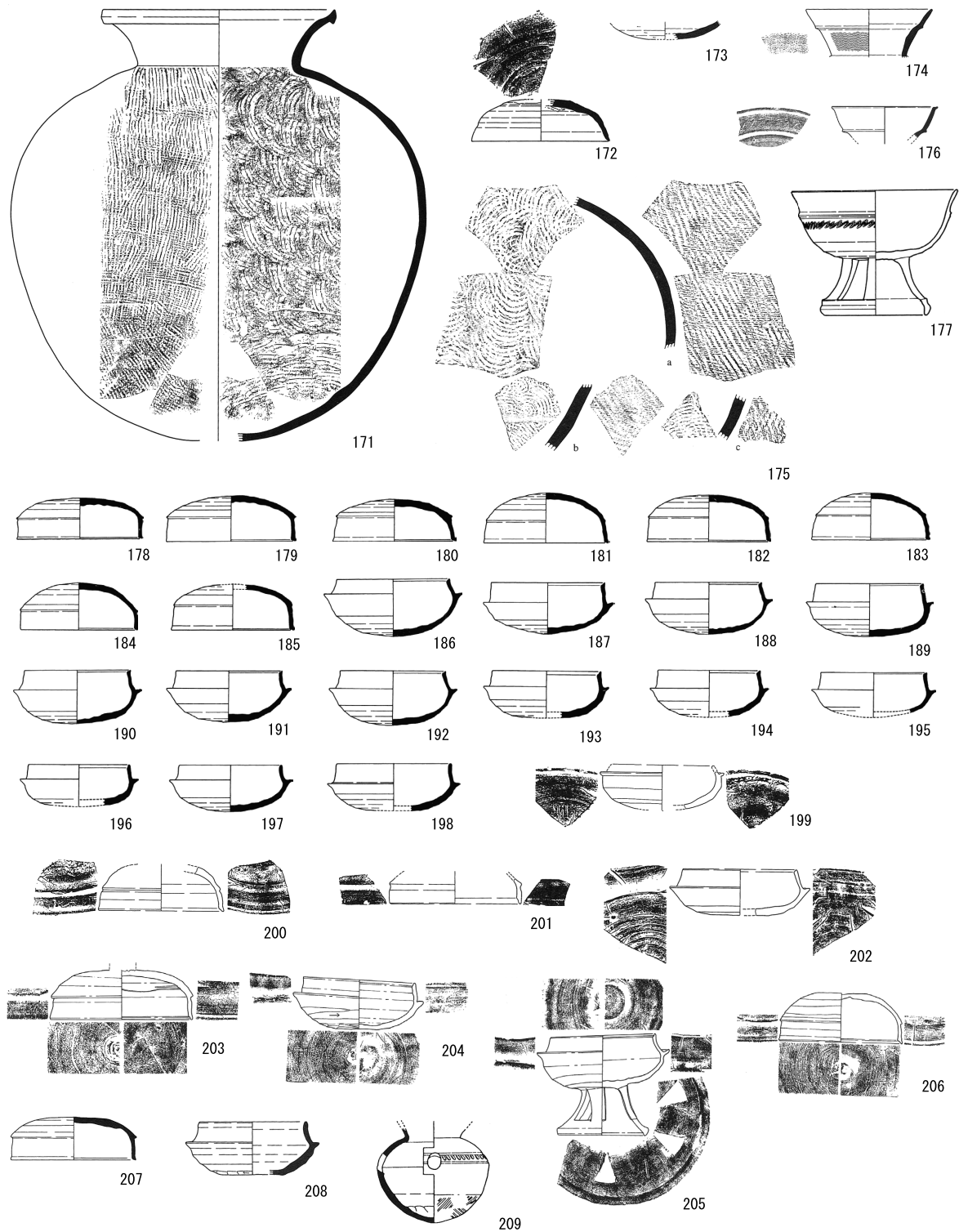


129~139 塚山南古墳 (S=1/6)
 140~147 辻の内遺跡 (1号墳) (S=1/6)

第7図 栃木県域出土の古式須恵器 (7) (定型化以降)

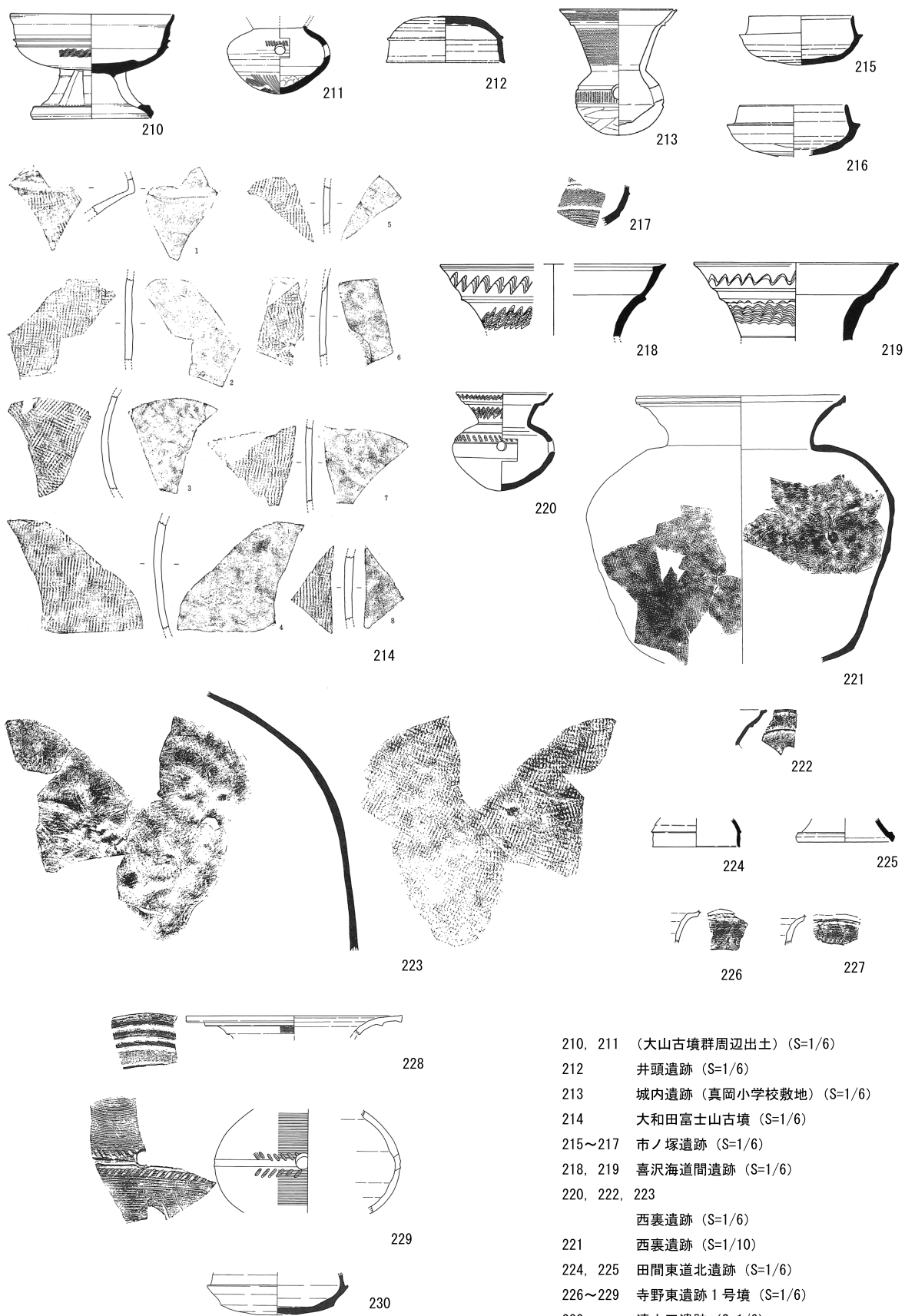


第8図 栃木県域出土の古式須恵器（8）（定型化以降）



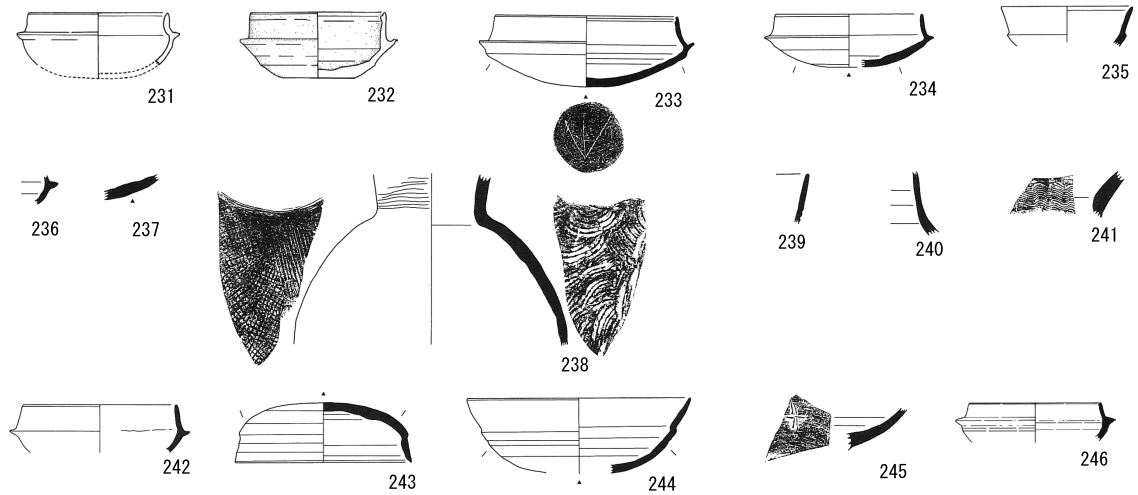
- | | | | |
|---------|-------------------------|---------|---------------------|
| 171 | 権現山遺跡 (北関東自動車道) (S=1/6) | 199~202 | 殿山遺跡 (S=1/6) |
| 172 | 中島笹塚遺跡 (S=1/6) | 203~206 | 東林北遺跡 (S=1/6) |
| 173~175 | 磯岡北古墳群 (S=1/6) | 207 | 鹿沼流通業務団地内遺跡 (S=1/6) |
| 176 | 東谷北浦遺跡 (S=1/6) | 208 | 台畑遺跡 (S=1/6) |
| 177 | 権現山北遺跡 (16号住居) (S=1/6) | 209 | (日産工場付近出土) (S=1/6) |
| 178~198 | 宇向山出土 (S=1/6) | | |

第 9 図 栃木県域出土の古式須恵器 (9) (定型化以降)



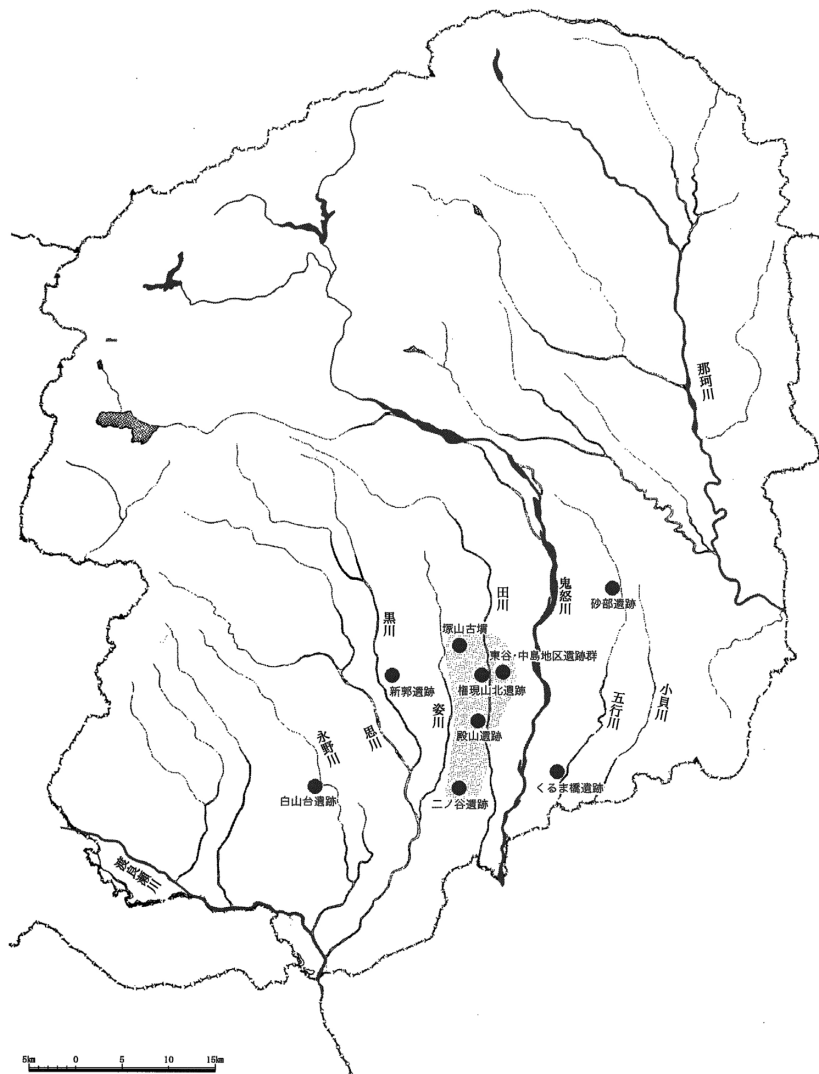
- 210, 211 (大山古墳群周辺出土) (S=1/6)
- 212 井頭遺跡 (S=1/6)
- 213 城内遺跡 (真岡小学校敷地) (S=1/6)
- 214 大和田富士山古墳 (S=1/6)
- 215~217 市ノ塚遺跡 (S=1/6)
- 218, 219 喜沢海道間遺跡 (S=1/6)
- 220, 222, 223 西裏遺跡 (S=1/6)
- 221 西裏遺跡 (S=1/10)
- 224, 225 田間東道北遺跡 (S=1/6)
- 226~229 寺野東遺跡1号墳 (S=1/6)
- 230 清六Ⅲ遺跡 (S=1/6)

第10図 栃木県域出土の古式須恵器 (10) (定型化以降)



- 231, 232 上敷遺跡 (S=1/6)
- 233~245 馬門南遺跡 (S=1/6)
- 246 乙畑大久保古墳群 (S=1/6)

第11図 栃木県域出土の古式須恵器(11) (定型化以降)



第12図 栃木県域出土の陶質土器・TK216号窯式以前の須恵器 (分布図)

第1表 栃木県域出土初期須恵器一覧表(1)

遺跡	所在地	遺跡の性格	須恵器型式	出土遺構	出土器種	備考
権現山遺跡(東谷・中島地区)	宇都宮市東谷町	豪族居館	---	居館付近溝, 居館付近の建物	壺(1), 小型壺(2)	伽耶系陶質土器
殿山遺跡	上三川町上神主	集落/豪族居館か	---	KT-121	小型壺(3)	伽耶系陶質土器
二ノ谷遺跡	下野市自治医大地区	集落	---	D5-SI002	坏蓋(4)	伽耶系陶質土器
白山台遺跡	栃木市皆川城内町	祭祀遺跡か	---	表面採集資料	ハソウ(5)	韓国栄山江流域の陶質土器
権現山遺跡(東谷・中島地区)	宇都宮市東谷町	豪族居館	大野池231号窯頃	SG10区SI-88	組紐文有蓋壺(6)	揺籃期須恵器
			TK73~TK216か	北部居館の溝と周辺	筒形器台(7)	
権現山遺跡(北関東自動車道)		集落/豪族居館/古墳群	TK216~208頃	B区SI-102	ハソウ(8)	権現山・百目鬼遺跡編年Ⅱ期の標識資料
砂部遺跡	高根沢町大字太田	集落	TK216	SI-157	把手付高坏(9)	
砂田遺跡	宇都宮市砂田町ほか	集落	TK216	6区SI-34	高坏(10)	
塚山古墳	宇都宮市西川田町	古墳(前方後円墳)	TK216	表面採集, 前方部西裾, 南周堀	坏蓋(11)	坏身, 甕, 高坏, 器台
権現山北遺跡	宇都宮市茂原町	集落	TK216か	2号住居	坏身(12)	梁木1998編年Ⅲ期の標識資料
			TK216~208頃	7号住居	坏蓋(13)	梁木1998編年Ⅳ期の標識資料
殿山遺跡	上三川町上神主	集落	TK73~TK216か	KT-52	ハソウ(14)	藤田1999編年Ⅱ期の標識資料
			TK216か	KT-28	把手付高坏(15)	
新郭遺跡	壬生町羽生田	集落/古墳	TK216~208	SI-29	坏蓋(16), 坏身(17)	
			TK216	SI-51	把手付碗(18)	
岩船台出土	大田原市湯津上	集落/古墳	TK208	---	ハソウ(19)	
砂部遺跡	高根沢町大字太田	集落	TK208	SI-230	ハソウ(20)	藤田1999編年Ⅲ期の標識資料
			TK208	SI-420	ハソウ(21)	藤田1999編年Ⅲ期の標識資料
			TK208	SI-422	鉢片か(22)	藤田1999編年Ⅲ期の標識資料
			TK208	SI-434	坏蓋(23), 坏身(24), ハソウ(25)	藤田1999編年Ⅲ期の標識資料
砂田遺跡	宇都宮市砂田町ほか	集落	TK208	4区SI-13	坏蓋(26・27)	
立野遺跡	宇都宮市東谷町ほか	集落	TK208~23か	5区SI-60	坏身(28), 大甕(29)	立野遺跡編年3段階の標識資料
権現山遺跡(東谷・中島地区)	宇都宮市東谷町	集落/豪族居館	TK208	SG5区SI-11	壺(30)	
			TK208	SG10区SI-108	樽形ハソウ(31)	
			TK208	SG10区SI150, SI64a	二重ハソウ(32)	
権現山遺跡(北関東自動車道)		集落/豪族居館/古墳群	TK208	A区SI-272	短頸壺(33)	権現山・百目鬼遺跡編年Ⅲ期標識資料
			TK208	B区SI-048	ハソウ(34)	権現山・百目鬼遺跡編年Ⅲ期標識資料
百目鬼遺跡(北関東自動車道)			TK208	SI-035	坏蓋(35)	
中島笹塚古墳群	宇都宮市砂田町	古墳(円墳)	TK208か	2号墳	坏蓋(36), 坏身(37), ハソウ(38~40), 大甕(41・42)	
		古墳(円墳)	TK208~47か	3号墳	高坏蓋(43), 壺(44・45)	
		古墳(円墳)	TK208~23か	10号墳	高坏蓋(46), 壺(47・48)	
		古墳(円墳)	TK23	12号墳	高坏(49)	

第2表 栃木県域出土初期須恵器一覧表(2)

遺跡	所在地	遺跡の性格	須恵器型式	出土遺構	出土器種	備考
磯岡北古墳群	宇都宮市砂田町ほか	古墳(円墳)	TK208	1号墳周溝	坏蓋(50~52), 坏身(53~55), ハソウ(56・57), 樽形ハソウ(58)	
		古墳(円墳)	TK208	2号墳	坏蓋(59), ハソウ(60・61), 壺(62), 甕(63・64)	
		古墳(円墳)	TK208	3号墳	ハソウ(65), 樽形ハソウ(66), 壺(67), 大甕(68)	
		古墳(円墳)	TK208	5号墳	甕(69)	
		古墳(円墳)	TK208	8号墳	ハソウ(70), 甕(73), 壺(71)	
磯岡遺跡	上三川町磯岡	集落	TK208~23か	5区SI-42	坏身(72)	後世の住居跡覆土への混入品
塚山西古墳	宇都宮市西川田町	古墳(帆立貝型前方後円墳)	TK208か	周溝覆土中	器台片, 高坏片, 甕, 鉢(74~87)	
雀宮牛塚古墳	宇都宮市新富町	古墳(帆立貝型前方後円墳)	TK208	詳細出土状況は不明	ハソウ(88), 高坏(89)	
権現山北遺跡	宇都宮市茂原町	集落	TK(216)~208	7号住居	坏蓋(90)	梁木1998編年IV期, 藤田1999編年III期の標識資料
殿山遺跡	上三川町上神主	集落	TK208か	KT-51	坏身(91), ハソウ(92), 甕(93・94)	
			TK208~23	KT-53	坏身(95), 高坏(96), ハソウ(97), 壺(98)	
上原北遺跡	宇都宮市/壬生町	集落	TK208	KT-1号	ハソウ(99)	藤田1999編年III期の標識資料
鹿沼流通業務団地内遺跡	鹿沼市上石川	集落	TK208	SI-96	ハソウ(100)	
(旧国分寺町内出土)	下野市国分寺	不明	TK208	表面採集資料	樽形ハソウ(101)	
市ノ塚遺跡	真岡市高田	集落	TK208	1区SI-825	甕(102)	共伴土器は藤田1999・III期
曲田遺跡	真岡市高田	集落	TK208か	SI-20	ハソウ(103)	共伴土器は藤田1999編年III-IV期. 須恵器は混入品か
赤羽根遺跡	栃木市岩舟町	集落	TK208	13号住居	甕(104)	共伴土器は藤田1999編年III期
成沢遺跡	小山市南半田	豪族居館	TK208か	SD02	甕(105)	共伴土器は藤田1999・III期
向野原遺跡	小山市上野原中久喜	集落	TK208	SI-01	蓋(B106)	
西裏遺跡	小山市田間	集落	TK208	SI-102	坏蓋(107), 甕(108)	
千駄塚浅間遺跡	小山市栗宮	集落	TK208	SI-05	ハソウ(109)	
宮内2号墳	小山市栗宮	古墳(円墳か)	TK208	周溝覆土	ハソウ(110)	
乙女不動原北浦遺跡	小山市乙女	集落	TK208か	K3号住居	甕(111)	共伴土器は藤田1999・III期
清六III遺跡	野木町	集落	TK208~23	SI-237	高坏(112)	
			TK208	SI-428	ハソウ(113)	
菅田21号墳	足利市菅田	古墳(円墳か)	TK208	墳頂部付近	ハソウ(114)	
丸山耕地遺跡	足利市/佐野市	集落	TK208~23か	表面採集資料	坏蓋(115), 坏身(116)	

【参考】栃木県域出土、定型化以降の須恵器例(1)

遺跡	所在地	遺跡の性格	須恵器型式	出土遺構	出土器種・点数	備考
聖山公園遺跡	宇都宮市上 欠町	集落	TK23～47	1号住居	坏蓋(117), 坏身(118)	梁木1998編年VI期, 藤田1999編年V期の 標識資料
			TK23～47	23号住居	坏蓋(119)	
			TK23～MT15か	B区30号土坑	坏蓋(120)	
雷電山遺跡	宇都宮市江 曾島町	集落	TK23頃	SI-07A	坏蓋(121)	梁木1998編年V期, 藤田1999編年IV期の 標識資料
			TK47頃	SI-01, 05	坏蓋(122), 坏身(123・ 124), ハソウ(125)	
塚山南古墳	宇都宮市西 川田町	古墳(帆立貝型 前方後円墳)	TK23	くびれ部付近	甕(126～128), 器台(129), 裝飾付脚付壺(130), 脚付有蓋壺 (131・132), 高坏(133～136), 坏身(137), 二重ハソウ(138・ 139)	
辻の内遺跡	宇都宮市西 川田町	集落/古墳	TK23	1号墳	坏蓋(140・141), 坏身(142・143), 甕(144・145), ハソウ (146・147)	
成願寺遺跡	宇都宮市西 刑部町	集落	MT15	31号住居	坏蓋(148)	
			TK23	3号住居	坏蓋(149)	
大関台遺跡	宇都宮市西 刑部町	集落	TK23-TK10	SI-166, SI-58	坏蓋(150), ハソウ(151)	後世の住居跡覆土への混入品
立野遺跡	宇都宮市東 谷町ほか	集落	MT15～TK10	5区SI-9	坏身(152), 高坏(153)	立野遺跡編年5段階の標識資料
		集落	MT15	5区SI-17	ハソウ(154)	立野遺跡編年5段階の標識資料
		集落	MT15～TK10	5区SI-61	壺(155)	立野遺跡編年5段階の標識資料
		集落	MT15～TK10	5区SK-91	坏蓋(156)	立野遺跡編年5段階の標識資料
権現山遺跡(東 谷・中島地区)		集落	TK23	SG10区SK-621	脚付有蓋壺(157)	
			TK23	SG10区SI-111上 層・SD-42ほか	高坏形器台(158)	
権現山遺跡(北 関東自動車道)	宇都宮市東 谷町	集落/豪族居館 /古墳群	TK23～47	A区SI-036	坏身(159)	
			TK23	B区SZ-003	高坏形器台(160), ハソウ (161・162), 坏身(163・ 164), 高杯(165), 坏蓋 (166～168)	権現山・百目鬼遺跡編年IV期標識資料
			TK47	B区SZ-004	坏身(169), 甕(171)	権現山・百目鬼遺跡編年IV期標識資料
百目鬼遺跡(北 関東自動車道)			TK23	SI-068	坏身(170)	
中島笹塚遺跡	宇都宮市砂 田町	集落	TK23～47か	6区SI-34	坏蓋(172)	
磯岡北古墳群	宇都宮市砂 田町ほか	古墳(円墳)	TK23～47	9号墳	坏身(173), ハソウ(174), 甕(175)	
東谷北浦遺跡	宇都宮市東 谷町	集落	TK23か	SI-80	ハソウ片(176)	
権現山北遺跡	宇都宮市茂 原町	集落	TK23～47	16号住居	無蓋高坏(177)	梁木1998編年VI期, 藤田1999編年V期の 標識資料
字向山出土	宇都宮市富 士見町	不明	TK23～47	表面採集資料	坏蓋(178～185), 坏身(186～198)	

【参考】栃木県域出土、定型化以降の須恵器例(2)

遺跡	所在地	遺跡の性格	須恵器型式	出土遺構	出土器種・点数	備考
殿山遺跡	上三川町上神主	集落	TK23	KT-73	坏身(199), 坏蓋(200)	
			TK23か	KT-82	坏蓋(201)	
			TK23	KT-115	坏身(202)	
東林北遺跡	宇都宮市/壬生町	集落	TK47	KT-1号	坏蓋(203)	
			TK23~47	KT-3号	坏身(204), 高坏(205)	藤田1999編年IV期の標識資料
			TK23~47	KT-6号	坏蓋(206)	藤田1999編年IV期の標識資料
鹿沼流通業務団地内遺跡	鹿沼市上石川	集落	TK23	F I 区SK146	坏蓋(207)	
台畑遺跡	壬生町	集落	TK23~47	SI-01	坏(208)	
(日産工場付近出土)	上三川町	出土地詳細は不明	TK23~47か	表面採集資料	ハソウ(209)	
(大山古墳群周辺地域)	上三川町大山	出土地詳細は不明	TK23~47	表面採集資料	無蓋高坏(210), ハソウ(211)	
井頭遺跡	真岡市下籠谷	集落	TK23~47	8区8号住居	坏蓋(212)	
城内遺跡(真岡小学校敷地)	真岡市台町	集落	MT15	出土状況不明	ハソウ(213)	
大和田富士山古墳	真岡市大和田	古墳(前方後円墳)	TK23~47か	表面採集資料	甕(214)	共伴埴輪は方形透かし孔が皆無. それゆえ5c4/4頃と推定する意見強い
市ノ塚遺跡	真岡市高田	集落	TK23	1区SI-238	坏身(215)	
			TK23	1区SI-930	坏身(216)	
			TK23~47か	1区SI-952	ハソウ(217)	共伴土器は藤田1999・V期
喜沢海道間遺跡	小山市喜沢	集落	TK23頃	5号住居	ハソウ(218)	
			TK23~47	8号住居	ハソウ(219)	藤田1999編年IV期の標識資料
西裏遺跡	小山市田間	集落	TK23か	SI-013	ハソウ(220)	梁木1998編年V期, 藤田1999編年IV期の標識資料
			TK23~47か	SI-028	甕(221)	共伴土器は藤田1999編年V期
			TK47~MT15か	SI-035	ハソウ(222)	
			TK23~47	SI-082	甕(223)	共伴土器は藤田1999編年V期
田間東道北遺跡	小山市田間	集落	TK47	SI-008	坏蓋(224), 高坏脚部か(225)	
寺野東遺跡1号墳	小山市梁	古墳(円墳)	TK23~MT15か	墳頂攪乱中	甕(226~228), ハソウ(229)	共伴土器は藤田1999・V期
清六Ⅲ遺跡	野木町	集落	TK23か	SI-454	坏身(230)	
上敷遺跡	足利市稲岡町/佐野市山崎	集落	TK23	A区1号住居	坏身(231)	
			TK23~MT15か	A区2号住居	坏身(232)	
馬門南遺跡	佐野市馬門町	集落	TK23~MT15か	SI-290	坏身(244), 坏蓋(245)	
			MT15	SI-286	坏身(233)	
			MT15	SI-291	坏身(234~237), 瓶(238・239), 高坏(240), 甕(241)	
			TK10	SI-294	坏身(242), 坏蓋(243)	
乙畑大久保古墳群	矢板市乙畑	古墳(円墳)	TK10	3号墳	坏身(246)	

とちぎの「茶の湯」を考える

—粟宮宮内遺跡出土小壺底部片の検討—

しの ほん ひろ え
篠原 浩 恵

- | | |
|-----------------------|-----------------|
| はじめに | 3. 茶入出土の意味 |
| 1. 粟宮宮内遺跡の概要 | 4. 粟宮宮内遺跡の「茶の湯」 |
| 2. 粟宮宮内遺跡出土施釉陶器小壺底部小片 | 結語 |

粟宮宮内遺跡出土の施釉陶器小壺底部小片を点茶法(抹茶)に用いる「茶入」と推定する。本資料出土の背景には、江戸時代後期の「茶の湯」の町人層への普及という文化史的側面があると考え、「町人の茶」の道具とみる。加えて、同遺跡内から出土する天目碗を「武家の茶」と捉え、「武家の茶」・「町人の茶」との相関関係の可否を考察する。

併せて、遺跡の地理的要因から「茶の湯」の場を振り返り、茶道具が出土する環境に「水」が関わる可能性を提示する。

はじめに

「茶」に関する日本最古の資料は『日本後紀』弘仁六(815)年四月二十二日条とされる。入唐僧永忠が嵯峨天皇に茶を献じた件りである。喫茶は遣唐使の廃止によって途絶えたとされるが、海上交通は盛んであり、断絶はなかったとする見方が強い。それは天台宗を目指した円仁の帰国が新羅の商船であったと言われていることから窺えよう。円仁は栃木県栃木市(旧岩舟町)や壬生町に出自・由縁を持つ、郷土の偉人である。円仁が著した『入唐求法巡礼行記』は、今日の喫茶文化の重要な資料となっている。しかし、栃木県における喫茶文化については、甚だ断片的である。無論、日本の喫茶文化自体も、現在の点茶法(抹茶)の作法の初源を捉えきれていないなど、不明瞭な現状がある。茶会記、往時の茶書(印刷物)、現在に受け継がれる茶道具・美術品はあるが、市井の状況は判然としない。市井の状況を明らかにし得る大きな手掛かりは出土遺物である。しかし、本稿で紹介するような小片などは、茶道具の可否の判別は難しく、想定外の域を出ない。確証がなく、また、微細片であり、報告されない破片の中には、遺跡の性格から茶器の可能性のあるもの、あるいは、茶器の可能性があつて、遺跡の性格に多様性を与えるものがあろう。資料を積み重ね、その可否を判断する材料とすることを目的とし、本遺物の資料紹介を行う。

1. 粟宮宮内遺跡の概要

粟宮宮内遺跡は、小山市粟宮地内に所在する古代～近世を主体とする集落跡である。小山市街の南約3.5km、思川の東岸に位置する。国道4号の西側にあり、集落は現在に引き続いている。遺跡周辺の国道4号は江戸時代に整備された奥州街道・日光街道に沿う。また、遺跡の北約600mに延喜式内安房神社が鎮座、北東4km超に祇園城がある。

遺跡の調査は、平成19～28年度・令和元年度にかけて、4次にわたり行われ、2冊の報告書が刊行されている(吉田2011・篠原2017)。本稿で紹介する施釉陶器底部小片は、平成28年度に行われた3次調査に伴い出土した遺物である。3次調査区は、時期の明確な遺構はなく、近世後半から近代初頭の遺物の出土が多い。本資料が後述のとおり、江戸時代後半の可能性を持つとすれば、遺物の出土状況に整合す

る。近世の粟宮宮内遺跡については、本報告において、日光街道の間々田宿と小山宿との間の街道沿いに形成された集落の一つとする成果が得られている(篠原 2017)。また、安房神社の門前との関わりも留意される。

2. 粟宮宮内遺跡出土施釉陶器小壺底部小片

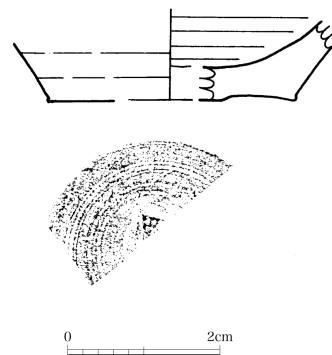
本資料は小壺とみられる底部小片で、茶入と推定する。発掘調査報告書(篠原 2017)には不掲載であるが、「第4章まとめ」において、茶入の可能性が指摘されている。遺構には伴わず、第14号溝状遺構(以下SD-14)に重複する攪乱穴から出土する。SD-14は現在の国道4号に近い3-D区にある。3-D区は、江戸時代の日光街道に推定される現在の4号国道に隣接する1-1区⁽¹⁾の西側に続く調査区である。1-1区・3-D区とも、近世の建物遺構は確認されず、時期不明の井戸跡、時期・用途不明の土坑・小穴が複数基、調査されている。

本資料が出土したSD-14からは、8世紀後半とみられる須恵器有台壺(?), 銭貨「文久永宝」・「寛永通宝」、ガラス片等の20世紀の工業製品などが出土する。現地調査の所見はないが、近・現代のゴミ捨て穴である可能性があり、出土する遺物の本来の所在を推定することは難しい。あるいは調査区外から齎された器物である可能性もあるが、3-D区を含む調査区周辺であることは間違いないとみられる。

本資料は、ロクロ成形で、内面は明瞭な水引痕の上に褐色釉を施す。外面は回転ヘラナデで整形され、無釉である。底部は回転糸切りによって切り離される。底部中央部にはヘラを当てた際に生じたとみられる僅かな粘土の高まりが残る。底径の推定値は[4.0] cm。残存高は(1.3) cm。器厚は体部0.3cm前後、底部は中央部で0.5cmである。胎土は緻密で、微量の白色砂を含む。色調⁽²⁾は内面7.5YR4/4 褐・外面7.5YR5/4 にぶい褐・破面7.5YR6/6 橙。大形の器種を想定することは合理的ではなからう。

内面の底面外周付近は釉が薄く、素地が透けて見える部分が観察できる。6mm×6mmの範囲に径2mmほどの不整な形状が斑らに集まった部分で、体部への立ち上がり部(第1図下から2本目の水引痕付近)の円周上に2箇所が並ぶ。本報告では皿状の器種も想定するが、口径の小さい袋状の器種の内面への施釉が十分でなかった結果と判断できる。

茶入の鑑賞ポイントの一つに、外面下位～底部の無釉の部分、



第1図 施釉陶器小壺底部実測図



参考 肩衝茶入(心明庵所有)

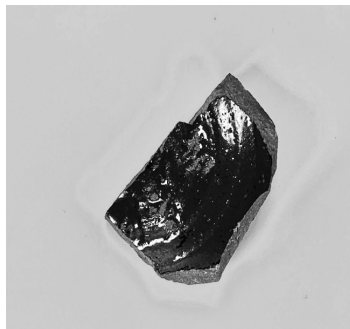


写真1 小壺底部小片
上左:内面 上右:底面
右:体部



「土みせ」と呼ばれる「裾」がある。本資料は、内面は施釉であるものの、外面は無釉であり、「裾」の想定が可能である。同様に、底部のへう切りは「輪糸切」と呼ばれる同心円上に輪を描く鑑賞ポイントになり得る。口径が小さく、小形、内面を施釉する袋状の器種と想定される点と併せて、茶入の条件を備える破片と言える。

本資料は、前述のとおり、遺構に伴わず、共伴する遺物もない。その年代については明らかにし得ないが、釉がガラス質化する点、破面が赤化する点などから、江戸期と考えられる。強いて推定するならば、後半期の可能性が高いであろう。産地は、胎土の質感からは美濃産とも見えるが判然としない。瀬戸・美濃産の範疇の可能性があろう。底部形状、産地の推定からは、肩衝の和物茶入と考えられる。

3. 茶入出土の意味

茶入は点茶法(抹茶)で供する「濃茶」を入れる陶製の小壺であるが、古来より「茶の湯」の道具として用いられてきた。「茶の湯」とは「一服の濃茶を差し上げるために趣向をこらして客を招く」(田中 1993)ことであり、正式な茶会を「茶事⁽³⁾」と呼ぶ。小間の「わび茶」を旨とするもので、現在の「大寄せの茶会」とは趣を異にするものである。現存する「会記⁽⁴⁾」は、茶器として、「茶入」を記すものが多い。

本資料の推定時期である江戸時代には、「茶の湯」は男性を中心に行われてきた。女性は公家・大名家の家族、遊女など限られ、広く普及するのは、明治時代の「女礼式」によるとみられている。江戸時代後半になると世の中が安定し、富裕な町人層が台頭する。これに伴い、禁中・公家、武家によって担われてきた茶の湯は町人層に浸透し、急激な茶道⁽⁵⁾人口・地域の拡大を生む(利休百五十回忌 寛保元(1741)年以降)。この現象に対応し、七事式⁽⁶⁾などの「広間の茶」が茶の湯に取り込まれいく。

本資料が江戸時代後半の可能性が高いとすれば、茶の湯の拡大に伴う器物であろう。小間にしろ広間にしろ、茶の湯に稽古が伴うことは疑いないが、本資料が茶会用であるのか、稽古用であるのかは推定できない。所有者は裕福な数寄者と想定することが無難であろう。「宿」のように人が留まる場所ではない集落跡への茶の湯の普及を示す資料といえる。

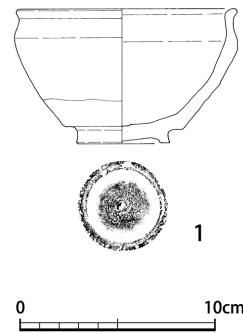
4. 粟宮宮内遺跡の「茶の湯」

粟宮宮内遺跡の「茶の湯」を考える際、留意すべきは、調査区内から出土する天目碗である。5片が出土し、SE-77⁽⁷⁾出土破片は16世紀後葉～17世紀前葉の美濃系、SE-209⁽⁸⁾出土破片は17世紀前半の瀬戸・美濃系、SK-104⁽⁹⁾・SD-364⁽¹⁰⁾・3次調査遺構外出土片は近世の国内産と推定されている。天目碗と本資料を繋ぐ時期の茶道具の出土は現状では確認されていない。本遺跡には、戦国時代末期～江戸時代初頭と江戸時代後半との2度の茶の湯の画期があったと考えておきたい。

天目碗は中国由来の格の高い茶道具で、16世紀の茶会記に多くが記される。時期的に「武家の茶」の器物と言える。粟宮宮内遺跡と「武家の茶」を繋げるものは、中世の地方豪族から起った小山氏の居城である祇園城であろう。祇園城は、天正3(1575)年の落城に伴う小山氏の滅亡後、本多正純が入封し、元和5年(1619)年の宇都宮移封に伴い廃城となるが、SE-77・SE-209出土の天目碗は本多正純の居城時期にあたる。17世紀とみられる天目碗が出土したSE-209のある調査区の北西は、祇園城周辺に続く「奥大道⁽¹¹⁾」の推定ルートにあたることを鑑みれば「武家の茶」に関わる茶道具とみることは可能であろう。遺物の出土状況から、茶の湯の2度の画期を想定せざるを得ないが、「武家の茶」の素地があつての「町人の茶」であるのか、「武家の茶」と断絶した「町人の茶」であるのか、その相対関係の可否は興味深い。

更には歴史的事象に加え、地理的要因も鑑みる必要がある。本資料・天目碗は建物跡の確認されない

遺構配置中にあるが、出土する調査区には、掘削の過程で滞水する井戸跡や、降雨等の保水によって水が浸み出す溝状遺構がある。調査区内には複数の井戸跡が確認されるが、同じ水脈を狙った可能性が指摘されている(篠原 2017)。調査区に近い安房神社の境内には「水神社」が祀られており、遺跡周辺が「水」に関わりあることが予見される。「水」は集落跡にとって不可避な条件であるが、茶の湯にとっても、喫茶という性質上、不可分な関係にある。複数の井戸跡や水神社は、必ずしも、水が豊かであるとか良質な水であるとかを示すものではなく、逆説的に、その希少性を現すとも考えられる。いずれにせよ、本資料の出土が、「水」という地理的環境を背景に存在し得た遺物である可能性を考えておきたい。



上：写真2 SE-77 出土天目碗
左：第2図 SE-77 出土天目碗
実測図

結語

本稿では、出土遺物を「茶の湯」の道具とみ、出土の背景を「茶の湯」の文化史的側面に求めた。令和2年度以降に続く発掘調査から、より詳細な遺跡の性格が明らかになれば、本資料を「茶入」とすることを見直すことが必要になることもあろう。しかし、「とちぎの喫茶」の詳細が明らかになることを期し、本資料のような想定外の域を出ない小片であっても、資料が蓄積されることを願い、本稿を記す。

謝辞

本論を執筆するにあたって、築博仙先生、池田敏宏・篠原祐一・篠原咲陽各氏より多くのご助言・ご指導を賜りました。また、作図にあたっては小林順子・根本弥幸各氏のご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。末筆ではありますが、御礼申し上げます。

【註】

- 註1 1-1区は平成19年度に現地調査を行い、平成23年度に報告書が刊行されている(吉田 2011)。
- 註2 色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修 1996年版)を参照した。
- 註3 「茶事」とは、「濃茶の味を最も美味しく味わってもらうために」、「ごく質素な亭主の手料理(懐石など)や菓子などを出す茶会で、「客を限定し時間もたっぷりかける」。現在では、詳細な手順が決められている。亭主(招く側)は、茶会の目的に相応しい道具組で客を迎えるが、見識・知識・機智・機転を必要とするもので、「亭主の心入れに応える」ことのできる客を選ぶとされている。「小間」を重んじるため、客は数人程度の少人数となる(「内」は田中 1993による)。
- 註4 「会記」とは、「茶会の日時・場所・道具立て・会席膳の献立などを記したもの。茶会に参加した人名を記す場合もある。特に、古い茶会記は文献資料として貴重。」「(『コトバンク』)。「茶会記」。
- 註5 「茶道」とは、「茶の湯によって精神を修養し、礼法を極める道」(『デジタル大辞泉』)。江戸時代後半に町人層への「茶の湯」の普及に伴い、精神性や創意工夫が薄れ、「手習い」化することと画したものとされる。
- 註6 「七事式」とは、「八畳の広間で一度に5人以上の人数を対象として行われることを原則」(谷 2007)とする。現在

の「大寄せの茶会」とは異なる。

註7 SE-77 は2次調査Ⅲ-3区に位置する(篠原 2017)。

註8 SE-209 は3次調査A区に位置する(篠原 2017)。

註9 SK-104 は2次調査Ⅰ区に位置する(篠原 2017)。

註10 SD-364 は3次調査B区に位置する(篠原 2017)。

註11 奥大道とは、鎌倉から陸奥湾までを結ぶ中世の幹線道路である。栃木県域は鎌倉街道中道の推定ルートにあたる。粟宮宮内遺跡周辺での使用年代を14～16世紀とする推定がある。

[参考文献]

篠原浩恵 2017 『粟宮宮内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第386集 栃木県教育委員会・(公財)とちぎ未来づくり財団

田中仙翁 1993 『茶道入門ハンドブック』三省堂

谷端昭夫 2007 『よくわかる茶道の歴史』淡交社

吉田 哲ほか 2011 『千駄塚浅間遺跡・粟宮宮内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第336集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団

研究紀要 第28号

発行 公益財団法人 とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化センター

〒329-0418

栃木県下野市紫 474 番地

TEL 0285 (44) 8441 (代表)

FAX 0285 (43) 1972

HP : <http://www.maibun.or.jp>

発行日 令和2年3月30日発行

印刷 株式会社大塚カラー
